

YUN-KANG

VOLUME V

雲岡石窟

第五卷

PUBLICATION OF THE JIMBUNKAGAKU KENKYŪSHO

YUN-KANG

THE BUDDHIST CAVE-TEMPLES OF THE
FIFTH CENTURY A.D. IN NORTH CHINA

DETAILED REPORT OF THE ARCHAEOLOGICAL
SURVEY CARRIED OUT BY THE MISSION OF THE
TŌHŌBUNKA KENKYŪSHO 1938—45

PROFESSOR SEIICHI MIZUNO
AND
PROFESSOR TOSHIO NAGAHIRO

VOLUME V
CAVE EIGHT
TEXT

JIMBUNKAGAKU KENKYUSHO
KYOTO UNIVERSITY
MCMLI

京都大學人文科學研究所研究報告

雲岡石窟

西曆五世紀における佛教寺院の
考古學的調査報告
昭和十三年—昭和二十年

水野清一

長廣敏雄

第五卷

第八洞本文

京都大學人文科學研究所

1951

例 言

本書は『雲岡石窟』全十五巻のうち、第五巻にあたり、第八洞の調査と研究とをまとめたものである。

この洞は、昭和14, 15年(1939, 40)に羽館易氏が岡崎卯一氏あるひは戌亥一郎氏を助手として寫眞を撮影し、昭和15, 16年(1940, 41)に北野正男氏が測量を完成した。拓本は昭和13年(1938)徐立信氏が作製し、洞前の發掘も同年におこなつたものである。

本書の記述は著者二人の共同執筆である。用語體例等については、主として、さきに刊行した『響堂山石窟』(1937)『龍門石窟の研究』(1941)に據つてゐる。英文翻譯は國立博物館の原田治郎博士の手を煩はした。その校正には本所の教授岩村忍氏および、日佛學館々長代理エリセエフ氏の援助をうけた。

本巻の刊行は、本所の出版費と、文部省學術成果刊行費とをもつてはじめ、その後、文部省當局および京都大學の配慮の下に、すくなからぬ經費をうけて達成されたものである。

以上の諸氏、ならびに諸機關に、心からの感謝の辭を捧げるとともに、過去十數年間の調査と研究に、有形無形、さまざまの援助をあたへられた數多くの人々に對し、さらに本巻の編輯に獻身的努力をはらはれた齋藤菊太郎氏その他に對し、深甚の謝意を表したい。

1951年1月

水 野 清 一

長 廣 敏 雄

目 次

序 章	雲岡石窟の調査概要	I
第一章	第八洞 前室	7
第二章	第八洞 主室 北壁	11
第三章	第八洞 主室 東西壁	14
第四章	第八洞 主室 南壁	20
第五章	第八洞 主室 天井	24
終 章	第八洞の特徴	27
圖版解説	第八洞	39

實測圖目次

I. 第八洞平面圖	5
II. 第八洞斷面圖	5
III. 第八洞正面圖	5, 9
IV. 前室南壁測圖	8
V. 前室東壁測圖	8
VI. 前室西壁測圖	9
VII. 第七, 第八洞間隧道展開圖	8
VIII. 前室, 主室間拱門測圖	10
IX. 主壁北壁測圖	11
X. 主室東壁測圖	14
XI. 主室西壁測圖	14, 19
XII. 主室南壁測圖	20
XIII. 主室天井測圖	24

拓本目次

I. A 六天龜楣飾(主室南壁中央)	21, 34
B 唐草文帶(主室東壁第二, 第三層間)	14, 34
C 唐草文緣飾(主室南壁拱門)	20, 34
II. A 蓮華拱柱(主室南壁拱門西)	20, 34
B 蓮華拱柱(主室南壁拱門東)	20, 34
C 蓮華座と唐草文帶(主室南壁第三層東龜)	23, 34
III. A 奉華飛天(主室東壁第二層南龜)	17
B 天井蓮華文(第七, 八洞間隧道)	8
C 渦卷拱柱と拱端龍形(主室東壁第二層)	16
D 楣拱飾唐草文(主室南壁西龜)	24, 34
E 層柱と唐草文帶(主室東壁第一層)	17, 34

挿 圖 目 次

第一圖	石窟測量の圖解	4
第二圖	第七,第八洞平面圖	6
第三圖	隧道天井 飛天浮彫	9
第四圖	主室北壁 左脇侍 半跏菩薩像	13
第五圖	主室東壁 降魔龜	18
第六圖	傍柱の各種	20
	第八洞 ; a) 拱門西脇 b) 拱門東脇 c) 東壁第二層中央 d) 南壁第二層西龜 中央アジア ; e) キジイル合唱洞樂天列龜傍柱	
第七圖	主室南壁供養天像	22
第八圖	天井略圖	25
第九圖	第八洞佛手相各種	28
	a) 舉手形1 b) 舉手形2 c) 舉手形3 d) 俯手形1 e) 俯手形2 f) 捻手形1 g) 捻手形2 h) 捻手形3	
第十圖	第八洞菩薩手相各種	29
	i) 舉手形 j) 思惟形 k) 捻手形 l) 俯手形 m) 俯手形	
第十一圖	キジイル菩薩頭部(天馬洞後壁)	31
第十二圖	柱頭飾各種	32
	a) 雲岡第八洞東壁 b) 龍門古陽洞南壁 c) 敦煌第百十一洞 d) 敦煌第百十二a洞 e) キジイル財寶洞 f) キジイル合唱洞 g) バアミヤアン53m大佛洞 h) バアミヤン カクラク八角洞 i) アジャンタ第十七洞	
第十三圖	藤座の變遷	33
	圓形 ; a,b) ガンダアラ c,d) ベグラム e,f) キジイル航海者洞 g) 雲岡第八洞 明窓西側 菩薩立像 h) 雲岡第八洞龜傍柱 方形 ; i) マツラア j) キジイル洗足洞 k) 雲岡第一洞北壁右龜	
第十四圖	第八洞蓮華文唐草文帶	35
	a) 斜蓮華文,三つ葉四出文 b) 斜蓮華文,正蓮華文 c) 蓮瓣文 d) 環狀つなぎ文 e) 半バルメット波狀文1 f) 半バルメット波狀文2 g) 半バルメット並列文1 h) 半バルメット並列文2	
第十五圖	ガンダアラ菩薩頭	53
第十六—二十八圖	天井圖版説明圖	56—59

序 章

雲岡石窟の調査概要

1

われわれが華北の石窟寺院を調査しようとかんがへたのは、考古學徒としてひとつの大きな理由があった。それは地に即した遺物を研究したいといふことであつた。つまり遺蹟の研究であるが、あのころでは、われわれ外國人がシナの土地で發掘調査するといふやうなことは、のぞむべくもないことであつた。それで發掘しなくても研究のできる遺蹟といへば、石窟寺院がもっとも都合のよい研究對象であつた。1936年春、われわれは河北と河南の省境にある北齊時代(550—677)の響堂山石窟^{Hsiang-t'ang-shan}を一週間調査した。河南省洛陽南郊の、北魏から唐代(494—750)にわたる龍門石窟^{Lung-mên}を一週間調査した。それらは、ともに、とりいそいだ調査であつたけれども、なにぶん治安情況のわるいことゆゑ、まことにやむをえないものがあつた。それで、そのまゝその結果をとりまとめて調査報告書『響堂山石窟—河北河南省境における北齊時代の石窟寺院』を1937年に、『龍門石窟の研究』を1941年に出版した。

1936年の調査について翌37年、山西省大同西郊の雲岡鎮^{Yün-kang}にある北魏時代(460—534)の石窟を調査しようと計畫した。それは華北諸石窟のうちで最古のものであるばかりでなく、最大のものであるからであつたが、もうひとつの小さくない理由は、この地がまったく平穩無事で、治安の上の心配がすこしもないからであつた。しかし、なほかんがへてみると、この華北最大にして、また最古の石窟は、その西方文化の色彩が濃厚な點において、またその明朗瀟灑な人間的表現のしかたにおいて、種々問題をもつてゐるし、またひろく喧傳されてゐる。それにもかゝらず、なんら根本的な學術調査はおこなはれてゐなかつた。1902年、伊東忠太博士は學者として最初の足跡をここに印され、1907年、フランスのエデュアル・シャヴァンヌもこれを調査した。その後、いくたの學者がこゝをおとづれ、いくつかの業績が公にされてゐる。そしてその起源問題をめぐつてガンダラ説、グプタ説、あるひは中央アジア説、乃至もろもろの折衷説が提出されて學界をにぎはした。木下奎太郎すなはち太田正雄博士は、その間にあつて『大同石佛寺』(1922年刊)をあらはし、美術觀賞の立場からその價值を説かれた。そのうちシャヴァンヌの *Mission archéologique dans la Chine septentrionale*, Tome. 1 (Paris, 1909, 1915) と、關野貞博士の『支那佛教史蹟』第二卷(東京1925, 1926年刊)とは、もっとも多くの一とびとの依據するところであつた。けれども、これらがなほ不十分なものであることは、その調査された時代、その調査の意圖をかんがへれば當然な

ことであった。いはば、あの廣大な雲岡石窟は、われわれ考古學徒の基本的調査をまち受けてゐたのであった。

けれども、1937年は不幸な年であつた。春ごろから、日華間の空氣がだんだんと騒々しくなつていった。われわれは大陸にわたる機會をまち受けてゐたけれども、とうとう七月七日には盧溝橋事件がおこり、それが「日華事變」にまで進展して、つひにゆけなくなつてしまつた。たゞかうした動亂のなかにもかゝはらず、大同の石佛に對する保護命令が發せられ、適宜な處置がとられたことは、せめてもの幸であつた。そして約一年おくれた1938年の春、玉河のまだとけやらぬ氷をながめながら、その目的地、雲岡石窟をおとづれることになった¹⁾。けれども著者の一人長廣は事變がわざはひして、つひにゆくことができなかった。たゞをりよく北京に留學中の小野勝年氏が同行して測量發掘等をたすけられ、寫眞の技師羽館易氏も、その助手米田太三郎氏といっしょに撮影にあたられ、北京の拓工徐立信氏も拓本の製作をひきうけられた。それで、これに水野をくはへた總勢五名が四月十四日から作業をはじめ、六月十五日にいたつて一應作業を終了した。なにぶん、このころはまだ治安の確立しないときであつたから、雲岡鎮の警備隊にあてられてゐた雲岡別墅の一隅に泊めてもらひ、その一廓である第五洞、第六洞をもつぱら調査した。

翌1939年からは長廣も參加することができた。そして京城博物館の有光教一、米田美代治の二氏、當研究所からは北野正男、岡崎卯一の諸氏があらたに參加した。そして總員八名が石佛寺の一屋にとまりこみ、主として第七洞、第八洞、第九洞を調査し、その調査は八月一日から十月十五日におよんだ。かやうにして調査は翌年も翌々年も、終戦の前年までつゞき、京城博物館からさらに杉山信三氏、京大工學部からは鈴木義孝氏、そして當研究所からは鹽田義秋、山内啓藏、高柳重雄、戌亥一郎の諸氏がいりかはり立ちかはり參加した。たいてい夏から秋にかけた三個月乃至六個月が、その時期であつた。調査の回数は1938年から1944年まで合計七回、その間第一、第二、第三、第五—第十一、第十三、第十六—第二十洞の諸大洞を調査した。そして1945年にかけた冬は、なほ残るしごとをつづけて高柳重雄氏が一人こゝにとゞまり、第八回の調査を企圖しつつあつたが、つひに戦局が最後の段階にはいつたゝめ、その實現をみなかつた。そして最後まで調査にしたがつた高柳氏は、敗戦ののち、1946年二月に復員歸來した。

¹⁾ これらの調査に關する詳細は、その都度「雲岡石窟調査記」と題し、當研究所の『東方學報』において發表した。昭和十三年度は第九冊、昭和十四、五、六年度は第十三冊一分、昭和十七年度は第十三冊四分、昭和十八年度は第十四冊四分、昭和十九年度は第十五冊二分に發表した。また全調査の概要は、水野の執筆した『雲岡石佛群』(1944年朝日新聞社刊)において豫報された。

拓本についてはほとんど困難はなかった。拓工徐立信君は響堂山石窟の調査にも同行したし、北京における拓本の蒐集も手つだってくれた。われわれの仕事を充分にのみこんでゐたので、命ずるまゝに毎日しごとにうちこみ、1938年から1940年にいたる三回の調査で、ほとんど各洞にわたる拓本を完了してゐた。それでも、なほできれば、もう一度、最後の年にでも、くはしく點検して、足りないものは補ひたいとかんがへてゐたが、それだけはついに實行できなかつた。最初の年は足場が足りなくて困つたが、次年度からはいくらか改善された。それは大同の商務會が協力して材料を貸してくれたからである。

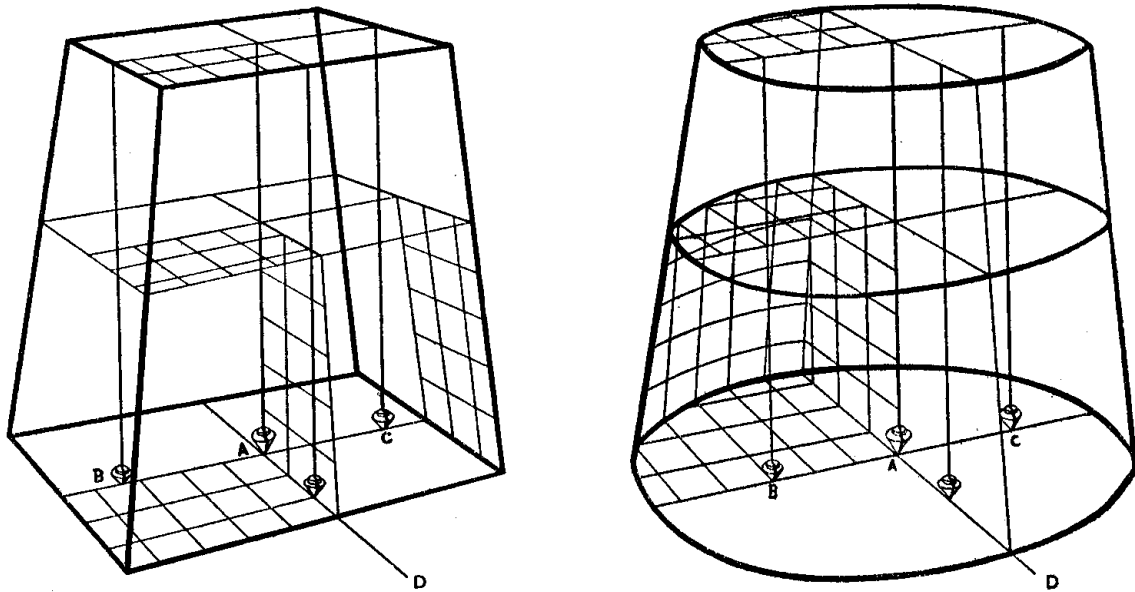
寫眞についての困難は第一に光であつた。響堂山、龍門兩石窟の調査には、もつぱらカーバイト・ランプをつかつたが、雲岡においては石窟が大きいと補助の程度にしか役たゝず、おもな光はどうしても日光にたよるほかはなかつた。それで鏡と障子とを利用して反射に反射をかさねて洞内にみちびき、必要な光線にした。鏡と障子とは村民を傭つてもたせたが、野良しごとに慣れたかれらには、そのこつが容易にのみこめないらしかつた。足場の不足はこゝにもあつたが、次年度からはかなり寫眞のための足場がつくられた。それには大同から藩三といふ男をやとつてきた。

寫眞撮影に關するもうひとつの困難は掃除であつた。長年のあひだに溜つた、こまかい土があらゆる像の上をおほふてゐる。手をおくとすつぽり指がうまつてしまふほどの土である。これを拂ひおとすと、そのこまかい土ぼこりが、しばし、たちこめて、しづまるまでかなりながい時間またなければならなかつた。それに、はらひおとした土は、決してばかにならぬ量であつた。その上、ちらばつた煉瓦や土塊や石片まで、とりかたづけてしまふには、ちよつとした發掘ほどのことをしなければならなかつた。しかし、1940年、石窟内部にすむ村民たちを洞外に移轉させてからは、かなり掃除もゆきとゝいたので樂になった。

測量はいまゝでの經驗があさかつたので苦勞した。それに測量具といつても、初年度には五間梯子二つと、釣竿を改造した測量竿しかもたなかつた。だから、できたものも測量による製圖といふよりは、寸法を記入したスケッチといふ程度のものであつた。しかし、次年度からは、しだいに改良された。それに足場もやゝゆたかになつていった。各洞の基準線をはつきりときめて測量するやうになつたので、やゝ精密になつた。その上、人夫たちもだんだん慣れて、その方法をのみこんだものだから、最後の數年間は非常に樂になつた。主な石窟は七回の調査中にたいてい測つた。全然手をつけなかつたのは第十二洞、第十四洞、第十五洞と西方諸洞である。これも假すに、もう幾年かの年月をもつてすれば、だいたい終るものとおもはれてゐた。それから地形圖と分布圖は1940年

度に原田仁氏の手でつくられた。

さて、その最後に確立した測量の方法であるが、それはかうである。まづ曇曜五窟のごとき圓形圓頂の石窟であるならば、第一に窟内三尊の鼻端に測量竿をあてる。こゝから、おもりのついた垂直線をたれて、その點Aを床にしるした。つぎに二脇佛の鼻端から垂線をおろして點B、Cとする。それから線BCへ直角にまじはる線ADをつくる。さうしたうへ天井のあらゆる點を垂球の線で床におとしてくる。それをBCとADの主軸から測る。測った點を方眼紙に記入し、その點をつないで圖像をゑがく。周壁については、まづそのBC、ADに立つ垂直の面をかながへる。そし



第一圖 (Fig. 1) 石窟測量の圖解

て、そのBCに立つ垂直面に南壁と北壁とを投影してゑがき、ADをふくむ垂直面に東壁と西壁とを投影してゑがく。われわれはこのBC、ADに平行な面をいくつもこしらへた。(Fig. 1) さうすれば、そこからまがった壁面でも、うきだした像でも、容易に、そして正確に測れる。もちろん、このほかに一定の場所に水平の主軸が必要である。そして、その水平基準が各洞に共通であれば、なほさら、さいはひである。

なほ、それが第七洞、第八洞のやうな方形平頂の石窟ならば、もっとかんたんである。天井の測量はおなじ方法であるが、四壁の測量は一々中央の假想垂直面に投影しないで、いくつかの垂直面さへつくれば直接に測ることができる。

スケールは原則として1:20であつたが、1:10で測つたこともある。部分圖になると1:10、あるひは1:5の圖をつくつた。まづ現場では方眼紙のうへに記入し、のちこれをケント紙にうつしたのである。

3

第八洞は1938年に拓本をつくり、1939年に寫眞撮影を了し、1940年と41年にわたって測量した。比較的順調に調査することのできた石窟である。はじめ窟内にはさうたうに、土や石塊が溜つてゐた。窟外のすみにも崩壊した建物の瓦や磚が堆積してゐた。入口はあとからつけた粗末な石づみの壁があつた。これをとりのぞいて、門わきのうつくしい浮彫神像を撮影することができた。それから後壁上下の大龕は泥土により後世の大修理がしてあつた。それは俗惡をきはめること、いま下層本尊にみるごとくであるが、そのみでなく、その補修の泥土がくづれおち、堆積し、實に慘憺たるありさまであつた。まづ、これらを掃除したが、下層本尊は泥のしたの石像も、ほとんど摩滅しつくして心ばかりしかないのもので、そのまゝにした。龕のまへの石をつんだ壇もそのまゝに残した。いま後壁大像にみる點々たる小孔は、その泥をもたすための棒ぐひの孔である。

明窓の石づみの壁は寫眞撮影のために、とりのぞきたかつたが、とりのぞいたあとの施設をかんがへずには、それを實行することができなかつた。しかし、第七洞とのあひだにある隧道はあけた。これはおもひがけない發見で、この二つの石窟が一對であることが、これでまづ確實になった。それから1938年には、この石窟のまへに南北のトレンチを掘つた。洞口から15.00mのところ崖のはしがあり、そこから幅1.00mのトレンチを掘つた。トレンチの長さは14.00m。1.00mあまり下はまったく碎石の層、そのあひだにまゝ瓦をみるが、大部分あたらしいものばかりで、べつにこの石窟に關するあたらしい知見をもたらさなかつた。

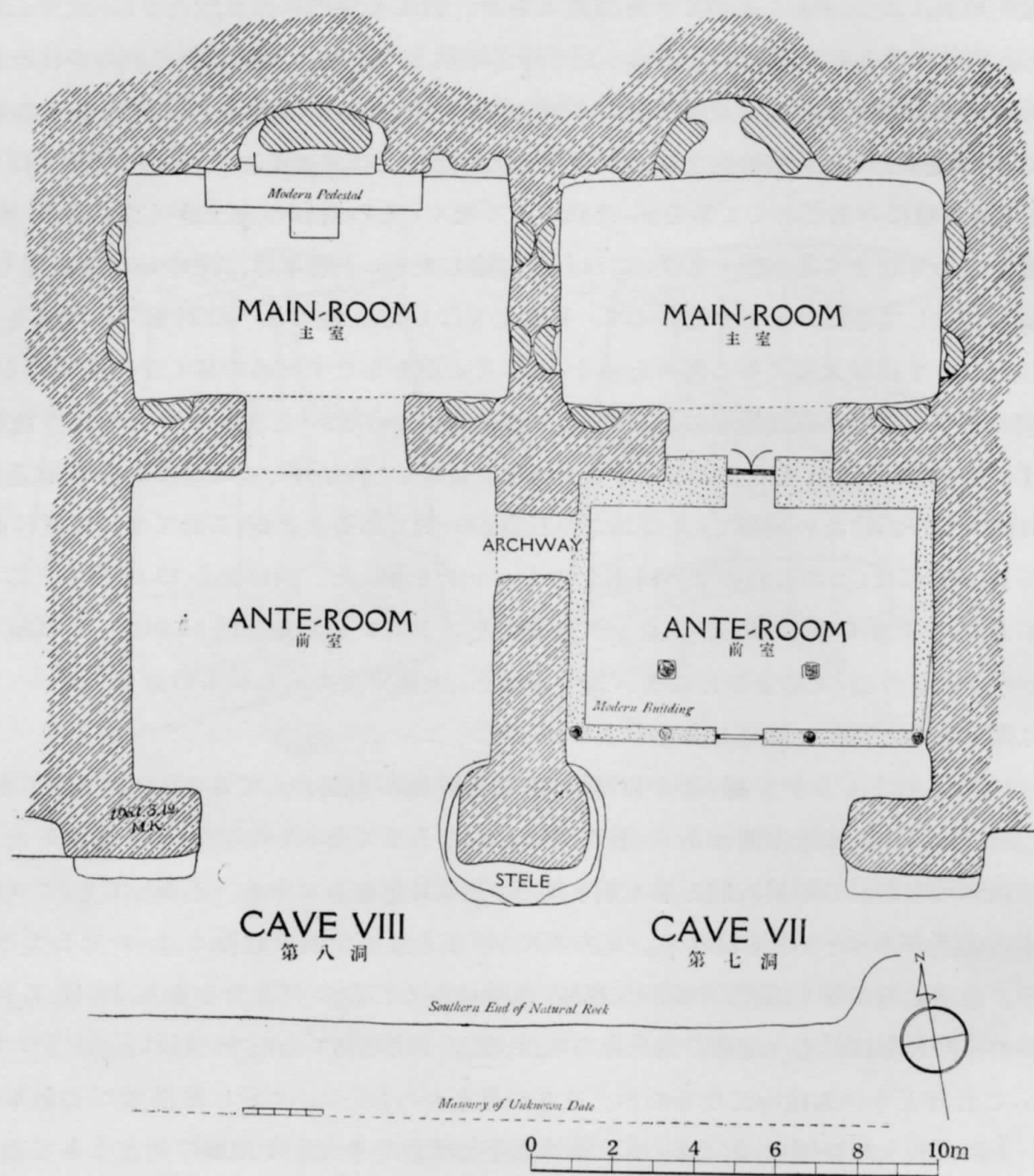
いったい、このトレンチを掘つたのは、洞外にある建物の問題からであつた。いま第五洞、第六洞、第七洞には、洞外に木造樓閣があり、第八洞にも近ごろまであつたらしく、その崩壊した瓦磚が洞外に堆積してゐた。この第八洞と第七洞とは、前室が天井なしである。どうしても、こゝには最初から木造建築があつたとおもはれる。もちろん、いまある第七洞の建物とは、おなじでなかつたであらう。前室北壁にみる四段の列孔と、東壁、西壁にみる二段の列孔をみると、極（たるき）をうけた孔のやうにおもはれる。北壁の大きな方孔は、梁をうけた孔であらう。けれども、さうすると、いったい、これはどういふ建物になるのか。三方に葺きおろした、かけだし屋根のごときものであらうか。それに最大の疑問は、第七洞、第八洞外壁上部にわたる大きな山形の切りこみである。これはいったい、どういふものになるのか。二つの洞にまたがり、妻を正面にしたやうな建物であつたのであらうか。その屋根と小さい列孔、大きな方孔列のくみあはせが、いま、なんとも解釋できないのである。しかし、たゞ建物があつたといふことだけは、みとめなければならないであらう。

(PL. 1)

主室と前室との間には床のうへに、なんらのしきりがない。しかし、そのあたりから17.00mにして切石の石づみになる。こゝから急におちこんでゐるわけであるが、第九洞、第十洞まへでは

雲岡石窟第八洞

洞外14.00mに切石をしいて斜面をつくってゐる。こゝにはさういふ施設があったのか、なかったのか、發掘が不充分だったので結局わからないでしまった。



第二圖 (Fig. 2) 第七, 第八洞平面圖

第 八 洞

第 一 章 前 室

第八洞は隣接する第七洞と一對をなす石窟である。したがって、第八洞の調査および研究は、第七洞と相關連させ、對比させながらすゝめねばならない。いま第七洞には「西來第一山」の扁額があり、第八洞には「佛籟洞」の扁額がかゝってゐる。また第七洞は前室に木造樓閣がたつてゐるが、第八洞では建物がまったく崩壊してゐる。現在の石佛寺伽藍は第五洞、第六洞まへが中心で、この第八洞までをふくみ、これ以西は伽藍區域のそとになる。第七洞、第八洞が當初一對窟として開鑿されたことは、だれも氣づいてゐなかつた。

第八洞の記述のまへに、兩窟の相關關係を一應指摘しておかう。この兩窟は南面して相隣接してゐるのみならず、その窟構造がまったく同一の計畫によつてゐる。さらに、くはしくいふならば、兩窟はあたかも横にならんだ双生兒のごとくである。兩窟は別々の室をつくつてゐるが、合して一となすべき石窟體制をなしてゐる。

- (1) 規模と平面圖の一致。前室には兩窟の中間に大石柱があり、左右兩端に同形の塔のごときものを彫りだしてゐる。(PL. 1)
- (2) 前室壁面の照應。この東壁が千佛列龕であるのに對し、第七洞西壁が千佛列龕であり、第七洞東壁が浮彫本生圖であるのに對し、この洞の西壁が浮彫本生圖である。(PL. 5-7)
- (3) 主室。佛龕配置の一致と照應。北壁大龕二段、東西南壁四段八龕の佛龕配置が一致し、北壁龕内尊像の配置は、また、たがひに照應する。
- (4) 兩石窟を連結する隧道の發見。(PL. 5, 8)

かくのごとく、この兩洞の一雙であることは、うたがひない。この石窟が一雙窟であることが理解されると、これによつて、いろいろの點が容易に説明されるであらう。

〔前室〕 第七洞とおなじく前室と主室とからなり、ともに長方形の平面である。前室には特別に門口も天井もない。前室と主室とのあひだには、拱門があつて兩室をつないでゐる。前室の東壁は第七洞と共通の岩壁であり、基部に大きな獸形がある。その他の部分は風化のために消えてしまつて、グロテスクな岩肌をみせてゐる。横幅はさうたうにある。上から下まで増減がない。そしてわりにうすい。下の獸形が龜趺を想像させるので、(PL. 5, Plan III, V) 石碑ではなかつたかとおもふ。さうすると随分と雄大な石碑である。その内壁、つまり、前室の南壁にあたる部分は幅1.00mしかない。がんらい、こゝには東壁より延長した圖像、すなはち千佛龕があつたものらしい。外壁西端のつくりだしは、第七洞東端におなじく上ぼそりである。五層または七層の塔で、たかい

相輪があったのかとおもふ。これも、また、はなはだしく破損してゐて、層位のほどはわからない。

前室はほぼ方形の平面をなし、東西の幅、南端で8.64m、北端で8.96m、南北の幅、東壁ぎわで7.16m、西壁ぎわで7.60mを算する。つまり、厳密な方形にはなつてゐない。そこに雲岡石窟の特色がある。前室には天井がない。これは第七洞とおなじであるが、どういふ必要で天井をぬいたか、あきらかでない。天井がぬけてゐるだけでなく、前面もまったく吹きはなしである。前室といつても、東西北の三壁にかこまれたゞけである。南壁は東側で1.00m、西側で2.00mの袖をもつてゐるにすぎない。各壁は垂直に切りたつてゐる。(PL. 1-3)

東壁は第七洞の西壁と背中あはせである。その壁面の圖像はひとしく千佛の龕列をかさねたものである。西壁はほとんど剥落してゐるが、その残存部と第七洞の東壁とは構圖が相應し、ともに本生の浮彫であることがあきらかである。

〔東壁〕地上より2.90mまでの部分には、二段に供養者の列像を浮彫してゐる。この供養者像は兩段ともほぼおなじ大きさに、高さ0.92乃至0.98mを算する。その下に臺のやうに、せまい幅の一帯があり、こゝには手をあげ、足をあげた躍動天人の列像があつたらしい。列像はみな、ほとんど溶けてしまつてゐるが、上の二段は僧俗兩様の供養者であることがわかる。(PL. 5, Plan V) この列像の左方、北壁ちかくには、第七洞へ通ずる隧道がある、これは、もと土壁でふさがれてゐた。高さ2.46m、地上における門の幅1.60m、最大幅員2.04mである。このトンネルの發見により、第八洞と第七洞との隔壁のあつさが判明した。現状では第八洞の壁面が風化してゐるが、これを復原すると隔壁のあつさは、トンネル頂點において1.86mを算する。トンネル内の側壁には、二人づゝの供養者立像が彫つてある。このトンネルの天井には中央に外徑0.70mの二重蓮瓣を浮彫にする。蓮瓣の東西には二體づゝの飛天が浮彫されてゐる。これらの彫刻は、あきらかに北魏雲岡式のものに相違ない。(Fig. 3) このことは、このトンネルが決して後代にひらかれたものでないことを證明してゐる。すなはち第七、第八兩洞をむすぶ目的で、石窟開鑿の當初から計畫されてゐたものとおもはれる。(PL. 8, 9, Plan VII)

二段の供養者列像の上2.90mのところから、千佛の層がはじまり、現在では佛龕十一段がかぞへられる。しかし調査の結果は、當初すくなくも十八段あつたものと推定された。各龕の高さは0.40mである。そして、下よりかぞへて第三、第四段には、二段にわたる大龕、高0.90m、幅0.74m、二個をを左右に配し、第九、第十段には同形の龕一個を中央に、また第十五、十六段には二個を左右に配して彫つてゐる。小龕は一段に二十四配列してゐたとおもはれるが、いまは壁面のあちこちに點在して残つてゐるにすぎぬ。その龕形、および佛像のさまは、第七洞の西壁によってほぼ察することができる。(Plan V)

この壁には、高さ8.00m乃至8.20mのところと、高さ13.00mのところに、小さい圓孔が點々とならんでみとめられる。後世のある時期に木造架構のあつたことを想像させるに充分である。果

して、さうだとすると、この梁孔、小圓孔などは案外あたらしい造作といふことになるであらう。

〔西壁〕 西壁も上下二部分からなり、東壁とおなじく、腰壁には現世の供養者列像二段と、せまい天人供養者像一段とがある。供養者立像は身長約1.00mあり、主室の方にむかひ、手に莖のながい蓮華をもっている。(Plan VI)



第三圖 (Fig.3) 隧道天井飛天

上の部分は數段からなる横帶狀の圖像帶が彫られてゐる。最下のものは地上5.29mにはじまる。おのおの帶は高さ約0.68m。これに幅0.25mの唐草文帶がつき、上下の境をしてゐる。おそらく第七洞東壁と同様に、三種の文様帶が交互に配されてゐたものであらう。圖像帶は現在六、七段をかぞへることができる。そして圖像は、南端高さ6.00m以上のところに一部分と、北端のこれよりやや上方に一部分とを残すのみである。(PL. 6, 7) これは半壊ではあるが、あきらかに物語風の表現であり、第七洞東壁とひとしい計畫が、この壁にも行はれてゐたことを推定してよい。

なほ、この壁にも東壁とおなじく、小さい孔の列がある。地上8.00m強のところと、13.00m強のところとに、點々としてよこにならんでゐる。

〔北壁〕 主室に通ずる門口は、地上の幅3.75m、最大幅4.00m、高さ5.76mあり、上部の角がやゝ

まるくなった程度のアーチである。明窓はその上にあり、地上8.00mにその下端があり、幅3.74m、高さ4.00m、門口と同様のアーチ形である。明窓、門口ともに外壁にはなんら装飾がない。なほ前室北壁には、明窓の左右に一對の立像がある。これは西半にわづかに痕迹がみとめられる。その下方に、おなじく立像が一對あったとおもはれるが、いまはまったく消滅してみえない。たゞ第七洞前室の北壁から類推するのみである。(PL. 4, Plan III)

小さい孔の列は、高さ8.00mの明窓の下端と、高さ13.00mのところとにある。これは東西壁の孔とまったく照應してゐる。このほか高さ15.00mのところと、3.00mのところにもある。これは東西壁にみいだせない。

〔拱門〕 拱門側壁の幅は現在2.20mである。(PL. 10, 11) 外側が風化のため數十センチなくなつてゐる。頂上中央の大蓮華をめぐる、四體の飛天があつたが、いまは、わづかに一體、しかもその片腕の一部を残すのみとなつた。アーチの曲面にそうて目をさげると、この下には、さらに左右に二體づゝの飛天がある。外側のおのおの一體は破損し、内側のが、わづかに残つてゐるのみである。東側の飛天は立ちあがつたやうで、左手をあげ、右手をまげて胸においてゐるが、西側のは、腰をまげ、よこにとんでゐる。(PL. 21—23)

これらの飛天の下には、東側に牛にのつた神像、西側に鳥にのつた神像を彫刻してゐる。うつくしい神像である。一方は三面八臂、一方は五面六臂、いづれは外道の神々であつたらうが、こゝではりっぱに佛徒の護法神である。その下に高さ2.80mの武神像が一對東西に立つてゐる。さらに、その足下に高さ約0.45~0.50mの基壇がある。門神はどちらも風化してゐるが、東壁の方がいくらか保存がよい。頭部にはギリシヤ神ヘルメスの羽をいたゞき、右手にはゼウスの雷斧をもち、左手にはポセイドンの三叉の矛をもつてゐる。ゼウスの雷斧は佛徒の金剛杵 Vajra である。これは石窟^{dvārapāla}の門神として立つ金剛力士 Vajra-pāṇi である。(PL. 12—20, Plan VIII)

この外側に、もう一體武神像があつたらしい。風化はひどいが、おそらく鎧をつけた、正面むきの武將であつたらう。みじかい腰鎧と、ひらいた足、腰においた手がみえる。矛をもつた神像よりはひくゝ、もう一つ別の臺上に立つてゐる。

〔明窓〕 大きな明窓である。高さ3.90m、幅3.60m。かすかにアーチ形をしてゐる。まはりはずっかり風化すること下の洞口とおなじである。(PL. 24)

側壁には基底に山のすがたを彫り、そこに一本の大きな樹木をたてゝゐる。樹木は兩側壁より天井にまでたかくのび、枝葉が天井いっぱいにおひしげつてゐる。木の下は二段にわかれて禪定の比丘がある。(PL. 25, 26) これと反對の内側には籐座の上にたつた天人、もしくは菩薩像がある。高さ2.16m。

第二章 主室北壁

主室はほぼ長方形の平面である。東西は、南側で9.80m北側で9.40m南北は、東側で5.40m、西側で5.50mである。(Plan I) おくの北壁は上下二層にわかれ、上層は楣拱龕に五尊像を安置し、下層は尖拱龕に一尊の坐佛であるが、破壊がはなはだしい。左右の東西兩壁は、規則正しく四層をなし、各層ごとに二個の佛龕を配してゐる。南壁の門口および明窓の左右は、東西壁の層位にしたがひ四層になり、それに一個づゝの佛龕を彫ってゐる。したがって、東、西、南の三壁に、總數二十四の同形佛龕があるわけである。天井は長方形で、これに梁を彫りだし、六つの格間を區切り、蓮華と飛天とを一面に浮彫してゐる。洞内の保存状態の一般についていへば、南より北がわるく、東より西がわるく、上より下がわるい。したがって、北壁下層と西壁は、ほとんど風化しつくしてゐるありさまである。(PL. 27—29)

北壁は全高12.85mある。高さ6.80mのレベルを境として、上層と下層とにわけられる。主室各壁は、いづれも前にのめってゐるから、どれも上層になるほど、壁の幅がせまくなってゐる。それで、北壁は床の面で幅8.90m、上層の床の面で8.53m、天井の接觸部で6.00mである。(Plan IX)

〔下層大龕〕 中央に尖拱龕をまうけ、そのもと左右に佛立像の龕をおく。中央尖拱龕は、まづ床上に1.61mの壇をつくる。龕の高さ3.94m、幅3.51m、深さはわづかに0.48m。本尊坐佛は、ほとんど溶けてしまつて、近代補修の泥像である。とにかく、第七洞と異り、二佛並坐像でなく、たしかに一佛坐像をもつて本尊としてゐる。本尊光背も龕の裝飾も、全く消滅して知るよしもない。本尊佛龕の左右も、溶解がはなはだしいが、もとは龕形があつた。西側のものについてみると、高さ0.81mの臺座上に、高さ2.90mの佛立像一軀を彫ってあつたことがわかる。東側のは、ほとんどなんら彫像の痕をのこさないまでに消滅してゐるが、おそらく西側と同様であつたらう。あるひは曇曜五窟にみるやうに佛ばかりの三體像かとおもはれる。(PL. 30B, 31)

〔上層大龕〕 楣拱龕のうちに五尊像を彫る。尊像の破損は第七洞よりひどく、ことに西半がはげしい。やゝ満足にのこつたものは東壁にちかい半跏菩薩像のみで、他の彫像は顔面も體軀も足も、ひどく風化してしまつて、現状ではみにくい。龕の深さは帳幕のところで測つて約2.00mである。中央には倚坐する佛像、その左右には寶冠をつけた交脚菩薩像、その左右、すなはち東壁、あるひは西壁に接する個所には、西面あるひは東面して、やゝ小型の半跏思惟像を彫る。これらの配置は第七洞と似てゐるが、第七洞とちがふのは、中央三尊が一佛、二菩薩となつたことである。第七洞では一菩薩二佛である。この中央三尊は、龕背のゆるい凹面にそひつゝ、大體として南面して彫

られてゐる。(PL. 32, 33)

中央佛像は足をひらいてゆったりと倚坐してゐる。破損がはなはだしく、いくらか原形を残してゐるのは、頭部と左手と左足のみである。やすらかなこの姿勢には、ひとつの表情がそなはり、平凡でない。左足の膝には特殊な突帯の衣文があらはされてゐる。(PL. 34, 37A)

左交脚菩薩像は、ほゞその全貌を存し、顔の大體もほゞうかゞふことができる。大きな、いはゆる三面寶冠をいたゞき、うつくしい手首がのこつてゐる。胸の璎珞も、やつとわかる程度であるが、耳朶からさがった璎珞は、ひとつひとつ玉がみえるほど、よくのこつてゐる。(PL. 35)

右交脚菩薩像は、まったく溶解して原形をとゞめない。兩端の半跏思惟像では、西側はほとんど風化して、なにもなく、東側のものについて觀察するほかない。この像は北壁ではあるが、龕のはしにあるため、ほとんど90度ちかく回轉して西面し、幕の蔭にかくれてゐる。(PL. 36, Fig. 4)

中央本尊の足下には獅子がうづくまってゐる。たゞし右側の獅子は原形をとゞめないまでに破損してゐる。左側の獅子は頭を本尊の方にむけ、前足をひらいて左右につばつてゐる。要するに寫實味はなく説明的な彫刻であるが、その力づよい、たくましい表現は、まさに中國の傳統といふほかはない。(PL. 37B)

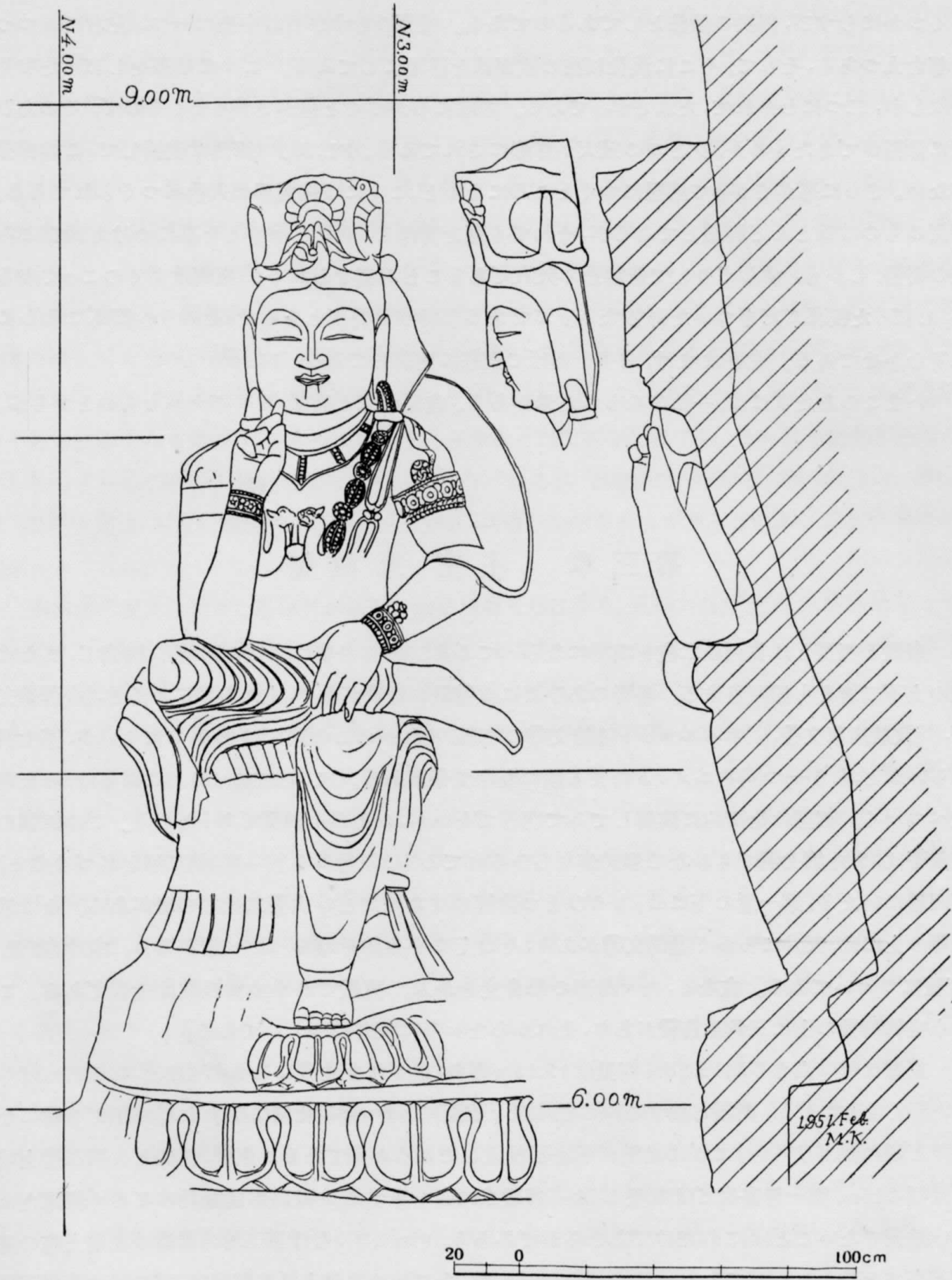
これら五尊の光背はよくわからない。なにしろ、このせまい龕中に五尊がならんでゐるのだから、光背は重なってくるであらう。火焰のふちをもった本尊の大きな舉身光背があり、交脚菩薩の小さい頭光がある。半跏像には光背がなかったのか、比較的保存のよい頭のまほりをみても、なんら彫刻のあとがみえない。本尊倚坐佛では圓光に蓮華をきざみ、その外圈に小化佛を配したことが、からうじてわかる。(PL. 33)

〔上層龕楣拱額〕 つぎに龕外の楣拱額の浮彫裝飾をみよう。これは三段にわかれる。上段は十四個の尖拱小龕よりなる。高さ0.68m、そのなかに奏樂天人を彫つてゐる。高髻の天人で、だいたい膝から上があらはされ、あたかも高樓の欄杆からみおろしてゐる様子である。左右それぞれ七體づゝ、いくらか中央の方に顔をむけてゐる。東端から(1)舞踊形、(2)舞踊形、(3)小鼓、(4)細腰鼓、(5)豎笛、(6)排管、(7)横笛、(8)琵琶、(9)琵琶、(10)篳篥、(11)不明、(12)豎笛¹、(13)角笛、(14)舞踊形となる。(PL. 38)

楣拱額の第二段は、まづ水平の中央部、なゞめにさがる菱形部、また水平になる兩端の翼部よりなる。中央部は六個、菱形部は二個、翼部は一個、都合十二個の框にわかれてゐて、そのなかに一體づゝの飛天が彫られてゐる。飛天はたがひに左右より中央にむかひ、身體をまげ、足の位置、手の位置をそれぞれかへて變化をつけてゐる。(PL. 38, 39)

楣拱龕の下段、つまり第三段は帳幕になる。いはゞ一種の垂帳である。それをたくりあげて、

1 こゝでいふ小鼓は腰にさげて兩方からうつ、小さい太鼓である。いま、かりに小鼓とよぶ。細腰鼓は胴のほそいつゞみ形である。排管は長短の管をならべた、つまり簫である。以下この稱呼にしたがふ。



第四圖 (Fig. 4) 主室北壁 左脇侍 半伽菩薩像

いくつかにむすび、楣拱の縁飾としてあるのである。帳幕のむすび目は中央に一つ、左右に四つづつ都合九つある、そして、そこに漢代以来の獸面飾を浮彫にしてゐる。こゝには幕をしぼった布片のはしが、二つにわかれて、たれさがつてゐる。両端にちかづくとも幕がさがってくるので、そのあひだに餘裕ができたためか、ひとつの飛天が浮彫にされてゐる。(PL. 39) 西側は破損して、この部分がない。さらに幕がさがつて兩壁につくところになると、こゝには侏儒形の人物がつくられてゐる。西側のものはほとんど磨滅してゐるが、それでも幕を背にし、兩足と兩手とを幕につけた跳びこみ型の姿勢、しかも、ずんぐりして侏儒形の天人であることが察せられる。東側はよくのこつてゐるが、しぼった帳幕にだきついた奇妙なポーズである。背中と臀部とをみせ、そのうへ顔もこちらにふりむかせてゐる。左手はまげ、右手をあげて帳幕に密着してゐる。(PL. 40)

いまこのあたりには、一面にぬられた朱がある。龕底の朱と同様、オリジナルなものとおもふ。

第三章 主室 東西壁

東壁と西壁とは並列の二龕を四層にならべてゐる。その各層は南壁の四層に相應じ、また北壁の上下二層とも相照應する。各層のあひだには帶狀の縁飾があり、上から順にみると、(a)蓮瓣文帶、(b)波狀唐草文帶、(c)半パルメット連續文帶の三種、それからこの洞ではわかりにくい、第七洞からいふと、もう一つ(d)パルメットによる環つなぎ文帶がある。(PL. 41, Fig. 14) これらは、みな南壁へつゞく。西壁は全面的に溶解してゐて明瞭でないが、おそらく同様であつたらう。この四種の裝飾帶は、また第七洞でもおなじ形式がもちひられてゐる。下層から第一層、第二層と名づけると、第四層にいたり、第一層の下には、もうひとつ溶解のはなはだしい供養者列像の層がある。なほ第四層の上には、天井にちかく蓮瓣文帶があり、その上に小坐佛をならべた一層があり、これも南壁、西壁につゞいてゐる。龕なく、たゞ舟形の舉身光をおふ。東壁では小坐佛の數は七體である。この小坐佛列像の上に三角垂飾帶があり、それからたゞちに天井につゞいてゐる。

東壁は壁の高さ平均12.26m 西壁は12.43m あり、いづれも北壁にちかづくにつれ0.20mばかりたかくなつてゐる。南壁と接する隅の線はほゞ垂直にちかいが、北壁に接するところは下層になるほど壁の幅がひろい。これは北壁が下ほど後退してゐるからである。東壁、西壁とも第四層上端では幅4.16m、第一層基底では東壁5.76m、西壁5.60mを算する。壁面が建築物のごとく規則たゞしい垂直でないことは、これだけであきらかであらう。(Plan I, II) なほ第三層の基底は北壁上龕の基底と高さをひとしくしてゐる。すなはち四層の内、上二層は北壁上層と相應じ、下二層は北壁下層と相應ずる。また第四層から第二層までは、二個の龕が上下に正しくそろふが、第一層の兩龕は上

三層の龕中心線からはづれて、北壁の方に偏在してゐる。これは第一層が北壁の後退によつて、幅ひろいためである。(PL. 41-43)

〔東壁第四層〕 二つの尖拱龕が相ならぶ。龕頂までの高さ2.12m。龕の幅、南龕2.10m、北龕2.34m。兩龕の境および南北兩壁との境には簾几の柱があらはされ、拱端の龍がこの上に立つ。第七、第八兩洞ではこの簾几にかたどった柱が、さかんにつかはれてゐるのは注意に値する。もともと、この柱は決して簾几ではない。中國では形體の上で簾几の影響をつよくうけてゐるけれども、實は柱頭飾であつて、柱身の略されたものである。柱身の略されるわけは、また別のところであきらかになるであらう。兩龕内には、ともに結跏趺坐する佛像を彫る。大きな肉髻をつけた頭には頭髮をあらはしてゐない。(PL. 43) 南龕の佛は、右手を胸にあげ、掌をみせた舉手形、左手は手首をまげて膝におく捻手形で、掌中に衣端をにぎつてゐる。(PL. 44, 45) 北龕の佛は、これに對し、右手はあげてゐるが掌をうちにむけ、左手は衣端をとるが掌をさげて俯手形にする。これは意識的に兩者の手をちがへたのである。南龕の佛の手相はふつうであるが、北龕佛の手相は實に異例である。(PL. 46, 47) 衣服は、ともに偏袒右肩である。しかし、右肩が全然あらはであるといふのではなく、衣の一端が大きくこれにかゝつてゐる。

南龕の佛像には大きな舉身光がある。舉身光のうちにみる、あがいた頭光などは、いつのものともわからない。なんの裝飾もない大きな光背で本尊をゆったりとさせ、その上で、その外まはり上方に、二飛天を彫る。二飛天は、左右から手をのばして香爐(南龕)、または天蓋(北龕)をさゝげてゐる。その下には左右おのおの三段にわけて、小形の供養天人を彫つてゐる。

拱額の兩端には、まづ龍のかざりをほどこし、龍身は拱梁となつて上によこたはる。龍は頸をまげてふりかへりながら、兩脚で仰蓮華座の上に立つ。(PL. 48) そしてその蓮華は簾几の柱上のつてゐる。拱額には南龕に十體の飛天があり、北龕に十五體の小佛がすはつてゐる。なほ、この上の三角形のあひまには、比丘形の合掌供養者を左右三體づゝ彫つてゐる。

〔東壁第三層〕 二つの楣拱龕がならび、その中間と兩端とに、四層になつた重層柱がある。(PL. 43) 龕頂までの高さ2.14m、南龕の幅1.60m、北龕の幅1.90mである。重層柱の柱頭には半パルメントの承花^{うけはな}があり、まんなかに童子の頭部をのぞかせてゐる。各層には小佛を二體づゝ並置し、最下にうづくまつた侏儒を彫る。これがおもい重層柱をさゝへてゐるのである。

兩龕の内部には、三尊形式の佛像が彫つてある。南龕は五成の須彌座をまうけ、その上に三尊佛を安置する。座の兩側には獅子を彫つてゐる。この須彌座の上に、さらに小形の須彌座を彫り、本尊の交脚佛は、これに腰をかけてゐる。この二重寶座の方式は、他に類をみないものである。こゝろみに第七洞の東西壁第三層をみると、それらの交脚佛は、須彌座ではなくて、四角の座に腰をおろしてゐるし、坐佛は須彌座の上にすはつてゐる。この第八洞の東壁第三層南龕だけが、いま二重に須彌座をまうけてゐるのである。(PL. 49)

本尊は兩肘をはり、右手は舉手形、左手は捻手形で衣端をとつてゐる。偏袒右肩であるから、もちろん右の脇は透いてゐる。ところが、この佛は左脇も衣が身體に密着してゐるので、すいてゐる。胴がほそく、腰がふとく、さらに膝がひろく張つてゐる姿は、實に悠然たるものである。須彌座を二重につくつたせゐか、交脚がすこしすづまりになってゐる。しかし肢體、頭部は他の諸佛と大差のない大きさになってゐる。(PL. 50)

舉身光は無地、そのそとに高さ1.00mほどの脇侍菩薩が立つてゐる。兩菩薩像はともに三面寶冠をいたゞいてゐる。顔はまるく溫和な表情をあらはし、少女のごとき可憐さがある。衣文も頸飾も線刻であらはし、したがって、まろやかな肉體がぢかにうかゞはれる。(PL. 51, 52)

楣拱額は前額部と左右の菱形部との四つの區劃とからなり、それぞれにずんぐりした飛天を彫りこんでゐる。下部は帳幕をたくりあげたやうに、いくつかの弧狀ができてゐる。

三尊佛の須彌座の下には、その兩脇に獅子がある。そとにむかつて頸をのばし、前脚を強くつぱつてゐる。後脚はよくみえないが、腰をおろした蹲踞形である。この獅子の彫り方はあさい浮彫である。北壁本尊の獅子とは、かなりちがつてゐるが、しかし寫實的ではない。するどい稜のたった浮彫である。(PL. 49)

北龕もおなじく三尊佛であるが、臺座をまうけず、床の上にぢかに彫つてある。本尊は丸顔で、大きな丈だかい肉髻をいたゞき、長大な耳をもつてゐる。光背は大きな、無地の舉身光が、あさくしめされてゐる。光背のそとには兩脇侍が立つ。高さ約1.00m、冠はなく高髻がしめされ、身體の姿勢は南龕と同様である。楣拱額の裝飾は南龕と同じで、四つの區劃といひ、帳幕といひ、まったく同様である。たゞ南龕よりも飛天のからだだが、のびのびしてゐる。(PL. 53-55)

〔東壁第二層〕 尖頂のアチ龕二個をならべてゐる。龕頂までの高さ2.20m、幅は南龕2.00m、北龕2.10m。龕額の兩端には龍の上身をあらはし、この龍がふむ傍柱は草花の束からなる。南壁拱門わき花束の、一步前のかたちである。(PL. 42, 65)

南北兩龕とも本尊は臺座なく、龕内の床にすはつてゐる。本尊はともに右手をあげ、左手をひねつて衣端をにぎつてゐるが、北龕は掌をふせ、南龕は掌をみせてゐる。

本尊の兩脇には、龕のそとまで、はみだして、左右二體づゝの跪坐供養者像がある。坐高0.80m。いづれも腰をうかせて長跪し、兩手になにかさゝげてゐる。南龕四人は、いづれも鉢をさゝげ、四天王奉鉢の場面であることがあきらかである。北龕四人はとがり帽をつけた俗人である。妙蜜をさゝげる商胡であらう。四天王は寶冠をつけ、光背をおふが、商胡には光背なく、折り襟のコートをつけてゐる。北龕の佛はこれに應ずるとく、左手に鉢をもつてゐる。(PL. 59, 63)

すなはちこの兩龕の象徵するものは、シャヴァンヌが指摘するごとく、佛傳中の物語である。釋迦が菩提樹下に成道し、禪定に入ってから七日目のことである。樹神が不動の佛に對し食を献ずるものを求めようとおもひ、山の一面をすぎゆく五百人の隊商の牛車をみな躓かせた。商主たる提

謂 Trapuśa と波利 Bhallikaの二人が、樹神から佛に食を献じて、大福を得よと教へられたので、麴蜜を和して樹下にいたって佛にさゝげた。このとき佛は、心ひそかにおもつた。それは過去の諸佛が、人の施物はみな鉢をもってうけ、他の修行者のごとく、手づかみで食しなかったことである。佛のこの自念を知って、四天王はたちどころに額那山^{Jamunā}上にとんできた。すると四天王の所念に應じて、石中から四つの鉢が自然にあらはれた。四天王は、おのおのその一鉢をとって佛にさゝげた。佛はそのうちの一つをとれば、他の三天王を不快にさせるかも知れないとおもひ、一時に四鉢をうけた。佛はそれを左手のうちに置き、右手で按じて四鉢を合成し、一つの鉢にして四際を現ぜしめ、麴蜜をうけた。そして商人たちに歸依佛、歸依法せしめ、またいまに僧衆ができるであらうから、そのときは歸依僧すべしとおしへ、なほ食物を献じた功德によつて、無量の福德をうけるであらうことを説いた^り。

跪坐供養者の上には、龕の内壁にそうて小形の供養天人がある。左右二體づゝ、あさい浮彫である。それから、その上の方に、拱梁にそうて、左右二體づゝの飛天がある。飛天たちは中央に華麗な蓮華、あるひは香爐をさゝげてゐる。ちやうど、これらを本尊の頭上にかゝげ、佛徳を禮讃のごとくである。このモチーフは、とほくインドにあり、中央アジアにもあつた。これらの飛天は手をたかくあげ、額を挺して潑刺と飛ぶすがたである。拱額中には、南龕は八體の供養天人像を彫り、北龕は九體の禪定坐佛を彫る。(PL. 61, 66)

第二層北端には北壁とのあひだに、なほ幅1.00mほどの空所がある。いま剥落しながらも、こまかな浮彫が残つてゐる。上の屋根形のなかは迦毘羅城^{Kapila-vastu}の宮中である。太子の妃ヤショダ^{Yaśodharī}がねてゐる。シッダアルタ太子^{Siddhārtha}はやをらおきいで、まさに家をすてようとする瞬間である。下の剥離したところは、城をでゝ馬をとばしてゐるところである。(PL. 67)

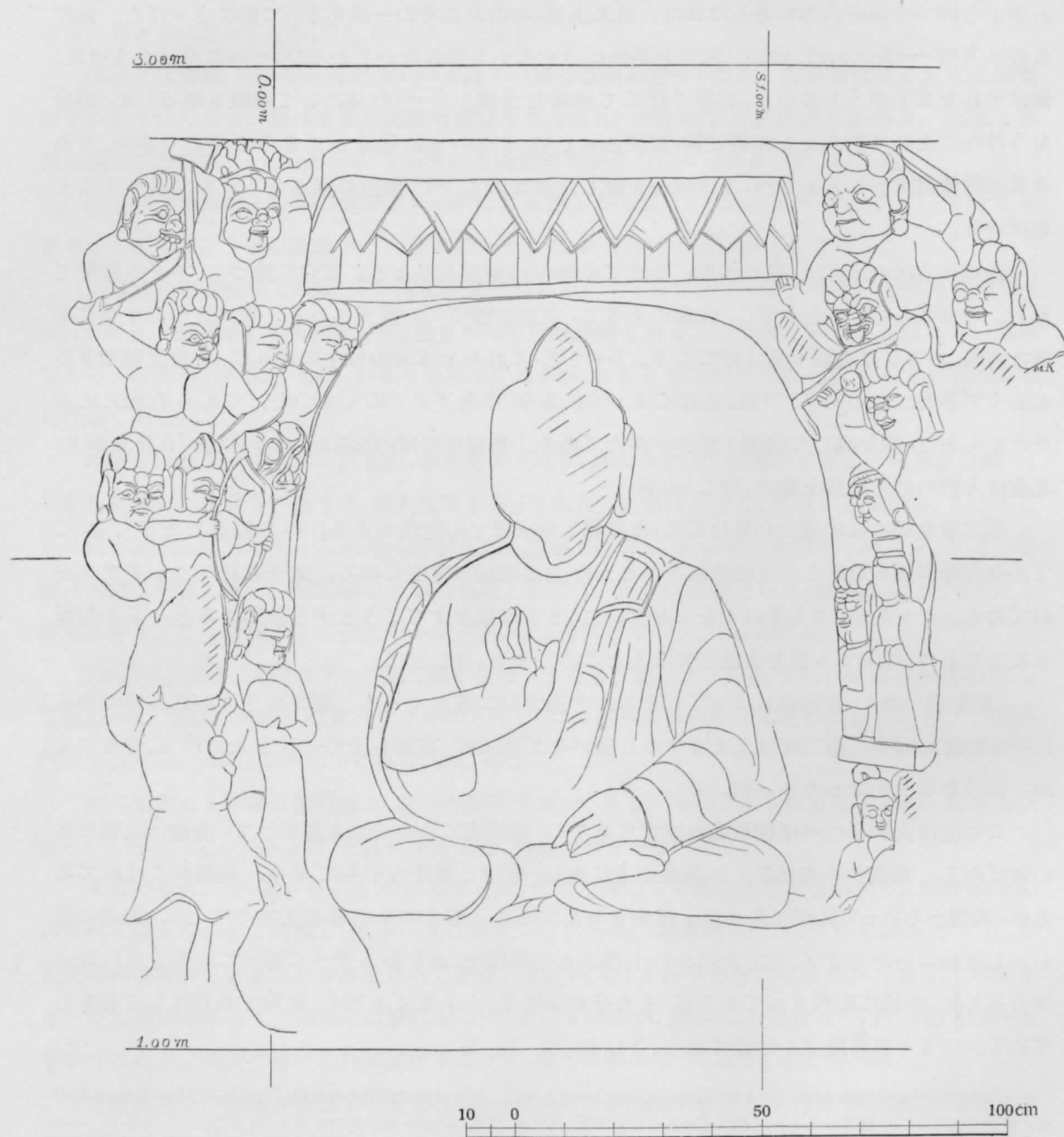
〔東壁第一層〕 重層柱によってしきられた南北の二龕よりなる。龕の高さは1.85m、幅は南龕1.90m北龕2.00m。第二層以上よりすこし廣いのであるが、重層柱をひろくしただけで、龕そのものの幅はあまりかはらない。(PL. 68)

この層は上からいへば楣拱龕のはずであるが、楣拱龕であるのは北龕だけで、南龕は天蓋だけの龕である。南龕の本尊はひくい臺座の上に坐し、舉手と俯手の手相である。頭部がこはれてゐるが、肉髻からいって佛頭であることはあきらかである。彫りのない舉身光背のそとに、天蓋の左右から床面にいたるまで、左右おのおの十體ほどの群像を、おしあふやうに彫つてゐる。だいたいからみると、四段に配列されてゐるが、その奇形怪貌は、いふまでもなく、魔衆をあらはしてゐるのである。つまり釋尊降魔の情景である。(PL. 69, 70, Fig. 5)

1 吳の支謙譯『太子瑞應本起經』(大正大藏經, 第三卷 p. 479) 卷二。おなじ話は西晋の法護譯『普曜經』(同書, 同卷, p. 526) 商人奉麴品第二十二, 劉宋の求那跋陀羅譯『過去現在因果經』(同書, 同卷, p. 643) 卷三等にもみえ、有名なはなしである。のみならず、唐の道宣の『續高僧傳』卷一によると曇曜に關係のふかい曇靖が『提謂波利經』といふ經典までつくつてゐることが想起される。

北龕は、はなはだしく溶解してゐるが、三尊佛の楣拱龕である。楣拱額中の合掌の飛天、手をあげた飛天はそれぞれに、のびやかにとんでゐる。こはれた脇侍菩薩のおくに、なほ高髻の菩薩形がみえる。やはり天人といった方が適當であらう。まるくふかく彫りだしてゐる。(PL. 71)

南北兩龕の中間に彫られた重層柱は三層をなし、各層に二つの尖拱龕を並置し、それにおのお



第五圖 (Fig. 5) 主室東壁 龕降魔

の小坐佛をあらはす。一方は通肩禪定の佛、他方は偏袒禪定の佛である。第二層の層柱とは形式を異にしてゐる。各層の屋根には天蓋狀の三角垂飾を線刻してゐるが、これも第二層ではみられない。層柱の上部にはアカンサスの葉から變化した^{うけはな}承花を浮彫にする。これは左右四葉づゝからなり、中心の葉は渦形になり、その上に合掌する童子をおく。もとより、その意味をいへば蓮上の化生から出たのだから、そのかたちは、むしろ比丘といった方がより適切である。各葉は輪廓にそってつよくあがり、中心にむかっていくらか凹むやうになってゐる。第三層の層柱と同じであるが、より豪壯である。層柱の幅は 0.80m。(PL. 68, 69)

〔東壁最下層〕 第一層の下は床まで2.00mある。ひくい臺座をつくり、この上に供養者の列像を彫る。全面的に風化してゐるので明瞭を缺くが、おほよそ八、九體の人物を彫ったらしい。まんなかの層柱の下に、兩手をあげた像が立ってゐるが、第三層同様に侏儒の像とかがへられる。その左右の、片手をあげ片足をあげたものは、おそらく武人像であらう。この形式は雲岡でも中央の各洞にその例が多い。(PL. 68)

〔西壁各層〕 腰壁から第一層、第二層、第三層、第四層まで全體とけてみて、彫刻として完全なものはまったくない。たゞ第四層南龕のみが本尊頭部と拱額とをわづかに残してゐるのみである。しかし、よくみると、第一層より第四層までの龕形の配置は、東壁とまったく同様である。すなはち、第一層は楣拱龕、第二層は尖拱龕、第三層は楣拱龕、第四層は尖拱龕となる。各層の境界に裝飾帶をおくことも、東壁および南壁におなじである。(PL. 72, Plan XI)

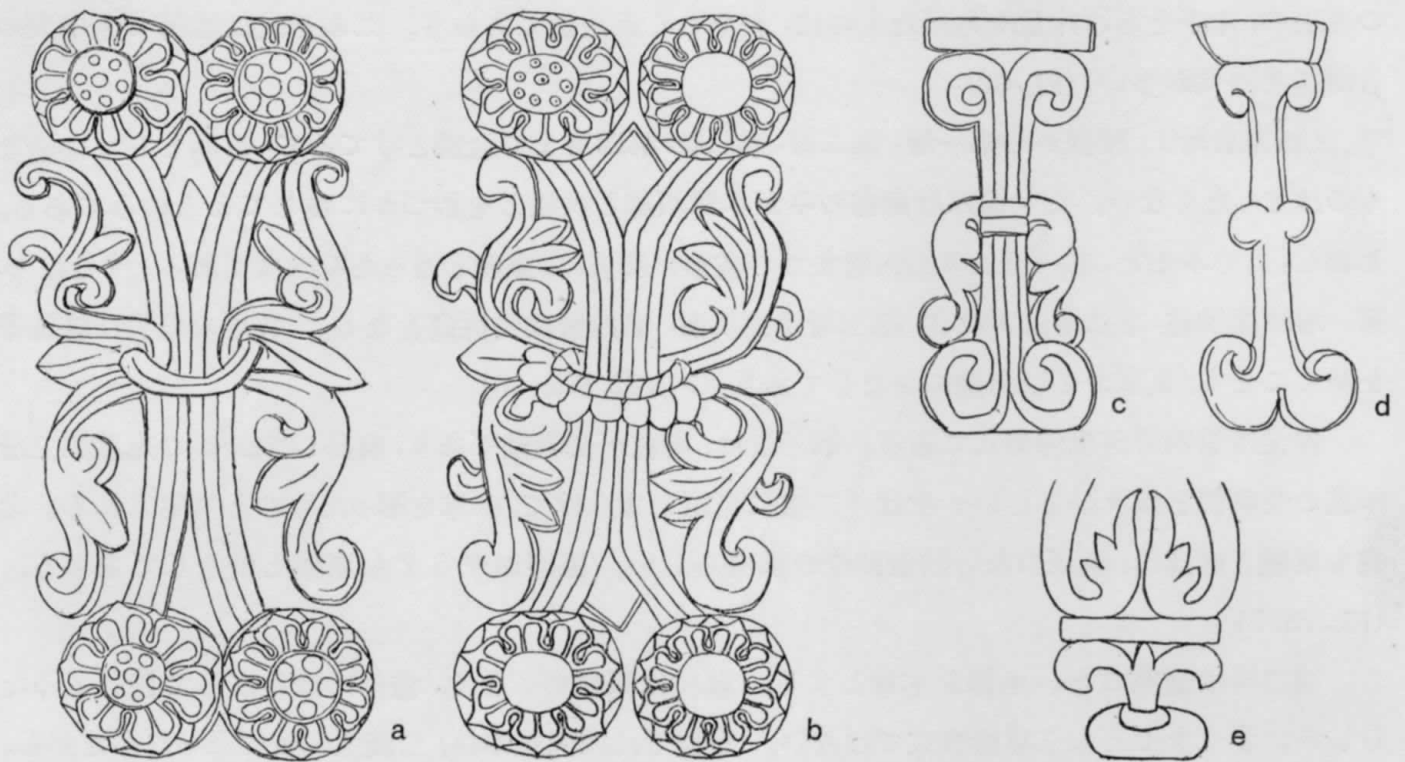
佛像は第四層が坐佛形式である。第三層は、南龕が交脚像であり、坐高1.22m、かの東壁第三層南龕の交脚佛とほゞひとしい。やはり二重に臺座をまうけて、本尊を彫ったものと推定される。北龕も東壁と同様に、臺座のない結跏趺坐の佛像らしい。脇侍のやうすも東壁とおなじであらう。(PL. 73, 74)

第二層は臺座のない坐佛を本尊とする。脇侍は東壁のごとく、龕外にはみだして跪いてゐたらしい。すくなくとも三尊佛形式ではない。東壁では四天王奉鉢、二商主奉蜜であつたのだから、なにかそれに對應する圖像とかがへられる。

第一層も本尊が坐佛である。脇侍および拱額部はまったく消滅してゐる。東壁には降魔圖があつたのだから、こゝにはそれに對照的な佛傳中の圖像があつたのであらう。

第四章 主室 南壁

〔南壁拱門〕 南壁中央は下に入口があり、上に明窓がある。(PL. 75) どちらも大きく、上が平らで拱門といふよりは隅まるの方形である。拱門の頂點がおさへられて水平にちかいのである。門口の高さは5.42m、幅3.70m。(Plan VIII) 門の上には拱額といったやうなものはなく、半パルメットを並列した縁かざり、すなはち拱梁がある。(PL. 86) これは南壁第二層の下縁より起ってをり、下に蓮華の花束があつて、これをうけてゐる。(PL. 108, 109) この花束は拱門から遊離してゐるや



第六圖 (Fig. 6) 傍柱の各種

第八洞 a) 拱門西脇、b) 拱門東脇、c) 東壁第二層中央、d) 南壁第二層西龕
中央アジア e) キジイル合唱洞樂天列龕傍柱。

うにみえるが、實は拱門の傍柱なのである。たゞ上下の渦文が大きくなったために、豪華な蓮華文となっただけである。そのことを知るためには、東壁、また南壁の諸龕の傍柱をみればあきらかであらう。さらに、さかのぼれば中央アジア、キジイルの合唱洞 Höhle mit dem Musikerchor¹⁾にある。(Fig. 6) 拱梁の左右には二體づゝの奏樂天人が彫つてある。上には合掌供養の童子たちが上半身をのぞかせてゐる。總計十一體、まんなかの一體は正面むき、左右の五體はそれぞれ中央にむかつてゐる。

1) A. Grünwedel; *Alt buddhistische Kultstätten in Chinesische-Turkistan*, Berlin 1912, Fig. 124.

奏樂天人は、むかって左が豎笛をふき、また琵琶をもって飛行し、右が腰鼓をうち、また横笛をふいて飛行する。(PL. 91, 92) これらはいずれも丸顔の童子形である。上半身は裸體、下半身はわずかに腰部をまとふだけである。よくみると、たゞ西の横笛樂天だけがちがって、下裳をつけてゐるやうである。どれにも圓光背はない。

拱梁の上、明窓の下は横ながい長方形の一廓をなし、六人の天人がなかにゐる。(PL. 86) 高さ1.50m、横4.20m。上にながい楣のやうなものをわたし、その兩端にふとい柱をたてゝゐる。楣はほそい束で仕切り、十六の方形をつくり、その一々に蓮華の花を彫つてゐる。ま上からみた蓮華、なゝめ上からみた蓮華、それを交互に配してゐる。楣の下には帳幕がしばられて、七つの弧をゑがいてゐる。

龕内の天人は六人、高髻で圓光をおふてゐる。板の頸かざりと腕輪下裳と天衣をつけるのみで上體は裸である。合掌と合掌でない天人とを交互に配し、そのすはり方は實に自由自在である。雲岡において、もっとも自由なポーズをした像である。のちの加彩もあるとおもふが、朱彩がいたるところに残つてゐる。(PL. 86—90, Fig. 7)

〔南壁明窓〕 南壁の明窓は、その兩角に合掌した天人の立像がある。(PL. 80—83) その寶冠をつけ、圓光をおふた端正なすがたは菩薩ともかはらない。高さ2.16m。それがたかい籐または竹の椅子の上にたつ。總高2.92m。なゝめに内の方をむいてゐる。この頭上に反轉した龍がゐる。(PL. 85) 胴をながくのぼし、明窓の拱梁になつてゐる。天人像はこれをうけたかたちであり、自然に、拱門わき柱の役をする。つまり、古代ギリシアにみるやうな人像柱である。これは第九洞、第十洞でもまねられ、また第十二洞にもある。

人像柱の上の龍は拱門のふちにそうて、龍身、龍尾をながくのぼし、中央でその尾を接してゐる。龍頭はみごとにきざまれ、龍身はたくみに反轉され、こゝには漢魏以來の傳統が生々とあらはれてゐる。龍身の上は禪定佛の列像になる。(PL. 84, 85) 大きな舉身光のあひだに、まるまるとした合掌の化生がのぞいてゐる。そして、その上には三角垂飾の一帶と、その上に長押やうの一帶とがある。これらはみな東壁、西壁に連續してゐる。

〔南壁東西部〕 まへに指摘したごとく、南壁は中央の門口と明窓とをはさんで、東西におのおの四段の佛龕がきざんである。(PL. 76—79) まづ床にちかい腰壁は供養者の列像である。東西それぞれ三體づゝ。表面はすっかり溶けおちてゐるが、そのうちに右手をあげ左手を腰にあて、右の方をながめた姿勢がうかゞはれる。すくなくとも、この拱門の兩わきだけは、おそらく武裝の神像であらう。(PL. 108, 116) この腰壁について四段の佛龕をつくる。それは、まったく東西壁の四段と相應じ、各段をわかつ唐草文帶も、たがひに相連續してゐる。

〔南壁第四層〕 明窓をはさんだ東西の龕は、ともに楣拱龕である。(PL. 97, 110) たゞ普通の楣拱龕とちがったところは、左右の兩翼がない點である。これは窟頂にちかいたため、壁面が急にせま



第七圖 (Fig. 7) 主室南壁供養天像

くなってくるためであらう。もっとも側壁のばあひは、北側は漸減してゐるが、南側は南壁がほとんど垂直であるため、あまりせまくなってゐない。

水平の楣はおのの三つに区分され、それに飛天を彫つてゐる。東龕では東の二體が西にむかひ、他の一體が東にむかふが、(PL. 97) 西龕ではちょうどこの反對になってゐて、(PL. 110) たがひに照應してゐることがよくわかる。楣額の下には帳幕があり、本尊はどちらも須彌座の上に腰をおろした交脚菩薩像である。寶冠をいたゞき、三種の頸かざりをかけ、腕輪をつけてゐる。本尊に多少の相違がみとめられるが、俯手形の東龕(PL. 98)と、捻手形の西龕(PL. 111)とのちがひ、蓮華の跣座をもつ東龕と、それをもたない西龕のちがひなどが大きく注意される。面相といひ、手といひ、脚つきといひ、東龕にくらべると西龕の方がひきしまつてゐる。

龕内はどちらも大きな舉身光で、まるい頭光をもたない。舉身光のわきに、ひざまづいた合掌天人が、それぞれ三人づゝをり、その上に飛天がとび、その下に合掌の供養立像がある。これらは一々、東西兩龕に一致し、たがひに参照してつくられたことがわかる。龕傍の籐几やうのものは、龕傍の柱、もしくは臺である。東壁南龕、もしくは西龕南龕の臺がこゝまでのびてゐるので、この龕は楣額と帳幕のみである。

〔南壁第三層〕 東西ともに天蓋を彫りだし、その下に三尊の坐佛をおく。(PL. 99, 112) 天蓋はたゞ梯形の笠形から、三角飾がたれさがつてゐるばかりの簡単なもので、これに帳幕がたれさがつてゐる。本尊は、東龕が高さ1.45mで、西龕が1.39mである。どちらも高さ0.24mの、ひくい蓮座にすはつてゐるが、一方はたゞ平たい蓮瓣であり、他方はやゝ浮彫ふうの蓮瓣である。これはやはり一對として變化を求めたものであらう。

本尊の左右には可憐な脇侍菩薩が立つてゐる。東龕では、本尊蓮座とおなじ表面に、菩薩の蓮座をあさく彫つてゐるが、西龕では、なゝめにひきこんで、あさく彫られてゐる。しかし、これら四體の脇侍菩薩は、寶冠に獅子面をつけることにおいて、まったく一致してゐる。(PL. 101, 102, 113)

脇侍の上は、東龕に合掌天人像、西龕に合掌比丘像をつくる。東には一人の飛天があつて、天蓋のわきを翔けてゐるが、全體としては、たがひに對應して、つくられたものとみとめられる。(PL. 99, 112)

〔南壁第二層〕 東西とも尖拱龕であるが、西龕のアーチはほとんど圓形である。(PL. 103, 114) 拱端には獸形があり、その下には大きな皿板やうのものをおき、渦卷のついた柱をたてる。渦卷は柱頭だけでなく、柱基にもある。中央にはひきしばった紐のごときものがあり、そこから半パルメットの唐草がそりかへつてゐる。西龕ではその唐草がない。そして東龕でも、西龕でも側壁に接したところは、この形式の柱がなく、例の籐几のやうなものが、側壁の南龕と共用のかたちであらはれてゐる。拱額のそとは、どちらも比丘の合掌をいれてゐるが、拱額内は東龕に飛天像があり、西龕には坐佛の像がある。それはたがひに違つてゐるけれども、充分に他方を考慮しての作で、たが

ひに照應してゐるわけである。

龕内の本尊は臺座なしに床の上にいきなり彫りつける。結跏趺坐、偏袒右肩で、舉手と捻手の手相である。(PL. 104, 115) 脇侍菩薩はない。舉身光が龕いっぱいひろがり、そのあまったところに、小形の供養者像が二段にしめされ、その上に左右二體づゝの天人がとんでゐる。(PL. 105—107, 114)

〔南壁第一層〕 拱門わきの、この層は上三層とちがひ、拱門のわきに大きな拱門柱にあたる蓮華の花束があるから、龕の楣拱額も翼部がない。(PL. 108, 116) 水平の部分だけで、それを方形に仕切り、なゝめ上からみた蓮華と三つ葉の四出形とを交互に彫りこんでゐる。その下に三つの弧になった張幕がさがつてゐる。

龕底は他の諸龕よりあさい。彫像はかなり溶解してゐるので明瞭にしがたいが、東龕ではむかつて右に大きな坐像がある。(PL. 108) 頭部は缺損してゐるが、まるい頭光をおひ、僧衣をきてゐることがめづらしい。まさに偏袒右肩である。まづこれが本尊格であるが、佛像ではなく、僧形であることが異例である。右手をあげ、左手を腰にあてゝゐる。右脚は折つて跏趺してゐるが、姿勢からみると左脚はのばしてゐるらしい。いかにも右側の誰かに話しかけてゐるやうすて、その右側には、たしかに、なにかの像があつたらしい。これら主尊の背後には七、八體の小像があり、みな高髻の合掌供養者である。

これに對し西龕は、なほ溶解がはなはだしい。(PL. 116) やはり僧形が主像で、ひくい矩形の臺座にすはる。おそらく左脚をたれた半跏像であらう。これも手をあげて誰かにむかふ。むかひには一、二の小像があつたらしい。全面的に溶解してゐるけれども、童形ともみえる口をあけた小像がのこつてゐる。それが話しかけるやうに主像にむかつて手をあげてゐる。この僧形の上脇には三人の俗體供養者がゐる。みな烏帽子ふうの三角頭巾をいたゞいて合掌し、合掌の手に蓮の蕾、もしくは珠をさゝげてゐる。服裝は胸まへで襟をあはせた穿袖のコットであらう。

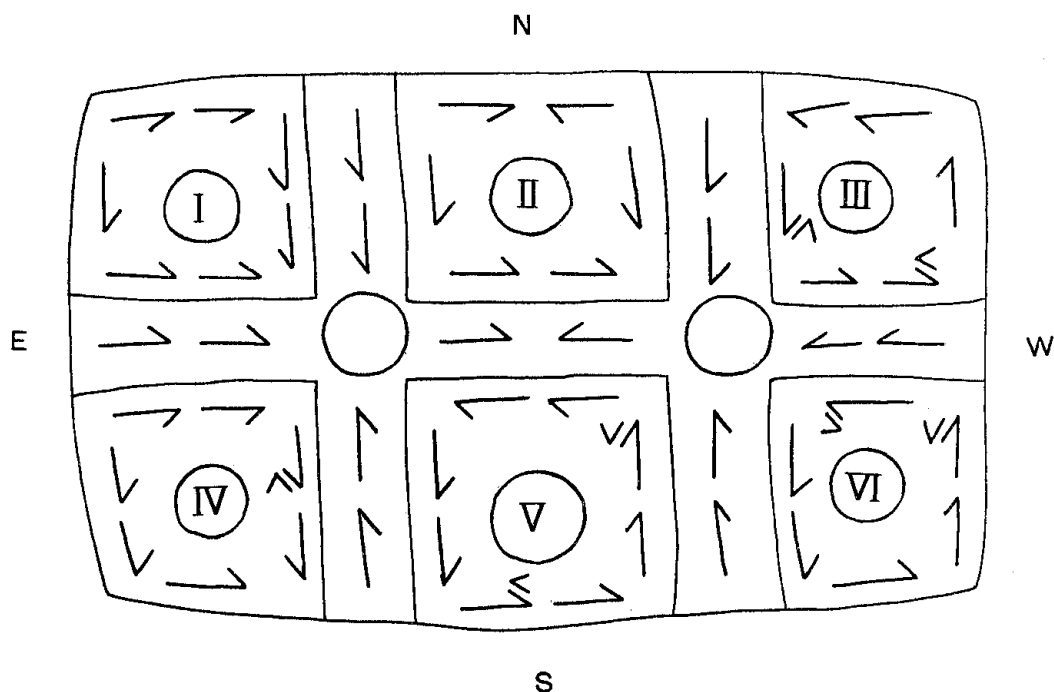
この東西龕が、いかなる説話をかたるかは明らかでない。第七洞の同様な壁面には、東西に相應じて維摩居士と文殊菩薩の像があつた。それは、もとより『維摩經』に取材した問答像であつたが、これもまた、さうした一節をあらはすものに違ひなく、僧形は舍利弗^{Sāriputra}の像でないかとおもふ。

第五章 主室 天井

天井は東西に一本、南北に二本の梁がとほつてゐる。そして自然に、六つの方形區劃をつくる。梁の幅は約0.60mあまり、その十字に交叉するところに直徑0.60mほどの蓮華がある。したがって、梁そのものは七つの區劃にわけられてゐる。(PL. 117, Plan XIII)

さて、この六つの格間は、折りあげのやうになってゐて、0.15m乃至0.30mの高さをもつ。大きさは、かならずしも一定せず、また正しい方形でもない。角がまるくなり、また梁がふくらんでもゐる。そのいただきは、それぞれ方形になってゐて、これに隅がけの石がわたり、さらに隅がけの石がわたることになる。かくて中央にできた八角形のうちに大蓮華を浮彫にしてゐる。要するに、これは持送りの組上げ天井である。

各格間の折りあげの部分と梁の上に、飛天が彫られてゐる。いま六つの區劃を、北がは東端からI, II, III, 南がは東からIV, V, VIとかぞへる。飛天の走向は、ながい矢であらはし、ふりかへった頭のむきはみじかい矢でしめすと、圖のごとくになる。(Fig. 8) 大蓮華をとりまきながらその向きは



第八圖 (Fig. 8) 第八洞天 略圖

いろいろであり、各區の飛天の數も不定である。梁上の飛天は東西二つの蓮華が中心となり、みなこれにむかつて集中してゐる。たゞ中央梁上の二體は香爐をさゝげて、左右から相對してゐる。まったく全體がシムメトリカルに統一されてゐる。ところが、たゞ東梁南半の二飛天が西を上とし、東を下としてとんでゐるのは、正しいシムメトリカルにならず、奇妙である。しかし第七洞では、まったく無計畫で、それをおもふと、むしろこゝのは整然としてゐるとおもふ。

さて飛天はいづれも共通な容貌風姿をしめしてゐる。高髻にゆひ、圓光をおひ、寶飾をつけた菩薩形である。上身をあらはにし、まゝ左肩から天衣をまとふ。兩肘には天衣がまとひ、圓光のうしろで圓弧をつくり、その兩端は兩わきになびいてゐる。下身には裳をつけ、それをうすく、やはらかくみえるやうに彫つてゐる。足首はつねにあらはれてゐる。全部五十四體のうち、だいたいにおいて、上體を立て下身をよこたへた姿勢で、兩手兩足の運動は千變萬化である。しかし大別すると、

- (1) 合掌, またはそれにちかいもの二十二體
- (2) 合掌しないが胸のあたりにおくもの四體
- (3) 片手を胸に, 片手を下にさげるもの三體
- (4) 片手を胸, もしくは腰にあて, 片手をのばしたもの二十二體
- (5) 両手をさしだしたもの一體
- (6) 不明二體

以上のごとくであるが, このうち, 片手を胸に, 片手を下に下げたものは, もっぱら東南區IVにみいだされ, 合掌しないが両手を胸のあたりにおくものが, 三體まで東北區Iの附近にみいだされるのは興味がふかい。

足の姿勢もいろいろあるが, 兩足をきっちりそろへた靜かな形はほとんどない。なめらかに飛ぶ形でも, 足さきは輕快にひらいてゐる。片膝だけをまげて, うしろに跳ねたものは, まだおだやかな方で, 疾走するごとく兩股を大きくひらいたもの, あるひは前にだした足をふかく折りまげて腿につけ, うしろの足をぐっと伸したものなどもみられる。總じて第七洞天井の飛天より動きの大きいのが特徴である。

飛天の持物は, 中央梁上, その他に香爐をさゝげたものがある。蓮の蕾, または珠をもつてゐるものもある。しかし, 第七洞のごとく六方體の摩尼寶珠をもったものはない。

服裝のやゝ特殊なものは東南區IVの東側, および南側の各二體, それから中北區IIの西側一體, 東北區Iの東側一體である。下體にはスカットふうの裳ではなく, 股のわかれた袴子^{カウジ}をつけてゐるやうにみえる。(PL. 123) これは實に異例である。疾走するやうに, あまり足をひらかせたため, かうなったものとおもふ。

この六體の飛天は, このやうに姿態が特別で, 服裝もまた他とちがつてゐる。通常の飛天のごとく, 兩足をのばした流麗な姿でない。韋駄天ばしり, あるひは足を極度に折りまげて腿につける。とにかく, かくのごとく特別な形を飛天にあたへて, 空中を飛ばすことは, この第八洞天井の彫刻家が, 決して定型にとらはれなかったことを示してゐる。かれらが西方よりのモデルを, かならずしも墨守せず, 種々の點で獨自性を發揮したことをかたつてゐる。

終 章

第八洞の特徴

1

以上、第八洞の各部について細説をこゝろみた。いま、これらを要約して、この石窟の造像を圖像學的に考察すると、左の諸點が注意される。

(1)この石窟の本尊はなにかといふ問題がまづ生ずる。主室北壁に彫刻されたものが本尊であると考えるのは、一般の常識であらうが、第八洞北壁は上下の二層にわかれて、大きな佛龕がある。上層には一倚坐佛、二交脚菩薩、二半跏像、下層には一坐佛を彫る。このやうな主室北壁は、第七洞をのぞいて雲岡諸窟にみないところである。(Plan IX) 上層の五尊像は、決して普通の五尊像でない。主尊の佛倚像と、ほとんど同大の交脚像がわきにあつて、やゝ小さい半跏思惟像が、そのわきにある。これを圖像學的に解釋することは、きはめて困難である。

下層の坐佛は釋迦佛とみてよいであらう。上の佛倚像も釋迦佛とみられぬことはない。左右の交脚像は寶冠、寶飾をもつところから、一般に菩薩をあらはし、また交脚は彌勒菩薩をあらはす形式である。また南壁第四層東西龕には、この種の寶冠をいたゞく交脚像があらはされてゐる。これらも一括して彌勒菩薩と想定できる。しかし、これを彌勒菩薩とみると、左右二體を彫るのはどういふわけであらうか。もつとも、北齊時代には雙彌勒といふものがある。けれども、はたしてこの頃に、さういふものがあつたかどうか、すこぶる疑はしい。

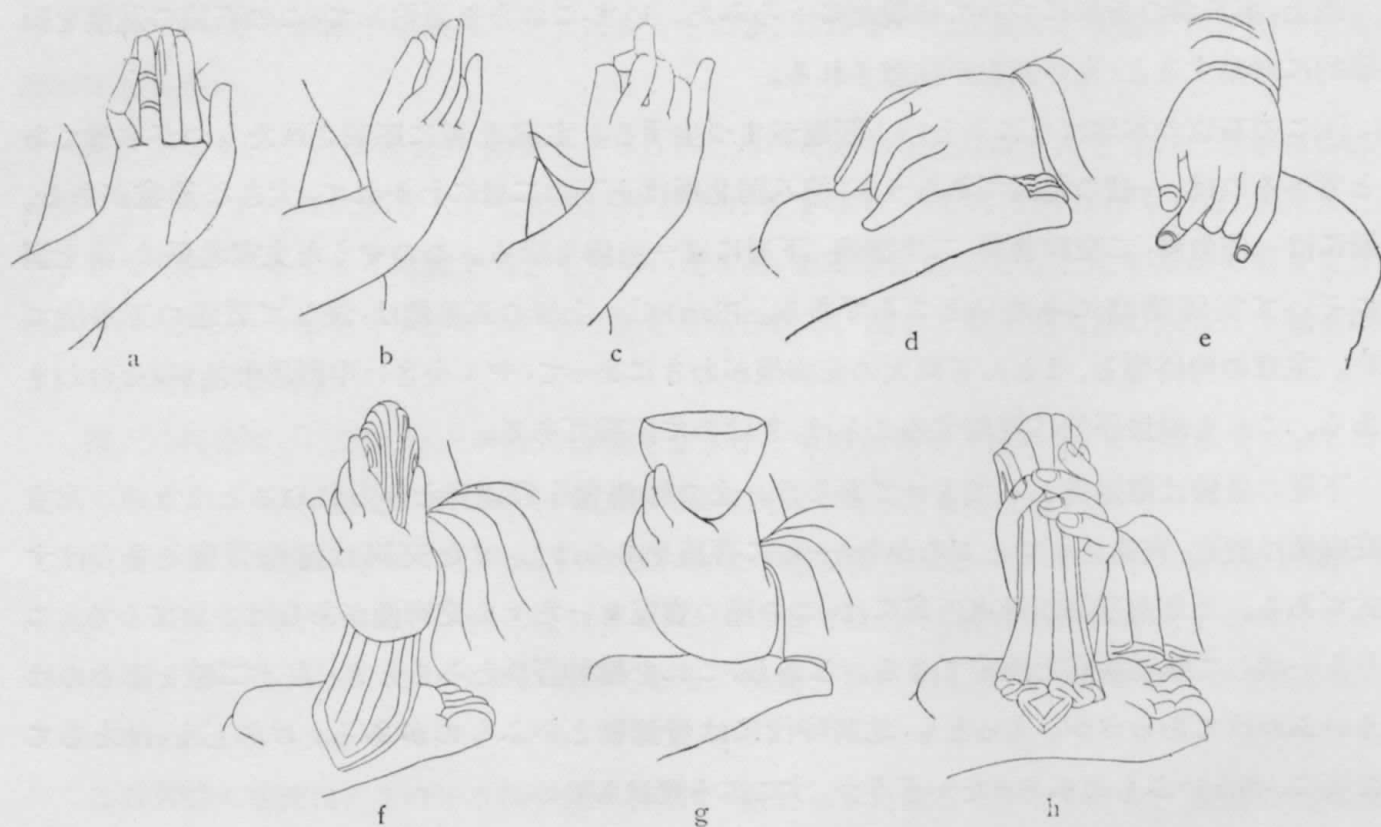
がんらい、ガンダラの諸遺蹟や、中央アジアの諸地では、儀軌的な佛像表現はまだあらはれなかつた。雲岡初期の西方様式模倣時代には、おなじことがいひ得るとおもふ。三尊形式は周壁第三層佛龕 (PL. 49, 53, 99, 112) のごとく、すでにあつたが、それが全部の尊像形式を支配するほど強力ではなかつた。むしろ一尊形式の方が、より一般的であつた。

いづれにしても、第八洞の北壁は一雙窟である七洞北壁と、あはせてかんがへるべきものである。第七洞の北壁下龕は二佛並坐像である。いふまでもなく釋迦牟尼佛と多寶佛である。さうすると第七洞の上龕中尊は、第十七洞明窓の太和十三年龕のごとく交脚菩薩であるから、これはまちがひなく彌勒菩薩である。兩端の半跏思惟像は、また太子の思惟像であらう。左右わきの佛倚像については適當な解釋がない。要するに、ちがつたものを、あひの手に入れたといふかたちである。第八洞は、ちやうどこれの逆をいったとおもふ。一雙窟であるだけに、そのことがかんがへられる。したがつて北壁上龕の諸像は、明確な解釋をあたへることができないけれども、儀軌にとらはれない

自由な組合せの現はれとみるべきであらう。

(2)第八洞諸龕の本尊佛像は、いろいろの手相をする。しかし、後世の印相とは一致しないし、またそれほど厳格な意義があるものでもない。だから施無畏の印 *abhaya mudrā* であるとか、與願の印 *vara mudrā* であるとかよぶことは、さしひかへたい。いま、たゞ形によって分類し、形によつて假りに名をあたへてみた。すると下のごとくになる。(Fig. 9,10)

まづ右手を胸にあげた舉手形、それには三つの變化(a)(b)(c)がある。膝とか足に左手をおいた、いはゞ俯手形、これには二つの變化(d)(e)がある。第三は捻手形ともいふべきもので、膝のあたり



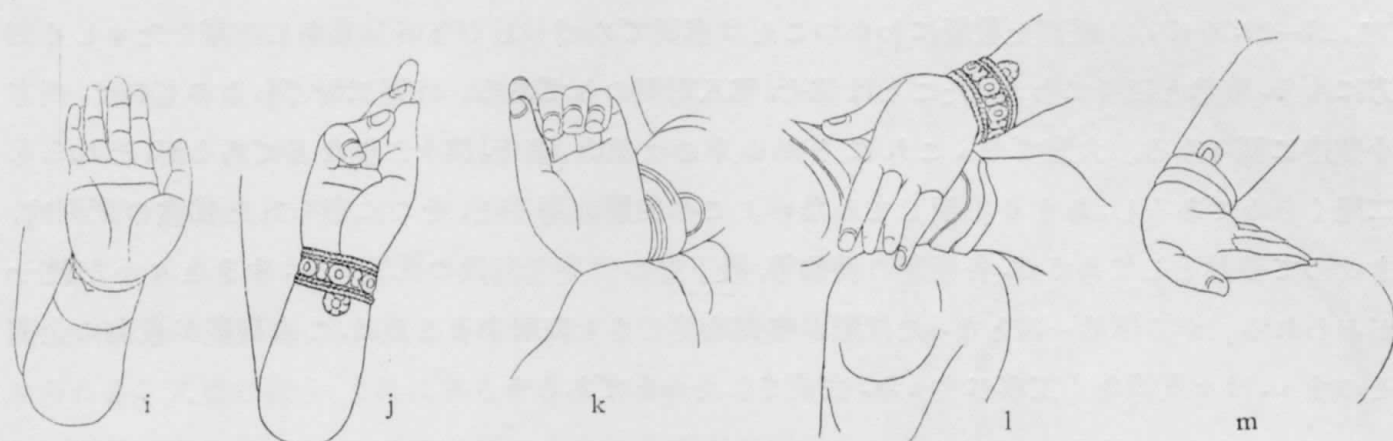
第九圖 (Fig. 9) 第八洞佛手相各種

- a) 舉手形 1 b) 舉手形 2 c) 舉手形 3 d) 俯手形 1
e) 俯手形 2 f) 捻手形 1 g) 捻手形 2 h) 捻手形 3

においた左手の手首を、ねぢて上にあげてゐる。これにもその變化は三つ(f)(g)(h)あるが、佛鉢をうけたものは、ごく特殊な例である。これに對し菩薩は、右手が舉手形(i)と思惟形(j), 左手が捻手形(k), 俯手形(l), 壓手形(m)とにわけられる。そのうち思惟形は半跏の思惟菩薩にかぎられる。そして、これらの手相がいかにして發生したか、いかなる意味を附せられたか、そしていかにして後世の印相のごとく厳格な儀軌にまで發達したのかは、今後の問題としてのこしておかう。

第八洞諸龕の本尊佛、乃至本尊菩薩の手は右にのべたごとくであるが、龕の本尊でなく、たとへば天井に接する並列の小坐佛とか、或は龕額の坐佛とかにおいては、いはゆる定印 *Dhyāna mudrā* の印相がみとめられる。われわれは、いま假りに合手形とよぶ。

(3) 佛傳をあらはすものとしては、主室東壁の第二層に四天王奉鉢および、商主奉蜜の情景があり、(PL. 59, 63) 同壁第一層に、降魔成道の情景がある。(PL. 69) この三場面のうち、降魔は奉鉢、奉蜜にさきだつから、佛傳は第一層からしだいに第二層へ、南龕から北龕へと展開していったのかも知れない。けれども、第三層、第四層は決して佛傳らしくない。それで、これと一対窟である第七洞をみると、その西壁第一層にはウルヴィルヴァ・カアシャパ Ulvilva-Kāshapa の調伏を主題にした佛龕がある。それから一々その主題を明らかにしえないけれども、西壁の第一層、第二層、東壁の第一層、第二層は佛傳をあつかってゐるらしい。だから第八洞でも、いまはなき西壁の下、第一層、第二層は、なにか佛傳を主題としたものであったかも知れない。



第十圖 (Fig. 10) 第八洞菩薩手相各種

i) 舉手形 j) 思惟形 k) 捻手形 l) 俯手形 m) 俯手形

これとは別に、北壁下層龕の東隅にも、浮彫の佛傳圖があつた。(PL. 67) 第七洞の方はわからないけれども、これは佛龕と佛龕とのあひだの、空所をうめるために、試みられたものとおもはれる。ところがこれとちがひ、當初からさういふ物語を企圖して計畫されたものは、第七洞前室の東壁であり、第八洞前室の西壁である。第八洞の方はいくらか残つてゐないけれども、第七洞の方からみて佛の前生をものがたる本生圖^{Jātaka}であつたとみとめられる。

(4) 前室の東壁には大壁面いっぱい千佛を彫り、第七洞の西壁に對應させてゐる。壁面を千佛の龕でうめることは曇曜五窟をはじめ、雲岡石窟ではしばしばみうける。第七洞、第八洞では、この壁面だけが、縦横碁盤目に佛龕が配置されてゐる。千佛思想のさかんにとかれたのは『法華經』であるが、西晋の竺法護譯『賢劫經』にも「千佛名號品」、「千佛興立品」、「千佛發意品」などの章があり、その信仰の流布が想像される。

2

最後にこの石窟の構造について注意すべき點を再説してみよう。

(1) 前室が主室より廣いこと。これは第七、第八兩洞に共通する。同じく前室があつても、第九、

第十、第十二洞は、主室よりかへってせまい。前室のひろいことは、この二洞の特色である。

(2)主室の格天井、これは第七、第八兩洞に共通する。六個の格間からなり、そのひとつひとつの格間は、折上げ組上げともいふべき方式からなっている。おのおの格間の上は四方から折上げてあって、中央にやゝ小さい方形ができる。この方形のうちにおいて、隅がけに持送りをつくり、そこにできた小さい方形のなかに、また隅がけに送持りをつくり、結局中心は八角形になる。そのまんなかに蓮華を彫る。(PL. 117) 本来は組上げた隅がけの角材は、それぞれさうたうな厚さをもつわけであるが、こゝでは省略されて扁平である。

(3)第八洞主室壁面の層序。第七洞とともに、東西兩壁および南壁東西部が四層になっている。(PL. 27—29, 76—79) 壁面を數層にわかつことは雲岡でめづらしくない。しかし四壁をたゞしく四方にもち、整然と四層にわかつたことは第七、第八兩洞のみである。四壁二層ぐらゐのものは、西方小窟中に間々みる。大窟でやゝこれにちかいものは第九、第十、第十二洞などであるが、それらも二層ぐらゐであるし、あまり整頓してゐない。この四層の層序と、そこに彫られた佛龕の配列は、きはめて整然としてゐるが、各層間の裝飾帶、最下層の供養者列像の配置にも、ゆきとゞいた統一がみられる。かく渾然一體となった浮彫が建築的美しさを表現することは、この石窟が最初の企劃そのまゝ、ほゞ支障なく工事がすゝみ、完成されたからであらう。

3

つぎに第八洞造像と裝飾との様式について概観することにする。大ざっぱにわけて造形様式は西方的要素とシナの要素とに二大別される。西方的要素とは(a)インド的、(b)イラン的、(c)ギリシア・ローマ的といへるが、事實はそれが結合して生じたガンダハラ美術、マツラ美術、中央アジア美術といふものを考へれば、またガンダハラ的とも、マツラ的とも、中央アジア的ともいへるであらう。これらがさまざまな組合せをとって採用されてゐる。これを純粹に洗ひあげ、分析することはきはめて困難であり、また當面の目的ではない。シナの要素とは漢魏以降の傳統的なシナ様式である。雲岡石窟を造營した北魏は、鮮卑族の拓跋部を基幹とする民族が主導權をもつてゐて、これに漢族が臣屬してゐたのである。だから、この石窟群の造設には非漢族的要素がさうたうにあると考へられる。したがって西方的要素をシナの要素とをむすびつける紐帶として、拓跋的要素とでもいふべきものが、當然表現されてゐなければならない。しかし、拓跋の造形様式は、雲岡石窟以前の作品がほとんどわからないから、雲岡石窟において、われわれはそれを假定しておくだけである。西方的要素とシナの要素とを剔出したあとで、はじめて拓跋的要素の存否が問はれることにならう。

つぎに第八洞の造形様式における西方的要素を列挙してみよう。

(1)佛像の顔容 額から鼻梁にかけて一直線である。額の面と鼻梁上の面とは、しばしば同じ平

面である。側面からみると、目の彫りかたが斜下へ切りこんでゐる。これらの特色はガンダラの的であり、さかのぼればギリシア的でさへある。

(2) 佛像の服制 通肩もあるが、偏袒右肩もある。それが第六洞などの佛像の服制とはちがふ。第六洞の服制は北魏式とか、冤服式とか名付けられるべきものであるが、さういふものとはちがひ、佛像、菩薩、神像、飛天などの衣文が、わりに寫實的である。身體に密著し、ひだは刻線であるか、隆起線であつて、わりに寫實的である。これらはガンダラのあるものに、またはマツラに似てゐる。

(3) 門口のシヴァ神、ヴィシュヌ神の肉體表現はインド的である。けれども翼冠や三叉(PL.13,17)の矛や金剛杵にはギリシア・ローマ的要素がみとめられる。

(4) 菩薩、神像、貴人のいたゞく寶冠は、ガンダラ式といつてよいが、(PL.98, 111)とくに近いものをもとめると中央アジア的である。(Fig.11) キジール壁畫とくらべてみれば、よくわかるであらう。

(5) 龕形は楣拱龕、尖拱龕ともにガンダラ浮彫に多くみられる。天蓋の龕も、まれにあるやうである。¹⁾

(6) 格天井は別として、その各區のうちにある三角持送り天井は、ガンダラや中央アジアの形式とかがへてよい。

たとへば中央アジアのキジール第一様式の畫家洞 Maler Hähle では、まったくこれと同じ天井がみられる。²⁾ たゞキジール畫家洞の天井は単一の組入れ天井で、雲岡のごとく格天井との複合でない。畫家洞以外でも第一區第三洞、第五洞は三角持送り天井である。³⁾ それからアフガニスタンでも、バミアンA窟院その他は、やはりこの三角持送り天井である。⁴⁾ また十世紀にくだるが、カシュミールのパンドレントハーン寺院の天井もこれである。⁵⁾

要するに雲岡第八洞の三角持送り天井は、西北インド、アフガニスタン方面より、中央アジアのキジールにかけて行はれたもので、こゝではさらに、これを重複させ、折上げた六個の格間の一々に入れて、格天井と組合せたのである。



第十一圖 (Fig. 11) キジール菩薩頭部
(天馬洞後壁)

1 A. Grünwedel; *Buddhist Art in India*, London 1901, Fig. 7.

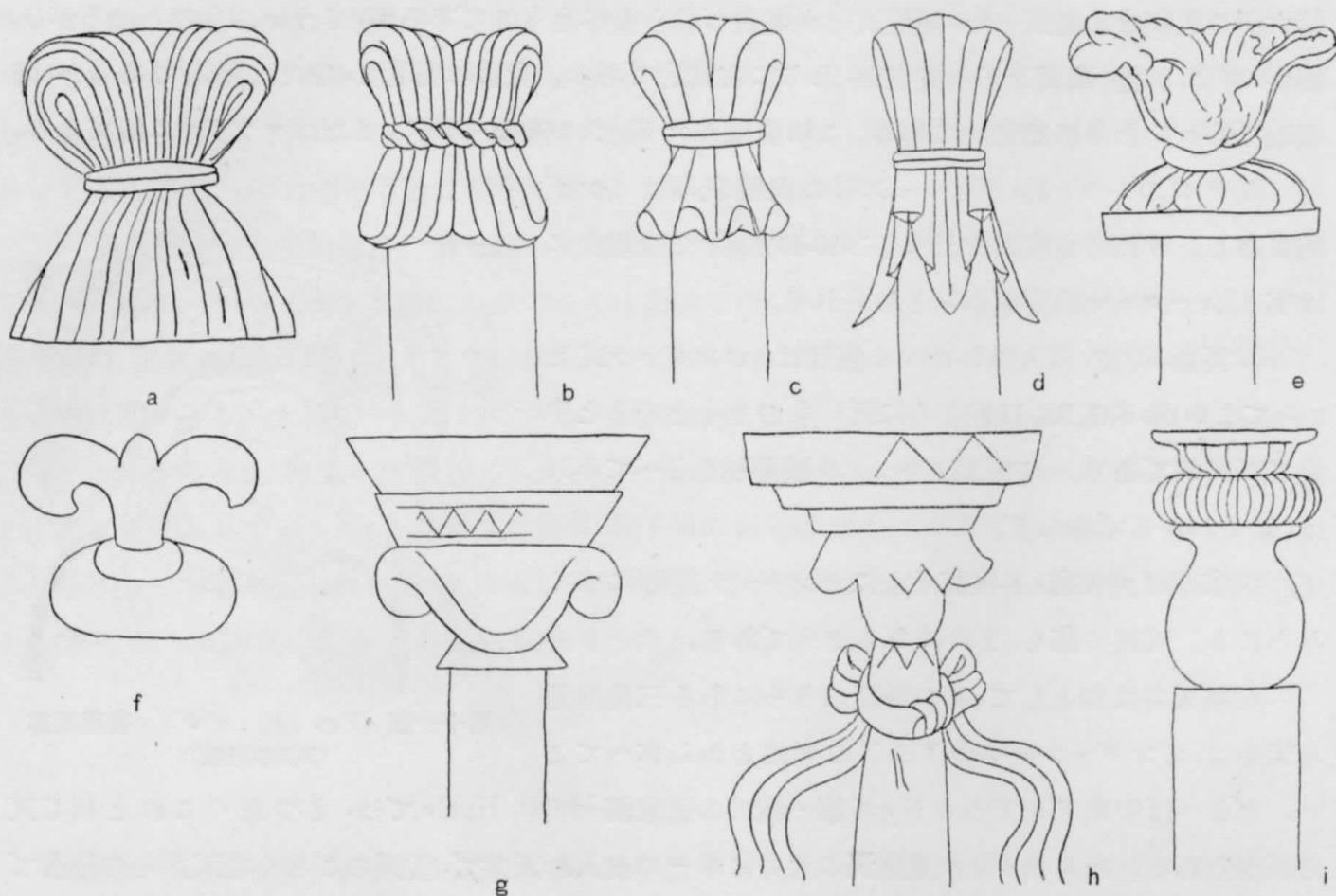
2 A. Grünwedel; *Alt-buddhistische Kultstätten*, Figs. 332, 333.

3 *Ibid.*, pp. 129, 330, 卷末圖. J. Hackin; *Nouvelles recherches archéologiques à Bāmiyān*, (Mémoires de la délégation archéologique française en Afghanistan, Tome. III) Paris 1933, Figs. III, VII.

4 A. et Y. Godard et J. Hackin; *Les antiquités bouddhiques de Bāmiyān*, Paris et Bruxelles 1928, Figs. 14, 21

5 A. Fourcher; *L'art Gréco-bouddhique du Grandhāra*, Tome I, Paris 1905, Fig. 57.

(7)塔形ではシナ風の瓦葺木造塔婆はない。いはゞ角材を組合せたやうな重層塔である。各層に天蓋やうの屋蓋をのせ、最上にアカンサス様のかざりをおく。すなはち重層閣とギリシア式柱頭の結合である。



第十二圖 (Fig. 12) 柱 頭 飾 各 種

- a) 雲岡第八洞東壁 b) 龍門古陽洞南壁 c) 敦煌第百十一洞 d) 敦煌第百十二洞 e) ギジール財寶洞
f) ギジール合唱洞 g) パミヤン53m大佛洞 h) パミヤン カクラク八角洞 i) アジャンタ第十七洞

(8) 龕柱といふか、柱頭飾といふべきか、こゝには竹几、もしくは籐几のやうな龕の傍柱がある。それはまったく籐几のやうであるが、これを龍門の古陽洞の佛龕(b)にくらべると、それは柱頭飾にすぎないことがわかる。柱身が略されてゐるのである (Fig.12)。これをさらにさかのぼると、敦煌の北魏窟であつて、こゝには布片をかぶせたやうな柱頭(c)(d)をみる。さらに中央アジアのキジールまでゆくと、はつきり植物の葉になつたもの(e)がある。しかし、その下半はまるくふくれ、中央を強くしばつた紐のやうな意匠とともに、まさしく敦煌、雲岡の源流であることをおもはせるし、またこゝには柱身をうしなつた例(f)もある。もっとも、よく吟味すれば、この例は柱身が下の欄楯にかく

¹ 長廣、水野『龍門石窟の研究』1941年刊、Pl. 79.

² P. Pelliot; *Touen-houang*, Tome III et IV, Paris 1920, 1921, Pl. CXCI, CXCIV.

³ A. Grünwedel; *Alt-Kutscha*, Berlin 1920, Pls. XL, XLI.

⁴ A. Grünwedel; *Alt-buddhistische Kultstätten*, Fig. 124.

れてゐるわけであるが、とにかく、柱身のみえないことは事實である。ところが、これらはさらにバミヤン¹⁾(g)(h)の壁畫、アジャンタ²⁾(i)の壁畫とさかのぼれば、そこでは柱頭飾であることがすこぶる明瞭である。だから、かなり變化はしてゐるが、もとづくところはインドにあり、特有のベル型柱頭から、バミヤンの複雑な柱頭になり、そのひもでくゝつた意匠などもくゝつて、敦煌あたりの布帛をかぶせたやうなものが生れたのであらう。



第十三圖 (Fig. 13) 簍 座 の 變 遷

A. 圓形 a,b) ガンダアラ c,d) ペグラム e,f) キジイル航海者洞 g) 雲岡第八洞菩薩立像簍座 h) 雲岡第八洞龍傍柱
B. 方形 i) マツラア j) キジイル洗足洞 k) 雲岡第一洞北壁右龍

¹ A. et Y. Godard et J. Hackin; *Ibid.*, Pl. XIX. J. Hackin; *Nouvelles recherches archéologiques à Bāmiyān*, Pls. LIX, LXXIV.

² J. Griffiths; *The Painting in the Buddhist Cave-temples of Ajantā, Khandesh, India*, London 1896, Vol. I, Pl. 62.

(9) つぎは籐几である。(Fig. 13) これは『南齊書』侯景傳にいふ筌蹄である。つねに菩薩の倚子としてあらはされる。しかし、また、あるばあひには菩薩のふみ臺ともなり(g), また、あるばあひには龕拱の臺柱(h)にもなっている。それは中央アジアのキジール²⁾(e)(f), アフガニスタンのベクラム³⁾(c)(d), またいはゆるガンダハラ地方⁴⁾(a)(b)からサンチ^{Sanchi}にまでにもみとめられ、また方形の例はキジール⁵⁾(j)やガンダハラ⁶⁾や、マツラ⁷⁾(i)にもある。雲岡では方形の例は第十九洞東脇洞の本尊臺座にあるが、第一洞北壁右龕の倚子も方形らしい。

(10) 装飾文様はまづ蓮華と唐草である。

(a) 蓮華と蓮瓣文 蓮華は隧道、門口、天井格間等の頂上に大形のロゼットとして浮彫されてゐる。いづれも複瓣で、そのうへ隧道、門口の合場には二重になってゐる。小さい蓮華は天井におけるごとく、ところどころの空白に散らしてある。欄間の填充には方形の、眞上からみた蓮華と、なゝめ上からみた蓮華とがあり、みな單瓣である。(Fig. 14 ab) それに、これから變化したものとして三つ葉四出文がある。三つ葉の四出文はすでに中央アジアのギジール⁸⁾にあり、方形の正蓮華文はニヤ聚落址やロラン聚落址の木彫にさかんにみられるとともに、ガンダハラの石彫中にもみいだされる⁹⁾。

また蓮瓣を一行にならべた蓮瓣帯が洞内ではさかんにつかはれてゐる (Fig. 14c)。それとともに、この蓮瓣帯が蓮座の役目をしてゐることもある。また足趺にもなっている。蓮座には、このほか線刻で花瓣のほそいものがあるし、線刻で仰蓮になったものもみられる。

また、こゝでは蓮華文がさかんで、蓮華文の應用が頻繁である。門口拱柱のかはりに大きな蓮華の花束がつくられてゐるのは、いちじるしい例である。

(b) 唐草文 唐草文は壁面層序の文様帯としてさかんにつかはれてゐる。それには三つ葉の環つなぎ文、半パルメットの波狀文と半パルメット並列文とがある。(Fig. 14d-h) いづれも單位をみれば三瓣のパルメットの略された三つ葉、もしくは半パルメットである。門口、拱梁の半パルメット

1 藤田豊八博士「胡床につきて」(東西交渉史の研究、西域篇所収) 164頁には、『梁書』卷56、侯景傳からつぎの二句を引用してゐる。「(侯景は梁の禪をうけて) ここにおいて南郊に天を柴燎し、壇にのぼりて禪をうく、文物ならびに 舊儀により、輜車をもつてし、牀に鼓吹をのせ、橐駝に犠牲をおはせ、輦上に筌蹄をおき、脚をたれて坐す」「纂立してよりのち、時に白の帟をつけ、なほ青袍を被り、あるひは牙梳をもつて髻にさしはさみ、牀上にはつねに胡牀および筌蹄を設け、靴をつけ脚をたれて坐す」これをみると、われわれがこゝにいふ竹几、もしくは籐几は、このころ流行をみた筌蹄といはれるものゝやうである。

2 A. Grünwedel; *Alt-Kutscha*, Pls. XIX, XX.

3 J. Hackin; *Recherches archéologiques à Begram*, Paris 1939, Pl. XL.

4 A. Grünwedel; *Buddhist Art in India*, Fig. 7.

5 A. Grünwedel; *Alt-Kutscha*, Pls. XXX, XXXI.

6 A. Foucher; *L'art gréco-bouddhique*, Fig. 410.

7 J. Ph. Vogel; *La sculpture de Mathurā*, (Ars Asiatica, XV), Paris et Bruxelles 1930, Pl. XXXIV b.

8 A. Grünwedel; *Altbuddhistische Kultstätten*, Fig. 259.

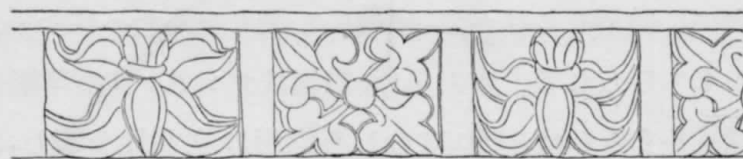
9 A. Stein; *Ancient Khotan*, Oxford 1907, Vol. II, Pls. LXVIII, LXIX. A. Stein; *Serindia*, Oxford 1921, Vol. IV, Pls. XVII, XVIII, XXXII. A. Foucher; *Ibid.*, Tome I, Fig. 236.

並列文(h)は、その中央に三つ葉になったパルメットをあらはしてゐる。側壁第一層の唐草文帯をなす三つ葉環つなぎ文(d)は、パルメットが略されて三つ葉になり、それを交互に並置して、文様をつくったのだが、これから、もろもろの環つなぎ文が発達する。第六洞、第九洞の、複雑になった環つなぎ文の原型である。前室浮彫本生の區劃をなす波狀唐草文帯(f)は、半パルメットの先端からつぎの半パルメットがでゝある點で異例である。要するに、ガンダァラのアカンサス裝飾がよほど粗雑に變化したもので、その變化はすでにガンダァラ自身にも、中央アジアのロゥラン、キジールにもあらはれてゐる。¹⁾

以上、諸種の西方的要素は、いずれもその表現手法において西方の原型より單純化され、素朴になってゐることが特色である。人物彫像では寫實的な原型にたよりつゝも、かならずしもその模倣にとらはれることなく、手法の上に大膽な省略をしてゐる。顔のまるみ、手足のまるみなどは子供っぽく素朴で、ガンダァラ様式とはかなりちがってゐる。浮彫表面に微妙なモデリングはない。したがって、寫眞にとつてみて、身體各部の、こまやかな陰影は生じない。彫像には木彫をみるやうな、奔放な面と面との交叉が強調され、文様には斜面彫の手法が加味されてゐる。なほ、この大まかな浮彫

¹⁾ A. Stein; *Serindia*, Pls. XXXI, XXXIV.

A. Grünwedel; *Altbuddhistische Kultstätten*, Figs. 236, 400, 424. A. Foucher; *L'art gréco-bouddhique*, Figs. 94, 118.



a) 斜蓮華文, 三ツ葉四出文



b) 斜蓮華文, 正蓮華文



c) 蓮 瓣 文



d) 三つ葉環つなぎ文



e) 半パルメット波狀文 1



f) 半パルメット波狀文 2



g) 半パルメット並列文 1



h) 半パルメット並列文 2

第十四圖 (Fig.14) 第八洞蓮華文唐草文帯

表面に線刻をくはへて、彫像にしまりをあたへてゐる。天衣、裳の衣文のみならず、眉や目にも線刻がもちひられる。がんらい、線刻はガンダラの浮彫手法になく、別系の手法である。浮彫固有の様式からみれば、それはむしろ浮彫の立體性を殺し、別の線畫的アクセントをあたへることである。線刻がつよくなることは浮彫様式の敗北である。第八洞では、さいはひ、この線刻手法と浮彫手法とが、適度にうまく調和してゐる。

第八洞——第七洞にも共通するが——造形様式にあらはれたシナの要素は、西方的要素に比してずっと種類がすくない。下にこれを列挙してみる。

(1) 楣拱龕の垂帳 主室の北壁上層龕をはじめ、東西南の三壁の楣拱龕には、かならず帳幕がほどこしてある。(PL. 41) ガンダラ浮彫にも、楣拱龕そのものは、すでに盛んにもちひられてゐるが、その龕の帳幕はほとんどみられない。また中央アジアのキジル石窟にもみることがすくない。たゞバミヤンの石窟では、しばしば帳幕をひきしぼって弧形をなすものをみるが、こゝでは、まだ楣拱龕と結合してゐない。シナでは漢魏以來、墓飾の畫象石に、あるひは墓飾の壁畫に貴人の家屋、宮殿内部をあらはすとき、かならず帳幕がある。山東省の武氏石室畫象をはじめ、遼陽の漢代壁畫、くだつては高句麗古墳の壁畫に、その例がある。したがって第八洞佛龕の帳幕はシナ古來の室内裝飾であつた帷幕、あるひは帳臺の意匠を採用したものであらう。

(2) 獸面飾 第八洞北壁の帳幕(PL. 38, 39)および、南壁第二層の脇侍菩薩の寶冠(PL. 101, 102, 113)には獸面飾がある。ガンダラ佛教美術をもとにしてかんがへると、この獸面は獅子座をかざる獅子像の頭部にほかならない。ガンダラでは、いろいろの裝飾に獅子の意匠をもちひてゐる。その意匠が北魏につたはつたのであらうが、雲岡彫刻家はこの獅子面をシナ古來の獸面によって代置したのである。

(3) 龍の彫飾 インドにおいて龍 Nāga は雲、雨をおこす神通力のあるものとせられ、佛教の説話にもしばしば登場する。だから龍の圖形は、インド以來いくたびか製作されたし、中央アジアのキジル石窟の壁畫にも、その姿はみとめられる。しかし、シナにおいても龍は周漢以來、重要な造形的主題であり、たとへば四神の一としても缺くことのできない神獸であつた。第八洞南壁明窓の龍(PL. 85)や東、西、南三壁佛龕の龍形(PL. 48)は本來、西方的な龍 Nāga の思想にもとづく造形ではあらうけれども、その表現形式においては、あきらかに漢魏以來の傳習にもとづいてゐる。ことに、このころの碑石の表飾を想起するとき、いよいよこの感をふかくする。

第八洞における以上のシナの要素は、その表現手法において、西方的要素とちがつてゐる。とくに龍や獸面、または鳥獸形は線刻を浮彫面につよくほどこし、浮彫が本來の立體性を主張するのでなく、浮彫が線刻の表現をたすけてゐるごとく感じられる。これは、たしかに周漢以來のシナの

¹ J. Hackin; *Nouvelles recherches archéologiques à Bāmiyān*, Pls. XIV, XXVII.

な常套法である。雲岡工人中には、このやうなシナの傳統に習熟した人々が、参加してゐたことはたしかである。

第八洞造形様式における西方的要素と、シナの要素の概略は、以上のごとくである。西方的要素がきはめて濃厚でありながら、西方的なものゝ直模になってゐない。それを一度つくりかへて、かういふものが出来あがつたのである。つまり第八洞作家中には、寫實の技量をそなへ、造形の活趣をもった人々がゐたのである。その作家たちが、西域人であつたかどうかは、うたがはしい。西域人も作家中にゐたかも知れないが、それは純ガンダラ風の人ではなく、インド風に育った人でもなかつたであらう。あるひは、中央アジアのオアシスの人たちであつたらうか、あるひは涼州あたりに住んでゐて、西域とふかい接觸をもった人たちであつたであらうか。

しかし、シナの様式要素の明白に存在することは、漢族工人がはたらいてゐたことを意味してゐる。漢族工人が第八洞造設にあたり、どんなポストにゐたか知れないけれども、かれらが鮮明に自分たちの形式語をかたつてゐることは興味ふかい。

第八洞の彫刻家は、第七洞の彫刻家よりも、よほど作風に弾力があり、自由奔放である。この作家についての記録は、いま、まったくない。われわれの、たよるところは、たゞ、その造形様式のみである。

4

そこで、この石窟開鑿の年代である。文獻および造像銘が、まったくのこつてゐないので、以上のべた様式を、北魏諸石窟と對比して、相對的にその年代を決定するほかないのである。すなはち西方的要素とシナの要素との二方面から推論しよう。

北魏文化の發展法則は、時代のくだるとゝもに、漢族的要素が増加することである。この法則を雲岡石窟にあてはめるのは、もとより正當であらう。したがって第八窟の造營は、西方的要素が濃厚であるといふ理由から、雲岡初期様式の一つとかがへられる。

雲岡石窟の佛像において、漢族的要素のつよくなつた一轉期は、第十六洞本尊大佛の改作と、第六洞の造營であらう。これは、その佛像の衣裳に北魏式とも、冕服式ともいふべき服制がみられるので、その關係から、太和四年乃至十年(480—486)以後の造營と推定される¹⁾。そうすると、第八洞——第七洞をもふくむ——の造營年代は、おそくもこれ以前である。そして、その年代は、雲岡最初の石窟群である曇曜五窟の和平初年(460)開始をもって、その上限としなければならない。つまり曇曜五窟の創始は、高宗文成帝時代であり、第六洞の開鑿は高祖孝文帝時代であるとかんがへ

1 長廣「雲岡石窟に於ける佛像の服制について」(東方學報, 京都, 第十五冊四分) 1947年刊

雲岡石窟第八洞

られるが、それでは第七、第八洞は高祖の父である顯祖獻文帝時代の開鑿とかがへてよからうか。

獻文帝は和平六年(465)夏に即位してゐる。『魏書』卷六によれば即位第三年の皇興元年(467)、に雲岡石窟寺に行幸してゐる。すなはち

八月丁酉、武州山石窟寺に行幸す

とある。當時の文獻は、雲岡のことを武州山と記してゐる。獻文帝が佛教を大いに尊崇してゐたことは、『魏書』釋老志によって推察することができるが、この武州山石窟寺行幸の時期(467)は、第七、第八洞開鑿に關係があると想定することは可能である。

圖 版 解 説

第 八 洞

PL. 1 第七洞 および第八洞外景

この写真では第八洞と第七洞とがならんでゐる。第七洞には、荒れはてながらも建物がのこつてゐるが、第八洞にはない。第七洞と第八洞にわたって、なにか大きな建物があつたやうな痕がある。崖の高所、兩窟の中間あたりを中心として左右ななめに溝がほつてある。ちょうど三角形のやねを、こゝにとりつけたやうに見える。頂點には棟とか桁をとほすやうなまるい孔が三つあいてゐる。その下はひどくこはれてゐるが、棟の上とその東とにたくさんの小孔を整然と鑿つてゐる。これは、やはり棟かざりの類をとりつけたものとおもふ。(三角頂點まで總高 19.70m)

PL. 2 第八洞 外景、特に前室西壁をしめす

これには西壁がみえる。腰壁の供養者列像二段と、その下の天人供養者の一段はからうじてみえるが、上の本生圖浮彫はまったくみえない。しかし、壁面中央たてにとほつてゐる隆起線と、これに直角のよこの隆起線數段とは、この壁面における本生圖の區劃をかすかにしめしてゐる。腰壁の三段も上二段は北壁にまはつてゐないらしい。ただ下の一段だけは北壁につらなつてゐることが確實である。(西壁高 14.30m)

PL. 3 第八洞 外景 特に前室東壁をしめす

全面坐佛の列龕であることは、ほぼわかる。第七洞、第八洞間の碑形も、その龜趺も、こゝからは、いくらか、わかりやすいであらう。北壁に腰壁の最下層一段がまはつてゐることは、これでもわかる。それから、第九洞との鑿りくぼめた境目がよくわかる。(東壁高 14.20m)

PL. 4 前室 北壁

北壁はもつともひどくいたんでゐる。第七洞の前室北壁を参照してにらんでみても、いまなものも確認することはできない。洞口は大きく、それにくらべると、明窓は小さい。明窓には石壁をつくり、土をぬり、小さい窓をきつてゐる。もともと明障子をはめたのである。窓の上に洞額が

あり、佛龕洞といふ。第一列、第二列、第三列、第四列と小穴の並列がみえる。第二列西端には隅がけにやゝ大きな孔があり、この材木は斜にでゐたものらしい。(壁高 16.40m)

PL. 5 前室 東壁

これをみると、碑形の臺が龜らしいことがよくわかる。第七洞をむすぶ隧道もよくわかる。腰壁の三段のうち、上二段は、それぞれ 0.92m と 0.98m、その供養者列像は窄袖と袴子のすがた、それに僧形もあつたらしい。みな蓮枝をもつてゐたと思はれる。その一體ごとに小さい孔があるのは、中古に泥で修理された名残である。

全壁が千佛龕であり、そのなかに五つの大佛龕、高さ約 0.90m が、ただしく配置されてゐる。小孔の並列は二段ある。それから、この上部北壁に梁の孔、また東壁に桁の孔とみとめられるものがある。それによつて想像されるものは、ちょうど現在七洞まへに立つてゐる樓閣建築である。そして、その三壁の小さい圓孔の列はその各層の床にあたることになる。(全高約 16.40m)

PL. 6 前室 西壁一部 (南端中ほど)

西壁の浮彫で、いくらか残つてゐるところは、南端の中ほどと、北端の中ほどだけである。圖版はその南端の中ほどをしめす。小さい孔の列より下の部分である。宮殿をあらはした楯拱の帳屋がみえる。その中心の光背を背おつたものはなくなつたが、わきの合掌した人物は、二三残つてゐる。帳屋の上には突起した飾があるらしい。そしてその左端には小さい戸口がみえる。扉は半びらきになつてゐる。そしてこの圖像をわかつのに唐草の波狀文をつかつてゐること第七洞とおなじである。この唐草の波狀文は第七洞東壁にもみられるが、半パルメットが、波狀の蔓からわきにでるのではなく、その半パルメットのさきから、つぎの半パルメットが逆にでるやうになつてゐる。いはゞ半パルメットそのものを波狀につないだもので、めづらしい文様である。第七洞前室東壁には、三種の文様帯があるから、こゝにもあつたはずであるが、いまはみえない。

雲岡石窟第八洞

PL. 7A 前室 南壁および西壁一部(南端中ほど)

B 前室 西壁一部(北端中ほど)

A. 西壁の南の隅には少し画像が残っている。こまかい図様の唐草文帯がみえ、その上に楣拱龕があり、龕内に尊像を失った擧身光背と、その脇に坐った人像とがある。本生談の一つであらうが、題材はわからない。この西壁と直角に袖になつた壁面がある。上ほど破壊しているが、小佛龕を上下左右にならべているのがみえる。ちやうど東壁の千佛のやうである。

B. 北端の中位にある。小さい孔の列よりは上である。なにか複雑な図形でよくわからない。けれども小さい孔の列だけはあざやかにみえる。北壁の西部、ちやうど明窓の高さに、大きな立像のあることがわかる。おぼろげに、その像の痕がみえるとともに、わづかながら、光焰の光背が残っている。これは第七洞にも一致する。

PL. 8 前室 隧道

第七洞から兩洞をむすぶ隧道を通じて、第八洞拱門をのぞんだところである。手まへの柱は第七洞樓閣の壁中の柱である。天井の浮彫は残っているが、側壁にはまったくない。(隧道高 2.46 m)

PL. 9A 前室 隧道天井

B 前室 隧道天井 飛天

A. 隧道天井の全景である。中央に二重の蓮華がある。うちは七瓣だが、そとは十二瓣である。その蓮華文を、四方から飛んでゐる天人がさしへてゐるかつかうである。そして左右兩側壁からのびあがつてきた樹木の枝葉が天井にまでのびあがつてゐる。樹にはさきのとがった潤葉をごく幼稚につけてゐる。この木は明窓兩側、また第五洞入口の立木のごとくである。この樹下に、たぶん武人の像がきざんであつたらしい。(蓮華直徑 0.73 m)

B. 四人の天は童形である。頭髮をうしろにあげてゐるか、左右にわけてゐるかである。まるまると肥つてゐる。肢態はのびのびとしてゐる。頸かざりも、釧も、下裳もみな刻線であらはしてゐる。腰のひだをみると腰衣をつけただけのやうであるが、脚のふちにひるがへつた、ひれ状のものによって、わづかに下裳をつけてゐることがわかる。

PL. 10, 11 拱 門

大きな拱門をひらいてゐる。上には明窓がある。内部は

かなり暗いが、なかへはいつて、じつと眼をすへてゐると、ぼんやりと内部の様子がわかってくる。それに反し、拱門のわきは片光線をうけて浮彫像がひきたつてみえる。矛をつけた門神、多面多臂の神像、自然のまゝの光線でみても、實にうつくしい。こゝで内側と外側とくらべると、いかにひどく風化してゐるかよくわかるであらう。(拱門高さ 6.26 m 拱門幅 4.00 m)

PL. 12 拱門東側

門口垂直の側壁が二段となり、下に武装の神像がたち、上に多面多臂の神像が坐つてゐる。そしてその上がやうやく彎曲していつて天井になる。こゝには大蓮華と飛天とがある。

立つた神像は、左脚をあげ、左手をあげ、からだをくねらせ、それに應じて顔も右下をむいてゐる。その鎧をきたボウズは、中央アジアにみる武人像とあまり變らぬが、かういふ鳥翼のある冠をつけ、金剛杵をもち、三叉の矛をもつた姿はどこにもみない。そういふ意味からいふと、まったく雲岡獨特である。けれども、その各要素は本文でも指摘したやうに、またギリシア傳來のアイデアである。この外がはに立つた武人も甲冑をつけてゐる。足は大きく左右にひらいてゐる。(門神高 2.70 m)

PL. 13-15 拱門東側 シゾア神像

拱門東側の曲面になつた個所に二體の飛天がある。外側はきえさつて、たゞ足さきのみが残っている。内側はよく残つて、堂々たる姿である。

この飛天の下に接してインド風の神像が彫られてゐる。第七洞では同様な個所に同形の神像があつた。けれども、それにはなんの座もなかつた。第八洞では牛座といつてもよいやうに牛の上に坐つてゐる。のみならず第七洞では破損してわからなかつた外側の半身がこゝではいくらか明瞭である。りっぱな三面寶冠をいたゞいた中央の顔、そのむきぐあひ、圓板形の日月をさしあげた手、膝をまげた右足のボウズ、これらは兩神像が一對で、同一方式によつて彫られてゐることを語つてゐる。しかし、よくみると第八洞の方は、三面六臂ではなく、三面八臂である。中間の二つの手には弓とか環とかをにぎつてゐる。胸にあてた手も第八洞の神像では掌の内に葡萄の一ふさをもつてゐる。掌をまへにむけたその手は微妙でなかなかうつくしい。いったいに、第八洞の神像の方が作品としてすぐれ、彫法は明快でよどみがない。ことに顔の眉、目、鼻、唇は力にみちてゐる。顔に表

現を集中してゐる。體軀に比して三面の顔が大きいのが、なにかこの像の「精神のたぎりあふれる」のを感じさせる。これに比べると第七洞拱門東側の神像は體軀にも——顔はもちろん——肥満をひきしめることがなく、表現のゆるみを感じさせる。

この神像は牛に乗ってゐる。牛は門口の内側に頭部、門口の外側に尻をむけ、足をまげてうづくまってゐる。しかし首は門口の外側にむけてゐる。門口の内側にむけた神像の顔は、この牛の首のむけ方と呼應し、たがひに語りあふ。そこでこの騎乗像は一層きりりと、しまったものとなった。牛の脚は意外にみじかい。そのため、堂々たる牛の體軀が、さらに張りをあたへられてゐる。

牛にのつた神像は、シヴァ神である。佛典にいふ大自在天 Mahēśvara である。それは破壊の神であるとともに吉祥の神であり、また生産の神である。¹『大智度論』(大正大藏經, XXV) 第二に「摩醯首羅天——秦に大自在といふ——は八臂三眼にして白牛にのる」といふ。(シヴァ像高 1.60 m)

¹ E. Chavannes; *Mission archéologique dans la Chine septentrionale*, Tome I, 2^e Partie, p. 310.

PL. 16 拱門西側

東側に應ずるやうに武裝の神像がたち、廣臂の神像が座し、さらに對應する飛天になる。門神ともいふべき武人の像のわきに、こゝにも消えかゝつた武裝の像がある。これも正面きつて足をひろげて立ってゐたらしい。(門神 2.75 m)

PL. 17—19 拱門西側 ヴィシュヌ神像

拱門アアチの曲面にうつる個所に二體の飛天があつた。外側の飛天は、かすかに顔面と左手と足の膝部とを、のこすだけで、あとは消滅した。

この飛天の下に、ほとんど間隔をおかず、インド風の神像がある。五面六臂、大きな鳥にのつてゐる。大きな肥満した身體で、腹をつきだし、兩脚を左右にひらいて坐り、足裏をあはせてゐる。こういふ自由な、むしろ、ぶざまなポーズは中國では、あまりはやらなかつた。その全裸の表現はインド的である。左右の第二手はたかくかゝげ、日月をかたどる圓板を捧げてゐる。第一手は右手を膝におき手首を上にまげ、左手を胸にあげ、鳥をもつてゐる。もつとも背後にある第三手は、第一手と第二手との中間にのび、左手に弓をもつてゐる。右手は破損してゐるが矢をもつたものであらう。

五つの顔はいづれも丸顔である。額の髪は渦まいてゐる。鬚の毛は耳をかくし、ながく肩の上に、たれさがつてゐる。

正面の顔もわらつてゐるが、ほかの四つの顔は、口をやゝひらいてわらひ、あどけない表情をしてゐる。そのわらひ方は、かの古拙的微笑のごとき神秘的な陰影は、微塵もふくまれてゐない。アフガニスタン發見の塑像に、このやうな毛髪と、このやうなわらひ顔のものを、みいだすことができる。この五面六臂の像の座になつてゐる鳥は口に珠をふくんでゐる。頸から胴には鱗狀の羽毛をしめし、尾翼は五つにわかれて、さがまるく巻きこんでゐる。こまかな線刻で細部を克明に彫りこんでゐる手法は、北壁の獅子像や、明窓の龍の浮彫に似てゐる。しかし五面六臂の神像と、この鳥とのむすびつきは、きはめて不自然であり、あきらかに両者が別々の「視覚」の所産であることを感じさせる。常盤大定、關野貞兩博士は、この鳥形に坐した五面六臂をヴィシュヌ像と推定してゐる。

毘紐天 Viṣṇu である。おなじく『大智度論』(大正大藏經 XXV) は、大自在天について「毘紐天——秦に遍閼といふ——は四臂にして、貝をとらへ、輪をもち、金翅鳥にのる」といつてゐる。また那羅延天 Nārāyaṇa ともいふ。(ヴィシュヌ像高 1.50 m)

¹ 『支那佛教史蹟』1926年刊, 44頁

PL. 20A 拱門西側 門神

B 拱門東側 門神

相對する門神。服裝も、もちものも、おなじである。顔は東側の方が大きく、ゆたかにみえる。外がはにある立ちはだかつた武神像も相むかつて立ってゐる。下の方にみえる小さい孔は泥をぬつたときの名残。前方の溝のやうなほりこみは、中古に門口の枠でもつけた、その名残であらう。最近には石をつみ、泥をぬつた壁がこゝにあつた。(A 門神高 2.75 m B 門神高 2.70 m)

PL. 21 拱門天井

拱門頂の大蓮華。それは二重になつてゐる。四方から飛天がさゝげてゐる。その點、第七、第八洞中間隧道の天井におなじである。蓮肉は大きく、蓮瓣はむっくりとしてゐる。内部は八瓣、外部は十瓣ばかり。飛天は、ほとんど壊れてゐる。あさく彫つた天衣の、ひるがへつたさまがうかゞへる。この大蓮華の破損の状態をみると、もとの、あつち肉もりのぐあひがわかるであらう。(蓮華徑 1.05 m)

PL. 22 拱門天井西半 飛天蓮華

西側の飛天を、まともに撮影したもの。内がはの飛天は、

雲岡石窟第八洞

ひろい胸をもった、ゆたかな男性的の姿態をあらはしてゐる。身體をまげ、兩足をうしろ方に跳ねてゐる。全體の構圖も、とゞのひ、手足の比例もおちついてゐる。左手は、蓮華の蕾らしいものをもちながら腰にあて、右手は上にまげて、指さきに蓮華の蕾らしいものをつまんでゐる。上半身と左手との關係は閉ざされた形、上半身と右手との關係は開かれた形。そのため、兩手に相互對蹠性ができる。表現は自由であり、しかも、やすらいだ姿勢をとり、眼を下方にそゞ顔つきが一層慈愛にみちみちて見える。上身は裸形、下裳はうすく、その衣文は線刻、それで下裳が足さきにおよんでゐるにかゝらず、全裸の印象を與へてゐる。圓光背も、ひるがへる天衣も、線刻である。(飛天像長 1.03m)

PL. 23 拱門 天井東側 飛天

拱門東側の飛天をまともに撮影したもの。内側の飛天はよく残り、外にむかつてとんでゐる。頭に高髻をいたゞき、左手をさしあげ、右手をまげて胸につけてゐる。太い左腕と角ばった右肩とは、ぎこちなく見えるが、これは浮彫の厚みが目にはいるからである。胸においた右手の指の表現は、纖細でうつくしい。腰は女性的にふとく、みた目に下半身がおもく感ぜられる。圓光背と天衣とは線刻によつてしめされ、肉體上の衣文も、また、ほそい線で陰刻してある。この線刻を無視すると、まったく裸體に見える。ぐつとのびて前室の方にむかつて、とんでゐる身體の運動感、この粗朴な浮彫に勢をあたへてゐる。外側の飛天も、これに應ずるやうに、外に向つてとんでゐたらしい。(飛天像長 1.44m)

PL. 24 前室 北壁 明窓東側

明窓は、近世の保護施設である石と泥との壁でふさがれ、小さい窓がある。この壁のため、明窓の側壁から、天井にいたるところは、まだその下にかくれてゐる。側壁のすそに「たこ」の頭のやうな山嶽がある。こゝに樹木が生え、すくすくとのびてゐる。そして天井でその樹枝がおひしげつてゐる。比丘はこの樹下に坐し、二段になつてゐる。頭から衣をすつぱりとかぶり、座床の上にすはつてゐるらしい。外壁のあれたさまをみよ。(明窓高 4.00 m)

PL. 25 前室 北壁 明窓西側

全體の構成は東側におなじである。その二段になつた比丘の修道像である。なにか座具がみえる。衣文はほそい線刻である。胸のあひだから內衣がみえる。どちらもまるい顔であるが、額や目の下にある皺、こめかみ、目尻、頬にえぐ

られた凹みなどで老人をあらはしたことがわかる。頸にも筋肉の隆起がみえる。それは決して寫實的な巧さでなく、類型的、説明的ではあるが、一種の風格があるのを否定できない。下の比丘は、右のやうな皺なく、若人の相である。左手にぼっこり顔をだしてゐる、まるいものは、樹枝にかけた頭陀袋である。上をみると樹上に鳥がとまつてゐる。(各像高約 1.00 m)

PL. 26A 前室 北壁 明窓西側 上層禪定比丘像

B 前室 北壁 明窓西側 下層禪定比丘像

Aは上層の老僧をあらはしたもの、Bは下層のわかい僧をあらはしたもの。たがひに比較すると、そのわざとちがへた意圖がよくわかる。右の下にみえる、むっくりしたものは山嶽の隆起である。(各像高約 1.00 m)

PL. 27 主室 東壁全景

腰壁のほか四層にしきられ、整然と八龕がならぶ。下二層が北壁にくひいつてゐるさま、下からあほいだ上龕のやうす、南壁の垂直なさまなどに注意されたい。(壁高 12.50 m)

PL. 28 主室 西壁 全景

右に對照する壁面であるが、このとほりのいたみかたである。小さい穴は中古に泥で補修したときの材穴である。この風化はうしろが山につゞいてゐるためである。東壁が七洞西壁と背なかあはせになつて、山の水分から隔離されて、よくのこつたのとよい對照である。(壁高 12.50 m)

PL. 29 主室 北壁 全景

なにぶん奥行がせまいので、北壁全貌をつくすためには、かういふことになる。手まへにみえてゐるのは拱門である。これでまだ北壁西隅と北壁上端とが、かくれてゐる。下ほどひどくいたんでおり、坐佛は泥像であり、まへの祭壇はつみ石である。どちらも近時のまにあはせものにすぎない。

PL. 30A 主室 北壁 上層龕

B 主室 北壁 下層龕

A. むかつて左下からみあげた寫眞で、楣拱額の一部がみえ、五尊がずらりとならんでゐる。その保存がわるいのと、顔のあたりに、よこにとぼつてゐる脆弱な砂岩層が目だつ。(龕高 6.14m 龕幅 8.20 m)

B. 本尊は補修の泥佛、基壇は追加の石づみ、いづれも、

ごく近代のものである。佛龕のそとの装飾はきえてなく、龕内いっぱいの光背は、その痕迹がみとめられるのみ。龕の内側に供養天の立像が小さく彫りだされてゐる。小さいから菩薩の像ではなからうと推定される。(龕高 5.17m 龕幅 7.14m)

PL. 31A 主室北壁下層龕西脇

B 主室北壁下層龕東脇

左右の龕もひどく溶けてゐる。左方はなにもみえない。

A. 右方は佛の立像であることが、おぼろげながらわかる。像高 2.90m。ひくい圓形の座、あるひは籐几の臺座かも知れない。高さ 0.81m。(像高 2.88m)

B. 左の龕の上に、浮彫が、わづかに残ってゐる。右端の合掌童子は拱頰の供養天であらう。それにつぐ弓技の人は三人ゐる。弓をはって満を持してゐる。これにつぐ東壁の一部に、佛傳の浮彫があるから、これも佛傳であらうか。佛傳とすれば第二洞、第六洞などにみるやうに、太子競射の場面であらう。(浮彫人物像高 1.10m)

PL. 32 主室北壁上層龕

主室の床からみあげた寫眞である。中央に三尊—中央に一倚坐佛、左右に二交脚菩薩—があり、その左右の隅には小型の半跏思惟像があるが、西隅の方は全壊してをり、東隅の方は、この寫眞でほとんどみえない。(PL. 31参照)これら五體を、一組の五尊として一つの形式をなすものと考へてよいか、どうかは疑はしい。北魏後期の佛像、たとへば龍門石窟群の蓮華洞にみられる五尊形式は、一佛、二菩薩立像、二弟子立像の組合せであり、それでは二菩薩が、あきらかに脇侍的役割を果たしてゐる。つまり明瞭に三尊形式が確立し、これに、さらに二弟子立像が脇侍として加はり、五尊形式となる。中心の主尊に對し、左右の造像は、すべて從屬的地位にある。いま第八洞北壁上層の五尊像では、このやうな五尊形式はみられない。中央の倚坐佛主尊に對し、左右の交脚菩薩は、主尊の脇侍の役目をしてゐるわけではない。なほまた、交脚菩薩像にきはめて重要な信仰的、禮拜的意義をあたへられてゐたことは、雲岡の諸石窟—ことに初期石窟である第十七洞—でもあきらかに推察できる。したがって倚坐佛の左右に、同大同型の交脚菩薩像を彫ったことは、べつに圖像學的な意味からではなく、造像形式をととのへて、左右均齊をたもったものであらう。

さらに左右端の半跏思惟像は、とくに小形につくられてゐる點が注目される。やはり佛龕構成上、從屬的な形式を

とつたものであらう。つまりすゝんでいへば佛傳中の太子思惟像とみるべきであらう。(龕高 6.14m)

PL. 33 主室北壁上層龕中央三尊像

北壁上層の大部分が、この圖版にうつてゐるが、左右兩端の半跏像はこゝにみえない。全體がひどくいたんでゐる上に、足もとのしあげの粗末であることが注意される。(本尊高 4.50m)

PL. 34 主室北壁上層龕本尊佛倚像

中央本尊は大きな丸顔である。大きな肉髻と頭部がよくのこつてゐる。身體は、ほとんど風化し、左肩は剝離して左側におちてゐる。右手はなくなつてゐるが、舉手形であつたらう。左手は比較的によくのこり、俯手形である。(PL. 37A) 膝の上にふせておき、第三指と第四指とを折りまげて、下裳をあげてゐるやうである。足もぶつきらばうに彫つて、荒削りなのは、下からみえないからであらうか。獅子の臺が粗末で、鑿あとを歴然と残してゐるのも、そのためとおもふ。

大きな舉身光は外縁の火焰がよく残つてゐる。それが朱にぬられ、あれた白い地肌と對照してうつくしい。もちろん、中心の頭のまはりには、蓮華がある。そのそとの一帯に禪定佛の像がならぶ。これより外、これより下は、磨滅してわからない。(本尊高 4.50m)

PL. 35 主室北壁上層龕左脇交脚菩薩像

帷幕の下から左方の交脚菩薩像がみえる。三面寶冠はわりに小さく、三面の圓板形のあひだに、立狀の唐草がある。胸の板飾はあるが、銀飾と璽珞の垂飾は、こはれてみえない。わきの半跏思惟像(PL. 36)によつて、そのもやうを察すべきであらう。右手は舉手形、のちの施無畏の印 abhaya mudrā といふものにあたる。左手は膝の上に俯した俯手形、掌を上にあげ、第三指以下を、ちょっと折りまげてゐる。腰のまはりには、まだ後世補修の泥と藁が、かたく密著してゐる。上身は裸形であるが、下裳のひだは本尊とおなじく、平行突帯からなる。第十七洞本尊の交脚像と比較してもよいが、第二十洞諸尊とくらべてもよい。腰かけは籐几とおもふが、溶けてよくわからない。足下に、もう一段ひくい蓮座があつたのであらうか。あるひは、つくりだすつもりであつたのか。とにかく龕の床より一段たかく、獅子とおなじ臺上にゐる。(高 4.13m)

PL.36 主室北壁上層龕 左半跏思惟像

北壁上龕の東隅にある半跏思惟像である。三面寶冠の正面は蓮華形で、そこからリボン、おそらく瓔珞がさがり、側面の圓板につらなっている。胸は、さきのとがった板飾と、獸頭をもった銀飾と、連珠の垂飾との三重からなる。板飾は、もちろん金属の薄板であらう。わがくにの飛鳥の木像などによくみるもの。銀飾は、いま現物がないが、これとおなじ仕組の腕輪はある。金属、ばねじかけ、一方に缺所があり、その両端に、獸頭、鳥頭などをつくり、これをひらいて腕とか頸にはめれば、自然に閉ぢてはづれないといふ式。¹⁾こゝでは、もう原義をうしなつて、バネらしくない。垂飾はたゞ珠をたくさんつないで、だらりとさがっただけのもの。それから、上膊と手頸に、花形をならべた腕環がある。下裳が足をおほふので、残念ながら、足の銀はみとめられない。その少年らしい、すんなりした兩腕、頬杖をつく右手、右足をもった左手など、いづれもうつくしい。

これは籐几のやうすがよくわかる。左足下には小さい蓮座、それから像全體に、もう一段蓮座をしつらへてゐる。光背の有無がはっきりせぬが、最初からなかったらしい。(像高 2.55 m)

¹⁾ O. M. Dalton: *The Treasure of the Oxus*, London, 1926, Pls. xvii-xx

PL. 37A 主室北壁上層龕 本尊左手左足

B 主室北壁上層龕 左脇獅子

A. 手もうつくしいが、足にかゝった、裳もうつくしい。形式化した突帯をならべた裳である。足のところの粗末なつくりだしは、下からみえないためであらう。(膝高 1.70 m)

B. 中央本尊兩側の獅子は、いま左側の獅子のみが、みとめられる。大きな口をひらき、舌をたれてゐる。瞳は、まるく、眼は角ばつてゐる。力づよい顎に、小さな圓圈を線刻するのは、獸毛をあらはすのであらう。耳の上には、角のやうに毛をまいて、渦卷にしてゐる。毛は小群をなし、一つ一つは、渦卷形にをはつてゐる。寫實的ではなく、説明的な彫刻であるが、なんといつても、そのマツシイヴな顎と力のほりきつた足は、實に堂々としてゐる。(獅子高 1.24 m)

PL. 38 主室北壁上層龕 楣拱額

楣拱額の西半である。天井に接した三角文帶、これは天蓋様の寶帳の簡略化されたものであらう。これにつぐ尖拱小龕には奏樂の天人と舞踊の天人とが彫つてある。大きな

圓形頭光をおひ、天衣を大きく左右にひるがへしてゐる。奏樂の種類により多少身體をかゞめ、身體をねぢてゐるが、だいたい正面むきに立つてゐる。足は楣拱の枠によつてかくれてゐるが、本來は樓上で欄杆にかくれるべきである。その點、第九洞、第十洞前室の樂天龕列は、よくもとの趣意をつたへてゐる。こゝでは中央アジアのキジールとアフガニスタンのバミヤンの例を注意しておかう。さうすれば、この種の意匠の、よつてきたところがあきらかになるであらう。¹⁾ 框のなかの飛天は、奏樂飛天とおなじく高髻にゆひ、圓光をおひ、框いっぱい跳躍してゐる。みな中心の方向に身體をむけ、腰は下縁によこたへ、足先きは跳ねあげ、上體をなゝめ、また垂直におこしてゐる。兩手を胸にあはせるもの、片手を胸にあて片手をよこにひらくもの、片手は腰にあて片手を前方にあげるもの、それぞれ自由であつて、嚴正な左右相稱の配置ではない。肥満してゐる身體は、どの部分にも力むことなく、おっとりとなんでゐる。

第三段は帳幕である。佛龕に帳幕をつけることはガンダアラ彫刻にはないやうで、おそらく中國の牀帳の制からでも、おもひついたものであらう。帳幕のむすび目には獸面飾を彫つてゐる。つまり牀帳にはかういふ金具でもあつたかとおもはれる。獅子面を佛龕の飾りに用ひることは、ガンダアラでも、すでにあり、たとへばロリヤン・タンガイ出土の三尊像龕にそれがある。²⁾ 第七洞の北壁にも、同様の獸面飾があり、それにはむきだした齒の下にあらはされてゐたが、こゝでは上顎で垂帳幕の結び目を噛んでゐるやうに彫られてゐる。

框のうち、小區劃をわかづ縦の束には連珠文がある。圓形と圓形とのあひだに三つの小さい圓形をいれてゐる。(框高 0.55 m)

¹⁾ A. Grünwedel: *Alt buddhistische Kultstätten*, Figs. 124, 199, 200, 204, 205. J. Hackin: *Nouvelles recherches archéologiques à Bambyān*, Pl. XIV.

²⁾ A. Foucher; *Ibid.*, Tom. II, Fig. 408.

PL. 39 主室北壁上層龕 楣拱一部

中央より東の一部分である。上の龕中には排管、豎笛、腰鼓の樂天がみえ、中段の框のなかには、足をはねた二人の飛天がある。框には東に連珠文がある。帳幕のひきしぼつたところに、獸面のかざりがあり、こゝから紐がたれてゐる。また、むかつて右端では、半圓になった帳幕と帳幕とのあひだに、小さい飛天が彫つてある。まるまるとした飛天である。(框高 0.55 m)

PL. 40 主室北壁上層龕垂幕の童子像

これは帳幕の左端の侏儒である。莊嚴な佛龕彫刻において、おもひがけないユウモアであった。なにの目的でつくられたか、わからない。帳幕に密着してゐる。頭髮が異様な髷をつくり、額に皺がある。目は大きくとびだしてゐる。童子とするよりも侏儒である。けれども、こゝでは、なにも力仕事はしてゐない。たゞ妙に帳幕にだきついてゐるのである。もとは第九洞、第十洞前室にみられるやうに、天井をさへる肘木のやうな役目であつたとおもふ。さうするとかういふところに侏儒をおくことも、うなづかれる。つまりいまは、それから一轉して、單なる裝飾と化してしまつたのである。背中にはV字形に天衣がかゝり、そのはしが、また腕にかゝって、大きくゆれさがつてゐる。腰にはみじかい腰布をつけ、その腰布のまきかたは、あたかも褌のやうなぐあひになつてゐる。この服裝は侏儒獨特のものである。身體は帳幕にだきついてゐるが、顔はよこをむいて、南面してゐる。第七洞北壁帳幕にも同様な侏儒形をみるが、それは本洞右端のものとおなじく、とびこみ型で、もとの肘木の意匠を、いくらかもつてゐる。要するに、うつくしい彫刻ではないが、野性があり、風俗的に興味をひく。(頸高 1.00 m)

PL. 41 主室東壁上部 (第二、三、四層)

42 主室東壁下部 (腰壁、第一、二、三層)

東壁の全貌であるが、下一層と供養者列像の腰壁は PL. 41 には、まだあらはれず、PL. 42 によつて、はじめておぎなはれる。天井の一部分、北壁の一部分、それから南壁の約半分が、こゝにあらはれてゐる。その各壁の連關を、こゝでみられたい。(第二層高 12.47 m)

PL. 43 主室東壁 (第三、四層)

東壁上層は、もつとも保存のよい壁面である。四つの佛龕が整然とならび、完全に保存されてゐる。北壁上層の半跏像も、比較的保存がよく、こゝにその全身をあらはしてゐる。(第二層高 2.50 m)

PL. 44 主室東壁第四層南龕

佛像の右なゝめから撮つた寫眞である。龕の床にいきなり彫つた佛であるが、下にとほしの蓮辨帶があるため、けつかう蓮華座の用をはたしてゐる。龕内空間は、よほどゆつたりとつてゐる。ことに大きな無地の光背が效果的である。頸の付け根あたりが、いちばん、ふかく鑿つてあり、頭部は、すこしうつむきかげんに充分ふかく彫つてゐる。これが雲

岡佛を丸彫的にみせる根源である。頸から以下の胴體はあさく、平面的である。ことに、最下の膝がしらのあたりをみよ。とにかく、この像をみて、氣のつくことは額、鼻、手、足膝の凸出部がすべて一致して、一定の高さをたもつてゐることである。こゝにひとつの面を、かんがへることができ。それは製作の、ひとつのプロセスをしめすものであり、彫刻の技法をしめすものでもある。こゝでは、あらゆる場合において、この技法が、みとめられる。

龕側の供養天人は、ごく浅い彫り方である。四人が合掌胡跪し、一人が合掌して立つてゐる。脇侍ではなく、禮讃の天人群である。香爐をさへげた飛天も、活潑にみごとに、とんでゐる。(本尊高 1.42 m)

PL. 45 主室東壁第四層南龕佛上身

眉に浅い刻線をもちひ、そのおこりはほとんど相接するばかり、大きく弧をえがいて耳ちかくにまで達する。眉と目のあひだをひろくして、額がそのためにせばめられる。細めにひらいた眼は、目じりにいたつて、ほそく鋭くのびてゐる。眼球は、もとより、いれてゐない。脣はうすく、かすかに彎曲してゐる。總じて目鼻口が顔の正面にあつめられ頬と顎とが、ひろく残されてゐる。耳は、おどろくほど、細ながくつくられて、そのうしろは急にぞんざいになり、なゝめに鑿りこんだまゝである。(佛頭 0.44 m)

PL. 46 主室東壁第四層北龕

この龕は大きくたてに龜裂が二本ある。胸の部分が大きく剝離してゐるのは惜しい。この佛は、とくに、その手相を南龕とかへただけあつて、指のうごきはデリケートで、表情がある。右手は胸にあげ、掌をうちにむけただけでなく、第三指をすこしまげ、第四指を大きくまげて拇指にふれさせてゐる。(PL. 47) 左手は結跏趺坐した右足を掌でおさへながら、指をのばしてゐる。衣の襞はあさい。左肩から左肘にかけての衣には、段になつた襞と刻線の襞とが、交互に、おほまかに、つくられてゐる。

光背は南龕同様に大きく、無地の舉身光が、龕いっぱいひろがつてゐる。いま圓光その他の彩色があつたらしくみえるが、オリジナルなものかどうか斷定できない。兩方から蓮華をさへげた天人は勢よくとんでゐる。合掌胡跪の供養天は、一側三段五人、簡略な彫り方である。最下の一人は、これもそまつに彫つた猫のやうな獸形の上にひざまづいてゐる。(像高 1.50 m)

PL. 47 主室 東壁 第四層 北龕 佛上身

堂々たる威厳に満ちた顔容をしめしてゐる。顔のやうすは前者によく似てゐるけれども、眉のひきぐあひ、目のきれかた、顎のひろさなどに小異があり、同一作家でないことはほどあきらかとおもふ。(佛頭 0.44 m)

PL. 48 東壁 第四層 佛龕拱端龍形と拱柱

第四層の南北龕は尖拱龕だが、その拱端に獸形がある。獸形は有角の龍形だが、前脚二本でたつてゐる。それをうけた蓮座がある。ほとんど線彫にちかい仰蓮華である。そして、そのしたに籐几のやうなものがあつて、これをうけてゐる。これは半跏像の坐する籐几のやうであるから、かりに籐座とよぶが、實是一種の柱頭飾である。もともと、こゝには拱端をうける傍柱があるはずである。ところが傍柱のうちには、なにか、こゝにみる籐座のやうなものを柱頭飾としたものがあり、また、布片をかぶせて、くゞったやうなものがある。もともと籐座をおいたり、布片をかぶせたりするやうな柱頭はなかったであらうが、インドの鐘形柱頭が變化してゐるうちに、籐座とか布片をしぼったやうなかつかうになり、それに暗示をえて、しだいかういふものを生むにいたつたのであらう。バミヤン第一大佛洞内部の壁面にあるのは、ちゃうど籐座ふうの腰をしぼった型をしてゐるが、布片をあらはしてゐるかどうかあきらかでない。(畫面高 1.37 m)

¹ 『龍門石窟の研究』圖版79

² P. Pelliot; *Touen-Houang*, Tome IV, Pls. CXCI CXCHL

PL. 49 主室 東壁 第三層 南龕

楣拱龕のうちに二重の座を設けて交脚像を彫る。兩肘をはり、わき下がふかく切れこんでゐる。このやりかたは、第四層坐佛とは趣を異にし、また、べつの作家を豫想せしめる。それは交脚像であるためではない。北龕の坐佛も第四層の二龕にくらべると、わき下がふかい。

楣拱龕の拱額は、四つの區劃に飛天を彫り、下には帳幕をくゞりあげてゐる。飛天は、左右二體づゝが、ほど向きあつてゐるが、決してシムメトリックではない。ことに、中央の二體中、右の飛天は、きはめて機智的である。すなはち左方の飛天は右の手を肘のところまでまげ、それを腰下にあて、左の手は斜上にあげ、顔も腹も、だいたい正面にむけてゐる。足は兩方とも左方に跳ねてゐる。これはよくある形式であつて、いはゞ、シムメトリイを豫想させる形式である。しかし、これに對する右方の飛天は、これに照應してシムメトリ

イをつくることを、拒んでゐる。左方の飛天と同様に、左手をのばしきつて、さしあげてゐるのは、均衡をやぶる第一である。そして中央に對して、そつぽをむけた頭を、そのさしあげた腕に、ひつつけてゐるポーズは、よほど變つてゐて印象的である。斜上にさしあげた左手と、むきだしになつたその脇の下、それにつゞける脇腹の線が、この楣拱額の矩形の框をほど對角線的に兩分したので、飛天の下半身は、その隅に壓縮されてゐる。その壓縮された、窮屈な表現に對して、天衣の線刻のみが、ひろい左下三角形の空白に、ひらひらとひらめいてゐるのは、ちよつと皮肉な意匠である。(龕高 2.20 m)

PL. 50 主室 東壁 第三層 南龕 佛交脚像

腰をおろした須彌座がひくいので、交脚の兩足は、左右に大きくひらいてゐる。それで、身體の姿勢は、くつろいで悠然たる構へである。顔はまるく、肉髻は大きく、耳は長大である。鼻梁の小破してゐるのは惜しいが、線刻された眉、目はうつくしい。眉のなだらかな曲線と額際のだひらな一線とのあひだには、けだかく、知的にかゞやく平面ができる。脣はうすく、兩端が上にそり、いはゆるアアケイック・スマイルである。目鼻口が顔の中心部にあつまり、頬と顎とが、いちじるしく豐滿さをあらはしてゐる。床、足のあたりは、あら彫りのまゝである。下からみえないといふことを充分考慮にいられたやりかたである。(像高 1.17 m)

PL. 51 主室 東壁 第三層 南龕 右脇侍

この脇侍が菩薩であるか、天人であるかは、しかと決めがたい。寶冠はいはゆる三面冠である。正面と兩側面に圓板形をおき、圓板には右旋の放射線を彫る。左右の側板は、筭のやうなもので留めたらしい。そのはしに、房のやうなものが、たれさがつてゐる。正面圓板にも、房のやうなものがみえる。そして圓板上に、新月形をおき、側面板とのあひだに、なにかの蕾のやうな突起をつくる。これはパルメットの簡略になつたものであらう。頭髮はつよい刻線でとゞのへられてゐる。目はふくらんだ上に、ほそい一本の刻線ででき、やさしい顔である。耳は長大で、耳朵になにかまるい飾がある。全體に淺く、幅ひろにできてゐる。右手はやゝまげてたれ、環か、天衣の一端かをもち、左手は胸にあげて蓮華の蕾をもつ。脇腹をほそくし、腰をふとくしたさまは、まさにインド風である。下裳をまとひ、天衣を左肩からかけてゐるが、うすもので、髪は刻線からなり、ゆたかな肉つきが、つよくもりあがつてゐる。これも、脚のところはあら

けづりのまゝである。(像高 0.93 m)

PL. 52 主室 東壁 第三層 南龕 左脇侍

右脇侍よりは、ふかく彫つてある。腰のアクセントも強い。右手と左手とのぐあひは、おなじである。寶冠も、ほどおなじであるが、正面はたゞ右旋放射の圓板だけで、房のやうなものはさがつてゐない。新月形と蕾のやうなものは、これにもある。(像高 1.00 m)

PL. 53 主室 東壁 第三層 北龕

この佛龕には、たてに大きな龜裂がある。本尊は、臺座を設けず、床の上にじかに彫つてゐる。右手は擧手形、左手は捻手形で、衣端をにぎつてゐる。この両手のあらはし方は、きはめて迫眞的である、右の腕は、つよく鑿つてほそいが、左の腕はふつくりとゆたかである。衣の襷はたゞの刻線であるが、おほまかで、うつくしい。頭部や両手の入念な彫法に比して、兩足は無造作に彫られてゐる。しかし、彫像全體としての、堂々たる印象は、おほひがたい。(龕高 2.20 m)

PL. 54 主室 東壁 第三層 北龕 佛上身

佛のまろい顔には、つよい意志的な表情がある。上脛が、やゝはれぼったい。眉は線刻をくはへず、たゞ、額と眼窠の接觸した稜線のみによって表現されてゐる。鼻および口はうつくしく、唇はうすい。下唇は、ことに艶々しくわらつてゐる。(佛頭 0.47 m)

PL. 55 主室 東壁 第三層 北龕 左脇侍

南龕の脇侍に比べ肌があられてゐる。ことに右足はなくなつてゐる。あさい彫りの立像であることは、だいたい似てゐる。衣裳が刻線ばかりで、できてゐるのもおなじであるが、胸にあけて蕾をもつた右手の手くびを、下にむけてさげてゐるのが、やゝちがふ。寶冠なく、とがつた、高い髻が目だつ。まろい頭光は線刻である。(像高 1.05 m)

PL. 56 主室 東壁 第三層 北側柱基侏儒

龕の兩側にある塔柱は、うづくまつた侏儒によって、さゝへられてゐる。すなはち、侏儒は尻を地面につけんばかりにし、兩脚をまげて左右にひらき、兩手を左右にあけて、塔柱を頭上に、いたゞいてゐる。腰衣をつけたゞけの裸形で、下腹をあらはしてゐる。頭髮はわからないが、額ぎはが、ひくゝなつてゐるのは、髪があるわけであらう。耳は、やはりながくてまろい。ひらたい顔には、まるくさがつた眉と目

をつくり、ながい舌をべろりとたれてゐる。鼻根はふとく、皺がみえ、その上には白毫のやうなものがある。胸と腹は、壊れてゐるが、それぞれに、まるくふくれてゐる。腰衣は北壁帳幕上と同じく、パンツの上に褌をしめたやうになり、それを平行した刻線だけで、あらはしてゐる。(像高 0.62 m)

PL. 57 主室 東壁 第三層 中央柱基侏儒

この層には三つの塔柱があり、したがつて、北端、中央、南端にそれぞれ三人の侏儒がゐる。いづれも、うづくまつて、塔柱をさゝへてゐる。しかし、面貌や體軀はかなりちがふ。これはふさふさした頭髮が群をなして、うしろにかへつてゐる。額には、大きな皺がある。目はまるくみひらいてゐる。力づよく、上顎をかみしめて、頬がふくらんでゐる。刻線であらはした髻を、上の齒なみでかみしめてゐる。力をいれて塔をさゝへてゐるわけである。さしあげた兩手をぐつとよせ、脚をひきよせてゐるので、ぐんと弾力性のある姿體である。手首と上膊には腕輪をつけたらしく、頸にはとがつた飾板をつけ、X字形にまじはる天衣やうのものをかけてゐる。(像高 0.58 m)

PL. 58 主室 東壁 第三層 南端柱基侏儒

この侏儒は、もつとも粗略である。腰衣も、うまくあらはされてゐないし、脚も粗末である。粗略ながら、肩はもりあがり、胸もはつてゐる。胸のまんなかに、大きな溝ができてゐる。目をまるくむき、頬をふくらませ、齒をくひしばつてゐる。頭髮は、まるくなでつけられたが、なんらの彫刻もなく、ま正面に、白毫のやうな、まるいものがある。とにかく三體三様、北端のがもつともびのびし、南端のがもつとも彫法粗略でありながら、姿態はもつとも力みかへつてゐる。(像高 0.55 m)

PL. 59 主室 東壁 第二層 南龕

尖拱龕のうちに臺座をつくらず、床の上にじかに坐佛の本尊を彫る。きはめて溫和な顔容である。右手は擧手形、左手は捻手形で、大きくつかねた衣端をとる。この手は、甲が異常に大きく、指がながい。腕頭は、どつしりとしてゐる。肩はなゝめにさがるが、腕のつけねは角になつてをり、肘が、また、角になつてゐる。胸幅はやゝせまいが、肩と腕がはつてゐるので、充分堂々たる姿である。まへに、大きく四體の供養者を彫つたため、せまくるしく、膝がしらはかくれてみえない。供養者といふが、これは、たかい寶冠をつけ、まろい頭光をおひ、なみなみならぬ供養者である。いはゞ

天王 deva-rāja である。手に手に鉢をさげている。龍傍の、窮屈なところに、ある程度大きく彫らねばならなかったのは、造形的な考慮のほか、これらの供養者たちがなみなみでない天王であるからであり、それを二つに省略できなかったのは四天王であるからであらう。これは佛傳中の一節、四天王奉鉢の光景である。¹⁾(龍高 1.24 m)

¹⁾ E. Chavannes; *Mission archéologique*, p. 311. A. Foucher; *L'art Gréco-bouddhique*, Tome I, p. 417, Fig. 210. A. Grünwedel; *Buddhist Art in India*, Fig. 98.

PL. 60 主室東壁第二層南龍佛上身

惜しいことには右眼にきづがある。左の眉の端も石がいたんである。しかし、それにしても、よく残っている。肉髻はやゝ小さく、まるい。眉はやゝ磨滅しているが、刻線があったことがわかる。上脰が、まるく大きく、ふつくとふくらむが、眼はほそく、ふし目で、目じりが、ほそくとがっている。脰は、あまりまがっていない。(佛頭 0.47 m)

PL. 61 主室東壁第二層南龍尖拱額

拱額内の天人は、みな合掌胡跪している。像は、わりにまるく彫りだしているが、圓光と天衣とは、背地にあさく線刻している。みな中心にむかって、ひざまづいているが、あまりシムメトリックでない。まんなかの二人に、すでに、高低がある。最後に、空白が一致しないため、右端の天人は立ちあがって、左手をたかくのばしている。(PL. 59) さげた左手には、なにかもっているやうである。拱額の上から、のぞいてみる四人の比丘たちもうつくしい。この比丘たちも額ぎはに水平につよい線を彫っている。これは頭髮のあるのをあらはしたのでなく、髪をそったあとのきはだちを、しめすものであることがわかる。

拱梁は、なにか籐でもねちてつくったやうに、二本の刻線がなゝめにまいてをり、まんなかは、紐でしばったやうである。拱梁のふちに、とんである四飛天の奉ずる蓮華は、まんなか渦巻がある。(畫面高 1.40m)

PL. 62 主室東壁第二層南龍右脇四天王

行儀よくならんで、鉢をさげている。寶冠はたかいが、簡略に、なにも彫っていない。下裳と肩にかけた天衣も、簡単な線刻である。顔は童顔のやうであるが、ひきしまつてつよい。ふくらんだ眼瞼に、たゞ一本の刻線をひいて、目をあらはしている。おだやかであるが、いきいきとしている。単純な、しかし、力づよい手の表現をみよ。(像高 0.79m)

PL. 63 主室東壁第二層北龍

この北龍は南龍と、はなはだ似てゐる。坐佛も、ひじやうによく似てゐる。ふとい頸、やゝなで肩であるが、胸をはり、肘を左右にはった堂々たる姿態である。鉢をもつ左手首は破損している。

左右二體づゝの供養者は、とがり帽をいたゞいてゐる。とがり帽は幅ひろの紐で額にしばつたらしい。そのとがり帽のさきが、うしろに倒れてゐる。袖は窄袖、折り襟で、裾は膝上にまで達している。その下は褲子である。ちやうど中央アジアのキジール石窟などにみるイラン人の服装である。たゞそのとがり帽だけは北方の胡族にもあるが、また中央アジアにもある。まさしく、當時中央アジアを潤歩した隊商たちの姿からきてゐるのであらう。(像高 2.20m)

¹⁾ A. Grünwedel; *Altbuddhistische Kultstätten*, Fig. 116. 等しければあらはされるが、こゝでは多く武人の像である。「環喰ひ鳩洞」の像はひざまづいて鉢をさげているが、變な陣笠のやうなものをかぶり、劍をもたない。あるいは商人かも知れぬ。

PL. 64 主室東壁第二層北龍佛上身

まる顔、微笑をたゝへてゐるが、顎はやゝとがっている。上層諸龍の本尊にくらべると、頬、顎の部分がいづらか充實感がたりない。眉、目、鼻、口の表現もおとなしい。右手は、甲をみせてゐるが、第三指と第四指とを折り、拇指に接している。のみならず、第二指、第三指もわづかに折りまげてゐる。ふくらんだ、やはらかさうな手で、健康な子どもの手をおもはせる。左手の鉢は上のたひらな點がこの寫眞でよくわかる。(佛頭 0.47 m)

PL. 65 主室東壁第二層拱端獸形拱柱

拱端の龍が、左右からさがってきて、一種の皿板の上に立っている。どちらも、うしろをふりかへり、一方は口をしめ一方は口をひらいてゐる。角は一本で、耳はながく、目は大きい。

柱は上下ともに渦巻になる。まんなか、くゝった紐のやうなものがみえる。そして、そこから左右に、半パルメットの唐草がたれさがっている。これがなんであるかは、はっきりいへないが、渦巻の部分を取りかへれば、洞口南壁の蓮華束になる。しかし、もともとは、中央アジアやアフガニスタンにおける龍傍の柱に、由來することは、明らかである。そこでは渦巻の柱頭と布幡をくゝりつけた裝飾とがある。もとより柱基に渦巻はない。¹⁾(柱高 0.55 m)

¹⁾ A. Grünwedel; *Altbuddhistische Kultstätten*, Fig. 124. J. Hackin; *Nouvelles recherches archéologiques à Bāmīyān*, Pls. LVI, LIX, LXII,

LXIV, LXXIII, LXXIV, LXXVI もっとも、この柱基とみえるところまでが柱頭飾で、このしたの柱幹が略されてゐるのであらう。

PL. 66 主室 東壁 第二層 北龕 尖拱額

この拱額もわりに扁平である。つまり拱梁の上端が水平にちかいのと、拱額の幅がせまいのである。拱梁の螺旋状の刻線、中央のくまり目など南龕に同じである。坐佛は禪定のすがたである。九體のうち、こゝに七體がみえる。左右シムメトリックにかけた通肩の佛と、偏袒右肩の形式であるが、右肩から右腕をすっぽりと包んだ佛とが、交互に彫られてゐる。たゞ中央の左となりの一體が例外的に通肩になってゐるので、こゝには三體の通肩佛がならぶ。衣文はみな簡単な刻線である。

この圖版には、第二層と第三層をわかつ唐草文が、よくうつゝてゐる。波状の蔓には、二本の刻線を彫り、葉文のわかれ目には、みな紐をくゝったやうな刻線二本を彫る。蔓も、断面が、ふつくりとまるくなるやうに彫るが、葉は左右からV字の谷に彫りこんでゐて、すどい印象をあたへる。(像高 0.30 m)

PL. 67 主室 東壁 第二層 北端 佛傳浮彫

こゝには北龕の拱額右端があらはれてゐる。獸形は一本の角、ながい耳、大きな目のほかに鳥の嘴をもつ。足下の拱柱は上半だけがあらはされてゐる。獸形の上の坐佛は剝離してなくなつてゐる。これについて、佛傳の浮彫がある。上隅には屋根形をつくり、鴟尾をおく。四注屋根である。軒には三斗と叉手束とをつくるが、設計をまちがへたものとみえて、屋根の下半部にくひこんでゐる。軒下には張幕がかゝげられ、そのしたに、障屏と牀臺とがみえる。その上で、むつくりと包まれたやうなのは、太子の妃ヤシヨダラ Yaśodharā である。障屏のむかうに首をだしてゐるのは綵女たちであらう。障屏に、ぶらさがつてゐるのは、琵琶か阮咸のごとき樂器であらう。左端の半跏思惟形は太子である。天衣が大きくひるがへつて、光背の代りをしてゐる。夜半、寢牀によつて、思惟してゐるありさまをしめす。やはり、北壁上龕の思惟像とおなじく、籐几のごときものに坐してゐる。といふよりは、北壁上龕の思惟像は、このすがたの定著したものである。太子のわきには一人の侍者が合掌長跪してゐる。これは、いふまでもなく馬丁チャンドカ Candaka であらう。やがて、このチャンドカにともなはれ、白馬カンタカ Kanthaka にうちのつて城をでる。諸天はこれを讃し、白馬の蹄をとつて、音もなく疾走する。その場面が、この下

の剝離した部分の光景である。あとあしの本をさゝげた天人が、右足をまげ、左足をはね、疾走するすがたであらはされてゐる。かう解釋すると、北壁下層、龕左上の競射をあらはした浮彫も、まづ佛傳中の太子競射の光景といへるであらう。(畫面高 2.50 m)

PL. 68 主室 東壁 腰壁 第一層

南北二龕のうち、北龕は、ほとんど溶けてゐる。腰壁も溶けてゐる。また南端も剝離してゐる。慘憺たる状況のうちに、ほゞ全貌をうかゞふことができる。

腰壁はひくい臺をつくり、その上に、供養者の列像を彫つたものらしい。ぜんたいとして八、九體あつたらしいが、北端二、三體は、全然そのあとをとゞめず、南端の二體も、まったく、そのかたちを知ることができない。中央四體のうち、北端と南端とは、片手をあげ、片足をあげた武人の正面像らしい。なかの南の像は、おなじ武人像と、おもはれるけれども、四肢はまったく残つてゐない。北の像は、兩手をあげてゐる。塔柱の下にゐるから、塔をさしあげた侏儒像かもしれない。しかし、それにしても、第三層のやうにうづくまつてなく、立ちあがつてゐる。

第一層と腰壁とをわかつ輪つなぎ唐草文帯は、こゝでは、まったくみられないが、それでも中央塔柱の下には、かすかにうかゞはれる。(腰壁高 2.10 m)

PL. 69 主室 東壁 第一層 南龕

天蓋の龕であることが、異例である。三角の垂飾と、その下に、裳のある布片をたれてゐる。繪蓋といふものか。ガンダアラにも、これとおなじ天蓋はある。たゞ、もつと寫實的であり、鈴などもさがつてゐる。龕傍には、さまさまの魔衆を、あらはしてゐる。それが、ちやうど、龕形をなすやうに彫られてゐる。ひくい佛座はこはれてしまつて、なにもみえないが、右手は舉手形、左手は膝の上にふせて、衣端をとつてゐる。ふつうにいふ降魔の觸地印 bhūmisparśamudrā でない。右端塔柱の坐佛、塔上の合掌比丘、承花の凛々しい表現をみよ。(龕高 2.12 m)

¹ A. Grünwedel; *Buddhist Art in India*, Figs. 7, 40.

PL. 70A, B 主室 東壁 第一層 南龕 魔衆

天蓋の左右には、おのおの十體ほどの魔衆が、押しあふやうにあらはされてゐる。これらの惡魔たちは、まづ、もえあがるやうな、とがった頭髮で區別される。まるい童顔であるが、目が異様に大きく、鼻はだんご鼻で、眉間には大きな

雲岡石窟第八洞

皺さへある。裸體で胸の肉はあついが、身體は、童兒のやうなやはらかさをもつてゐる。造形は幼稚である。上からいふと山をさしあげたもの、大刀と盾とをとるもの、そのよこは口がとがつて鳥嘴をなすものがあり、そのおくは、なにかわからない。そのしたは弓をひいてゐる。そのわきは、とくに眉間の皺が大きく、大きな鬚があるらしい。そのおくに虎形とも、蛇頭ともみえる獸頭があり、その下に魔王であらうが、甲冑に身をかためた惡魔がゐる。このおくに腹をかゝへた太鼓腹の惡魔がゐる。左傍も最上は大刀をふるつてゐるらしい。その他は、若干頭部が残つてゐるのみであるが、下に立つた像は、魔女の一人であるらしい。おそらく痕跡からすれば、こゝに魔王の三女をあらはし、その下に、化して老女となったものを、あらはしたかとおもふ。(像高 1.25 m)

PL. 71 主室 東壁 第一層 北龕

右半分はとけてゐる。わづかに本尊の輪廓がうかがへるのみである。左がはの脇侍は、顔面剝離するが、菩薩の立像としてよからう。その光背のうへから二人の天人が顔をのぞかせてゐる。それは深いまる彫りである。(像高 1.28m)

PL. 72A,B 主室 西壁

寫真にみるとほりいたんでゐる。最上層がすこし残つてゐるだけである。これはもつぱら浸透してくる背後の水のためである。最上層尖拱龕の上に、蓮瓣文の一帯があり、その上に七體の佛坐像がならび、三角形の垂飾帯になつて、天井につらなる。こゝでは西壁と北壁西端の半跏思惟像との関係がよくわかるであらう。(全壁高 12.57 m)

PL. 73 主室 西壁 第三、四層

第三層は南龕が交脚像であり、北龕が佛坐像であるのが、からうじてわかる。楣拱額のあつたこともわかる。その下の波狀唐草文帯も、一部分だけは、ひじょうによく残つてゐる。第四層はどちらも尖拱龕。拱端に獸形があり、拱柱には籐座のごときものがつくつてあるが、これはさきにのべた如く柱頭飾の誇大されたものである。拱額のなかは、やはり東壁の如く、南は坐佛であり、北は供養者跪坐像である。

最上層の坐佛列像は、蓮瓣帯の上にならび、通肩禪定と偏袒禪定とを、交互にならべてゐる。偏袒禪定といふが、こゝでは衣の端が、すっぽりと右肩をおほひ、右手をつゝんでゐる。まるい頭光に、大きな舉身光をかさね、その光背と光背とのあひだに合掌の化生をふかく彫つてゐる。實にふかい

浮彫である。

これら諸壁の上に三角形の垂飾帯がある。三角形はひとならびで、その三角形はうちがはに、もう一本刻線をくはへてゐる。(第四層高 2.52 m)

PL. 74 主室 西壁 第四層 南龕 佛本尊

西壁に残つた唯一の佛像である。かなりいたんでゐるが部分的にはよく残つたところもある。舉手形の右手、捻手形の左手、その左腕にかゝつた衣端は、大きく袖のやうにかゝつてゐる。この表面はよく残つてゐる。それは水分が蒸發するとき、そのあとに石灰分を残し、そのため表面が硬化するのである。だから、その表皮はかたいが、その一枚下は、ぼろぼろにいたんでゐるのである。龕の内壁には、やはり跪坐合掌の供養者が彫つてある。(像高 1.46 m)

PL. 75 主室 南壁 上部天井

主室南壁は、逆光線になるのでよくみえない。けれども、そのためと、もうひとつは背後の水が浸透してこないで、保存がよい。やゝなゝめにみあげたところ、南壁の二層以上、東壁、西壁の一部、それに天井がうつつてゐる。むかつて左上すみかけにみえるのは北壁上層龕の帳幕である。(全高 12.40 m)

PL. 76,77 主室 南壁 上半

明窓を中心にして、左右見ひらきに東西壁上半をしめす。いま大きな明窓には、石づみの壁がつくつてあつて、窓があけてある。(第三、四層高 5.00 m)

PL. 78,79 主室 南壁 下半

上層にくらべ下層はいたんでゐる。洞口の石づみがとりはらはれて、いまでは大きな洞口が口をひらいてゐる。(第二層上端高 6.50 m)

PL. 80 主室 南壁 明窓東側 天人立像

明窓側壁の供養天人の立像は、なゝめうちに、むかつてたつ。足下には、たかい籐座を、ふんでゐる。これは異例である。けれども、全然ないことはない。第十八洞のわき菩薩は、やはり、かういふ籐座の上に立つてゐる。構造上、像をたかくする必要があるれば、いつでもかういふ手段をとつたのであらう。(立像高 2.15 m)

PL. 81A,B 主室 南壁 明窓東側 天人立像

A. 明窓側壁の天人立像はよこからみると(1)身體に比して頭がふかく彫られ、(2)胸はうすく、腰も足も、わりに力のよわいことがわかる。興味ふかいのは、頭部であつて、正面からみると丸顔に見えるものが、側面となると瓜實顔にかはる。さらに側面では、前面からはまったく印象されない、きゃしゃな感じをうける。この原因は目鼻口が小づくりであることと、それに加へて、大きな耳が超現實的に、かなり背後に彫られてゐること、すなはち正面の顔幅に比して、頭の奥行がふかく造形せられてゐることのためである。

B. 顔のま正面からみると、からだは、すこしねじれてゐる。これを意識的にやったか、どうかは、むづかしい問題である。たぶん、浅い下半身は、より自然に明窓の側壁にそひ、ふかい上半身はより自由に、なゝめうちにむかつたのであらう。合掌して、やゝふし目に立ったすがたはしづかで、けだかい。冠はいはゆる三面寶冠の式。まへ圓板の上に新月形があり、圓板のあひだに三つ葉の唐草が立つ。

菩薩の顔はまるく、顎はやゝとがる。眉は大きく弧状をつくり、しかも線刻して、それをつよめてゐる。目鼻口はわりに小づくりで、口邊に微笑をたゝへてゐる。上身は裸形、左肩から右腰にかけて、天衣をまとひ、その下に下裳をつけてゐる。それはうすもので、髪は刻線であらはずのみ。それで、からだの肉つきは自然にまるまるとみえる。なほ別の天衣とおもはれるものが背なかにまはり、兩腕にかゝつて下の方にたれてゐる。胸には板の胸飾があり、上膊には、刻線で腕環をあらはしてゐる。(像高 2.15 m)

PL. 82 主室 南壁 明窓西側 天人立像

この天人立像も、だいたい東側の立像に一致するが、手足には多少の變化がある。すなはち合掌した手は第五指をやゝまげて、微妙な表情をつくつてゐる。右足は、かるくうかせて、膝を心もちまげてゐる。この足つきによって、われわれはそのやうな瞬間的な運動をとらへた、作者のするどい觀察を知ることができる。寫眞に、黒くみえるところは、朱が残つてゐるのである。(像高 2.22 m)

PL. 83A, B 主室 南壁 明窓西側 天人立像

東側のが靜寂なのに對し、これは、いくらかうごきがある。意識的に變化させたのであらう。顔の表情もうごいてゐる。顔のつくりもやゝ大きく、奥ゆきはあさい。一對の像でありながら、いろいろな點において、ちがひがみえる。下腹がとくにふくれ、左肩からさがった天衣が、大きく起伏してゐるのも、またこの像の特色である。(像高 2.22 m)

PL. 84 主室 南壁 明窓上部 坐佛列像

このところは非常に保存がよい。當初からの朱とおもはれるものが全面にのこつてゐる。赤黒い朱である。たゞ佛像の顔、胸だけは、ぬらすに白くのこしたらしい。坐佛は一般に蓮瓣帶の上にならぶが、中央の六體は、アアチの頂がくひこんでゐるため、この蓮瓣帶が略されてゐる。佛はみな定印、結跏趺坐のかたちだが、兩肩にすっぽり衣のかゝつたシムメトリックの通肩と、左肩にまづかけ、のちに右肩と右腕とをいっしょつゝんだものとの二形式があり、それを、交互に配置してゐる。顔はみなまるく、ふかく、つよく彫られてゐる。かたちは似てゐるが、表情には一々相違があり、作者のちがつたことを暗示してゐる。

また、こゝには天井南中央の格間がみえ、その南がはの飛天が、そのまへの蓮華とともに、はみだして、南壁の上ののしかゝつてゐる。(像高 0.46 m)

PL. 85 主室 南壁 明窓上部 坐佛列像および龍

端坐した佛の列像は前者のつゞきである。蓮瓣帶の下に龍頭がある。これは人像柱の頭上である。やゝながい龍頭は顎、齒なみ、牙をこまかくあらはし、顎鬚をつくり、ながい舌をだし、それに大きな眼と、ふさふさした眉毛とをあらはす。ながい耳、長大な角がある。全身には鱗文をつくり、からだをよち、前脚をあげてをり、後脚もつよくひらいてゐる。ほそい蛇身ではあるが、その四肢と、からだのあつかひは、まったく四足獸である。(右端像高 0.50 m)

PL. 86 主室 南壁中央 供養六天像

主室門口の上部、明窓の下には六體の供養天人像を彫る。この一廓は上に方形の枳形をならべ、なかに、それぞれ八瓣の蓮華をあらはす。方形の枳形にあはせて、俯觀した蓮華となゝめ上からみた蓮華とを交互にあらはす。帳幕は六つの弧をゑがいて、その下にかゝり、左右兩端にはふとい柱がたつ。帳幕の下はふかく彫られ、したがつて、こゝにほそながい、一種の龜がつくられる。

龕内の天人は六體。みな高髻の天人形である。六體のうち、三體づゝシムメトリカルに中心にむかつてゐるが、決して嚴正なシムメトリーとはいへない。手のあらはしかたが二とほりになつてゐて、一つは合掌、一つは片手に蓮華の蕾をもつて胸にあて、片手は膝のあたりにおいてゐる。この二つの形式が交互に配されてゐて、まんなかの二體は、相むかつてゐるのである。みな、あさい彫りの圓光をおひ、腕にかゝつた天衣がうしろにひるがへつてゐる。合掌の天人は、顎

雲岡石窟第八洞

かざりと腕輪のほかX字形にまじはる天衣があり、下裳がある。雷をもった天人は、おなじ飾りと、天衣のほかに左肩から右脇にかゝる天衣をもっている。それが、みな、ほそい刻線である。だから、衣はうすく、その下からゆたかな肉のもりあがりが見える。かやうに、だいたいの形は、一致してゐるが、足の姿勢は、いたって自由である。両端の像は、片足をひざまづいて中央にむかふが、その他の四體は膝をあはせ、また膝をくみ、要するに安坐の姿である。だから、決しておなじでない。からだのむきも、すこしちがへば、まげかたもちがふ、頭の伏せぐあひもちがふ。かやうに、自由であつて、しかも決して雑然としてゐない。シムメトリカルであるとともに、交互に姿勢をかへ、ababのリズムをつくつてゐる。東から第一像、第二像の顔は、よく似てゐる。第三像は似てゐるが、すこしちがふ。これに對し、西半三像はいちじるしくちがひ、また三像間にも大きな相違がある。拱門の縁かざりには、半パルメット並列の唐草文があり、その上に童子の合掌供養者像が見える。頭髪がないのに、頭上がすこしもりあがつてゐるのでおかしいが、やはり剃髪の頭を、あらはすのであらう。顔はまるくて、眉目はながく、鼻はみちかく、口は小さく、耳はながい。(龍總高1.75 m)

PL. 87 主室 南壁中央 供養六天像東半

六天人龍の東半である。まるい頭光はうすく、背にまはつた天衣もうすい。腕からたれた天衣のはしは、たゞの線刻である。からだの肉は、まるくもりあがり、背面の地に接するところは、直角にならず、なゝめに自然に移行してゐる。東から第二像も第四像も、片手を膝のむかうにまはし、手首が膝下にあらはれてゐる。随分かはつた、自由な表現である。(像高約1.10 m)

PL. 88 主室 南壁中央 供養六天像西半

六天人龍の西半である。西から第一像は、なにももっていない。両手を胸のあたりにおき、指をこまかくうごかしてゐる。天衣は幅ひろくからだをおほひ、裸形のやうでない。しかし、そのはりきつた下腹、ふとい腰、實に量感にみちみちてゐる。上身の體格もりつぱであるし、面相もすぐれてゐる。威嚴もあり、慈容もあり、六人中でも白眉である。第三像も、胸にあげた手は、なにももっていない。指をこまかくうごかして優美である。やゝ伏し目の顔も凛々しく、また微笑をふくんでゐる。他の像と同様に、耳端に耳かざりをつけてゐる。(像高約1.20 m)

PL. 89 主室 南壁中央 供養六天第一像

東の端のこの像は、場所がら、すこしおしこめられてゐるかも知れない。やゝいぢけて、おそまつに見える。しかし、そのおそまつなうちにも、實にうひうひしい粗樸さと、うちからあふれでる充實した氣魄とが感ぜられる。上膊のほか、手首にも腕輪がある。手も合掌といふより、かさねあはせてゐる。その上になつた右手の指は、無造作に、たゞの刻線であらはしてゐる。(像高1.15 m)

PL. 90 主室 南壁中央 供養六天東第三像

合掌した手のところは、脆弱な岩層にあたつてゐるので、たゞ、おほまかに両手のかたまりだけを、あらはしてゐる。これにつゞく腕は太い。安坐した足といひ、上身をおこした姿勢といひ、いづれもしっかりしてゐる。顔もうつくしい。大きく弧をえがいた眉、かんたんに刻線をひいた目。第一、第二像とはちがひ、第四像ともちがつた顔をしてゐる。(像高1.14 m)

PL. 91 主室 南壁 拱門上部東脇

入口拱門わきの奏樂の天人である。東の一人は堅笛をふく。裸形の上身には板状の頸かざりと腕輪をつけてゐる。下腹をはり、腰を出す。左脚に全身の重みをのせ、右脚を浮かせる。腰布はやはらかく、たれさがつてゐる。めづらしい頭髪で、よくわからないが、小さい束をいくつもつくりそれをシムメトリイにまいてゐる。そして肩にもさがつて大きくうづまいてゐる。眉目はかんたんで長大、鼻はみちかく、顔はひろい。なかなか凛々しい童形であるとともに、身體のいたるところが弾力にみちみちてゐる。

とんでゐる童子は脚をはねあげてゐる。琵琶をいだし、それを弾く指をうまくあらはしてゐる。顔はゆたかで、愛くるしい。頭髪が大きく、オオルバックのやうに上になであげてゐる。(立像高1.18 m)

PL. 92 主室 南壁 拱門上部西脇

童子は脚をあげ、おどるやうにして、細腰鼓をうつてゐる。腰鼓は胸にかゝり、なゝめにゆらいでゐる。刻線で鑿つた腰布が、わづかにみえる。顔はまるく、額の毛髪は上にあがり、鬢の毛は、わづかにたれてゐる。とんでゐる天人は、身體を弓のやうにまげ、笛を唇にあてゐる。頭髪のやうすはどちらもおなじやうであり、身體の肉つきの表現はゆたかである。(立像高1.11 m)

PL. 93 主室 南壁 拱門上部東脇 堅笛樂天

また、ちかよってみると、石の面は、かすかに凹凸がある。つよくけづった鑿のあとみえる。指は無造作に彫りながら、デリケートにできてゐる。結髪のしかたも、いくらかわかる。(像高 1.18 m)

PL. 94 主室 南壁 拱門上部西脇 腰鼓樂天

やはらかく、みづみづしい肉體を、應揚にあらはしてゐる。腰布と、そのたれさがった紐は、刻線であらはしてゐる。丸顔はわづかにわらつてゐる。ひろげた右手の掌の粗模な彫刻が、實に簡潔である。(像高 1.11 m)

PL. 95 主室 南壁 拱門上部東脇 琵琶樂天

口をかすかにひらいてゐて、まことに、あどけない表情である。脚を勢よくはねあげ、腹をつきだしてゐる。平らな壁面に彫り上げた、彫りのあさい作である。(畫面高 1.20 m)

PL. 96 主室 南壁 拱門上部西脇 横笛樂天

つよく腰をはたてゐる。横笛をさへた手がうつくしく、顔もうつくしい。一種、縹渺たる風韻をそなへた作である。非常に保存もよい。(畫面高 0.77 m)

PL. 97 主室 南壁 第四層 東龜

楣拱龜のなかに寶冠の菩薩交脚像を彫る。腰をやへ浮かして坐し、腰部、腹部の表現はきはめてしまりが無い。右足をまへにして、三瓣の蓮座をふみ、五成の須彌座にすはる。上身は裸體であるが、三種の頸かざりのために、にぎやかである。腹部は平らで、むしろふくらみなく、下裳はまへでかさねられ、裾は足首までおほつてゐる。

まはりの供養者像は小さく、彫りもあさい。楣拱額中の飛天とともに簡單素朴な彫像である。(龜高 2.10 m)

PL. 98 主室 南壁 第四層 東龜 交脚菩薩上身

たかい三面寶冠は中央に弦月をいたゞいてゐる。寶冠からは、大きな紐が左右にたれさがつてゐる。顔はまるく、頸は、みちかくて太い。眉は大きく弧状にひかれ、それをつよめるために、刻線さへある。目の部分はまるくふくれ、それにきれ長の、うつくしい目がある。鼻梁は、わりにみじかく、唇も上にせまつてゐる。肩は堂々とはり、腕も大きくりっぱな體格である。右手を胸にあげ、左手は、膝においてゐる。右手は微妙な指つきをし、指もはつきりしてゐる。左手は指をのばし膝の上をつよくおさへてゐる。めづらしい

手相で、こゝでは、かりに壓手形とよんでおく。薄板の頸かざり、環の頸かざり、環珞の頸かざり、耳たぶのかざりが粗雑にはあるが、うまく組みあはされて、腕にかゝった天衣、上膊と手首の腕輪とともに、この像を莊嚴ならしめてゐる。(像高 1.60 m)

PL. 99 主室 南壁 第三層 東龜

天蓋の下、蓮座の上に坐佛の三尊をつくる。右手のこはれたほかは完存し、簡素でおほまかな美しさをもつ。(龜高 2.18 m 像高 1.45 m)

PL. 100 主室 南壁 第三層 東龜 佛本尊

本尊は、やはり螺髪のない肉髻をもつ。豐滿な丸顔に、溫容をしめし、右手は破損するが舉手のかたち、左手は衣端をにぎつて、捻手のかたちをする。右肩をあらはす偏袒右肩。兩肘をつよく張るために脇下が大きくひらく。衣はたくみにからだにまとひ、おほまかな、ほそい刻線の衣文をつくる。顔には、ながい弧状の眉、ほそくひらいた半眼の目があり、おだやかなうちに、力のこもった表情をする。すうりとした鼻すち、兩端がやへ反つた唇、それらが決して小づくりではなく、しかも、ゆたかな頬と顎とで圍まれてゐる。顎の下には太い、みじかい頸がつゞいてゐる。(像高 1.45 m)

PL. 101 主室 南壁 第三層 東龜 右脇侍

右脇侍は、やへ丈がひくく、足もみじかい。右手には一方のとが

つた環をもち、左手には長方形の笏のごときものをもつ。掌をあげた、いはゞ捻手形である。ある



第十五圖 (Fig. 15) ガンダアラ菩薩頭

ひは、貝葉の梵箴であらうか。ガンダアラ菩薩には梵箴をもったものがあり、文殊菩薩 Mañjuśrī といはれてゐる。(A. Grünwedel; *Buddhist Art in India*, Fig. 147.) 大きな寶髻のまんなかに獸面がある。口に紐かざりをくはへてゐる。この獅子も、文殊菩薩となんらかの關係が、あるかも知れ

ない。(Fig. 15)顔は俯目で、はなはだうつくしい。肩は、ゆたかで、やはらかく、腰は女性のごとく大きい。上身は裸形で天衣をかけ、すそに下装をつける。その下装を、留めるためにしめられた、横にとほるきれが、かへって腰のふとさを、まざまざと感じさせる。足をひらいて蓮座の上に、力よく立ってゐる。蓮瓣はつよく左右にはねあがり、その端がするどくとかつてゐる。この蓮華も、蓮座以外に間々あらはされてゐる。(像高 1.22 m)

PL. 102 主室 南壁 第三層東龕 左脇侍

左脇侍は足もとがあいまいであるが、顔は本尊にも、右脇侍にも似て、一應おなじ作家のものと、推定される。右手になにかの蕾のやうなものをもち、左手には、水瓶をもつてゐる。なに菩薩ときめることはむづかしいが、その指のあしらひはうつくしい。さきのガンダアラ¹⁾浮彫には梵天をもつた文殊菩薩に對して蓮華をもつた觀音菩薩 Avalokiteśvaraがゐる。これも手にもつたのを蓮華の蕾とみれば Padmapāṇiで、Avalokiteśvara といふことになる。髻は實に高大で、その中央に獸面がつき、左右にかざり紐が、たれさがつてゐる。(像高 1.34 m)

¹⁾ A. Grünwedel; *Ibid.*, Fig. 147.

PL. 103 主室 南壁 第二層東龕

右手は小破あるも、舉手の相、左手は衣端をにぎって手首をあげ、いはゆる捻手の相。偏袒右肩といふが、右肩にも天衣のはしが、ちょっとかゝつてゐる。左の肩から腋にかけて、天衣の一部が、袖のやうに大きくひろがつてゐる。これが、威嚴を加へる一因である。兩手の五指の彫りかた、および兩膝から足さき、さらに衣文の表現法は、はなはだ粗雑である。龕傍の渦卷柱は、けつきよくガンダアラ、中央アジアでもみられる龕傍柱で、南壁拱門わきにみえる蓮華の花束はこれの變形であり、籐椅子のやうな龕傍の臺は、その柱頭だけが遊離したものであらう。(龕高 2.23 m)

PL. 104 主室 南壁 第二層東龕 佛上身

まるい、うつくしい顔である。目が、やゝひらいてゐる。口もとは、ほゝえんでゐる。慧知の相が、おのづから輝く。胸のはりはよわい。肩もなで肩であるが、それでも堂々としてゐる。顎がやゝとがり、頸が心もちながくなつてゐる。左肩にかけた天衣のしたに、刻線だけでしめす內衣のはしが、なゝめにみえてゐる。手の彫りかたは、やゝ粗雑である。(像高 1.32 m)

PL. 105A 主室 南壁 第二層東龕 拱額飛天

B 主室 南壁 第二層東龕 拱梁飛天

A. 上にみえる波狀唐草文帶は第二層と第三層とを分つ文様帶である。波狀の蔓は、中央に一本の刻線があり、はねかへつた半パルメットの葉は表面を兩縁よりすいて、あさいV字谷をつくつてゐる。拱額の四體の飛天のうち、中央二體のしめす配置は正しいシムメリトイでない。一種の比例的な構成である。むかつて右の飛天は、右足を折りまげて、身體の重みを、その上にかけ、左足を跳ねあげてゐる。右の手はなゝめ下にのばし、左の手は折りまげて、腰にあてゝゐる。つまり飛翔のかたちであるが、圖像の上では安定した構圖、力の關係からすれば、Z形の構圖である。これに反し、むかつて左の飛天は、その右の飛天の三角形の一邊にそうて、全身をなゝめにたほすのである。左の手をぐつとのはして頭上にあげ、兩足をまげて、うしろに跳ねあげてゐる。力の關係は一本の、なゝめの線上に集中してゐる。つまり、かうして、二つの飛天により比例的な構圖が成立する。このやうな拱額の小さい圖像にも、活潑な彫像を構想しえた、これら彫刻家の闊達なる製作態度、奇智的な着想は注目に價するであらう。(額高 0.52 m)

B. 上の二飛天について、さらに、合掌と合掌でない二飛天がゐる。最後に合掌跪坐した天人がゐる。拱梁は獸身の轉化したものである。中央に、三本のむすびらしい線がみえ、その他はなゝめの刻線がほどこしてある。龕内の飛天は二體づゝ左右から脚をのばし、手をのばしてゐる。そして中央では、佛の頭上に蓮華をさゝげてゐる。(龕幅 1.48 m)

PL. 106 A,B 主室 南壁 第二層東龕 拱額

これは拱額の左右である。一は合掌して、のびのびと、とんでゐる。他は、ぎこちない姿であり、粗略な彫りである。しかも、全體としてこたはらない、自由な空氣が感じられる。その下に、合掌胡跪の天人がゐる。あらはし方は、ほかの天人とかはらぬが、線刻の衣文や天衣がないため、全裸のやうにみえる。

龕の上には、合掌の比丘たちがのぞいてゐる。右に二人、左に二人である。圓光と天衣とは、刻線で背後の地に、あらはしてゐる。しかし、その他の衣文を全然あらはさぬため、これも全裸のやうにみえる。略したのであらう。比丘たちは、みな、まるいあどけない顔をしてゐる。そのうち、むかつて右のはしだけが、やゝ口をひらいて齒をのぞかせてゐる。なほこの圖では、龕内の飛天も、外がはのものが一對みえてゐる。まるまるとした、その體軀と、自由なうごきとをみ

よ。(畫面高A 1.25 m 畫面高B 1.22 m)

PL. 107A,B 主室 南壁 第二層 東龕 供養天人

これには龕内の供養者小像をしめす。まづ小さい立像があり、つぎに合掌胡跪の像がある。後者は東がはの方が、大きい、前者では、西の方のものが大きく、そのかはりか、東の方は、合掌立像が二體である。西の立像は、右手を胸に左手を腰にあてゐる。また、この像では眉目がつりあがつて、特色がある。頭上も高髻にゆつたらしいが、みな簡略な作ゆきで、線刻が略されてゐる。(畫面高A 1.30 m 畫面高B 1.36 m)

PL. 108 主室 南壁 東部 腰壁、第一層

おしいことに頭がない。僧衣の條目はよくみえる。キジルの壁畫でも、比丘の僧衣には、かういふやうな線條をあらはしてゐる。それがからだに密着して、その下の肉つきがよくうかゞへる。體勢からいふと、半跏の像らしい。この龕の右から下の腰壁にかけて風化がはなはだしい。拱門傍柱の蓮華の花束だけがよく残つてゐる。それも上半ばかりである。(第一層腰壁高 4.00 m)

¹ A.G. Grünwenzel; *Altbuddhistische Kultstätten*, Fig. 382.

PL. 109 主室 南壁 拱門東脇 蓮華拱柱

門口に接する壁に、この大蓮華裝飾が彫られてゐる。それは拱門傍柱の變化したものである。中央に、ふとい莖をたて、その二本を細かなにかで縛つてゐる。その莖は、上下で、それぞれ大輪の蓮華をつけてゐる。莖には二本の條を彫る。莖をまたいた繩のやうなものは、まはりに小さい蓮瓣をつけ、またそとに大きな半パルメットの唐草を上下にのばしてゐる。この裝飾は、文様の細部としては、ふつう北魏通用のものでありながら、その構成法がかはつてゐるため注意される。(高 1.90 m)

PL. 110 主室 南壁 第四層 西龕

第四層東龕(PL. 97)によく似てゐる。しかし、この方がよりよくしまつてゐる。顔、手足もよくひきしまつて、すぎがない。寶冠も精緻である。ながくのびた足をみよ。それから下裳のすそのさばきをみよ。そのあつかひ方は、すこぶる明確である。(龕高 2.11 m)

PL. 111 主室 南壁 第四層 西龕 菩薩本尊

實に堂々たる像である。寶冠から顔にかけて、とくに入

念にできてゐるし、かざりのある胸や手相も、うつくしい。銀狀の頸かざりには、大きな鈴がさがつてゐる。腹から膝、足にかけた凹みが、なかなかゆつたりとした、おちつきをしめす。龕の床は、下からみえないので、あらけづりのまゝである。足さきも、いくらかさういふところがみえる。(像高 1.58 m)

PL. 112 主室 南壁 第三層 西龕

左端が、いたんでゐる。本尊も手ばかりでなく、顔もいくらか剝落してゐる。しかし、きはめて充實した、まるみをもつてゐる。顎から胸にかけた體格は實にたくましい。偏袒右肩、右手はこはれてゐるが、衣端をとる左手はうつくしい。薄肉の蓮瓣は上の蓮瓣帯とおなじである。(龕高 2.20 m)

PL. 113 主室 南壁 第三層 西龕 右脇侍

右菩薩も非常に充實したまるみをもつてゐる。眉はとくに大きく、目はたゞのひき目で、しづかに笑をたゝへてゐる。左手はなにかの蕾をもつたやうで、胸にあげ、また右手は衣端か天衣をもつやうで、腰にあてゐる。どちらの手も、微妙でうつくしい。頸かざり、下裳はみな刻線である。肩からさがつた銀狀の頸かざりも大きく、線刻であらはされてゐる。足は左右にひらき、線刻の仰蓮の蓮座の上になつてゐる。(像高 1.40 m)

PL. 114 主室 南壁 第二層 西龕

西端はいたんでゐる。だから、龕傍の籐座形はあつたか、なかつたか嚴密にはいへない。しかし、これだけシメトリイにつくられた東西兩龕だから、たぶんあつたと推定して不合理でない。東がはの傍柱はほそい渦卷柱である。拱端の獸形は角があるが虎らしい。東龕の龍頭らしいのと照應するのも知れない。拱額中の坐佛は九體である。禪定佛であるが、衣はさきにいったごとく、二種が交互にならぶ。かなり頸がふとく、ながい。非常に特色のあるかたちで、第十九洞東脇洞の壁面千佛をおもはせる。

拱額のそとの比丘たちは、拱額が、はりすぎたために、小さく表現されてゐる。西の二つはいたんでゐるが、東の二つはよく残り、りっぱな顔をしてゐる。

本尊はわりに奥まつて彫りだされてゐる。顔面はすこしいたんでゐるが、充實したまる顔で實にすぐれてゐる。耳も長大である。手足もうつくしい。衣もこまやかな表現である。東龕の本尊とちがつて、足にかゝつた衣のすそが、八の字にひらき、そのあひだに、波がたの平行刻線をひく。そ

れがなんであるかは知りたい。(龕高2.20 m)

PL. 115 主室 南壁 第二層 西龕 佛上身

おいしいことに、顔にきずがある。けれども、それにもまして、この像はうつくしい。まるまると充実した面貌、長大な耳。目はわりにひらき、杏仁形。手のづくりも、充分にうつくしい。手の上には、まだ、歴々とした髻あとをみることができる。衣文のこまかいのも、また、ほかの像とちがふところである。(像高1.60 m)

PL. 116 主室 南壁 西部 腰壁、第一層

こゝにも大きな蓮華の束がある。これも下半は風化してゐるが、中央の繩に蓮瓣のかざりがついてゐない。風化は、はなはだしいが、中心の像が僧形であらうとは、からうじてその剃髪の前でわかり、またそれが半跏像であることも、わかる。腰壁とのあひだの唐草文帯は、第七洞の例から、輪つなぎであることが、やっと察せられる。腰壁の供養者は風化して見當もつかないが、東半の列像と同様であらう。(第一層腰壁高4.02 m)

PL. 117 主室 天井 全景

天井は六つの格間にわけられるが、その大きさは、かならずしも一定しない。概して北方がせまいやうであるが、これは北壁がまへのめり南壁が垂直であるからであらう。こゝには天井の全貌がみられるだけでなく、それが南壁につらなところ、北壁につづくところ、東西壁に接するところ、一望にしてわかることも、北壁上龕もみえ、また明窓の天井もみえる。明窓の天井には樹枝がのび、そのふちには拱梁の龍が蛇行してゐる。(全長6.80 m 全幅4.22 m)

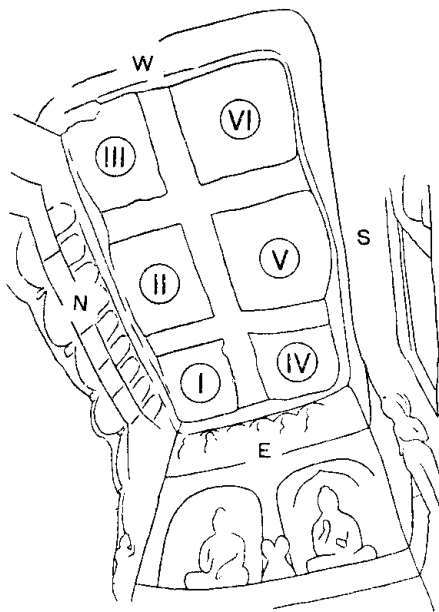


Fig. 16

PL. 118 主室 天井 東半

天井の東半、格間四つ分がみえる。第IV区は東がはの飛天二體がみえ、南がはの飛天一體のからだが見える。それらはみな上半身をおこして走つてゐるやうである。たゞ北がはの一體は脚をそろへて跳ねてゐる。第V区は東がはの二體がおよぐやうにしてとんでゐる。南がはと北がはも不十分ながらみえる。

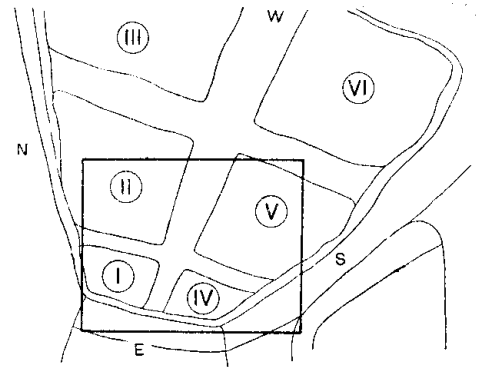


Fig. 17

中心の蓮華はよくみえる。むっくりとふくれた瓣が實に力づよい。そしてこれをかこんだ、八角形は、もはや形式化してごく浅い彫りにすぎないが、三角持送りの天井であることはいふまでもない。これは同時代にひろくおこなはれたもので、そのことは、終章(p.31)において、くはしくといた。第II区は東がはの一體がみえ、南がはと北がはは不十分にしかみえぬ。中央の蓮華はわりに小さい。第I区は東がは一體がよくみえ、南がはと北がはとはわづかにみえ、蓮華も半分のぞく。

梁上は東の蓮華を中心にした四方の飛天たちがななめにみえる。(東端3.65 m)

PL. 119 主室 天井 中南格間V

これは主として中南区Vがみえる。脚をそろへ上身をおこし、およぐやうな東がはの飛天。おなじやうに脚をなびかせながら、しかし一方の脚をはねあげて、うしろをふりかへつてとぶ南がはの飛天。北がはの二體はななめにしかみえない。

梁上は西の蓮華にむかふ南と東の梁の天人がみえる。南の梁の二體は脚をいきほひよくうしろにはね、一手をまへにさしのべてゐる。東の梁、つまり中央の梁には北を頭にして左右から相むかふ二飛天があり、東のは博山爐をもち、西のは

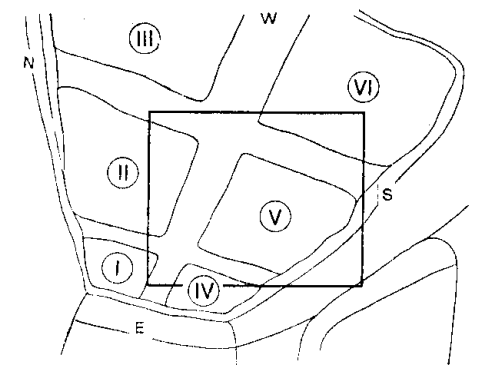


Fig. 18

合掌してゐる。シムメトリックではないが、よく照應してすきがない。梁上の蓮華も八瓣であるが、まはりは瓣のところがたまたま、まるい座がない。

第IV區東がはの二飛天、第II區南がはの二飛天も、かげのうちにうかんでゐる。(格間蓮華直径0.70m)

PL. 120 主室天井 中南格間V

これは中南區格間Vである。東がはの二體と南がはの二體とがよくみえる。三角持送りもこゝによくみえる。南がはの二體は

天井をはみだして、南壁の上の框までのりだしてゐる。その南壁上縁の壁の起伏あるさま

をみよ。決して建築的な正確さは、この石窟のどこにもとめられない。黒いところはみな朱である。(格間蓮華直径0.70m)

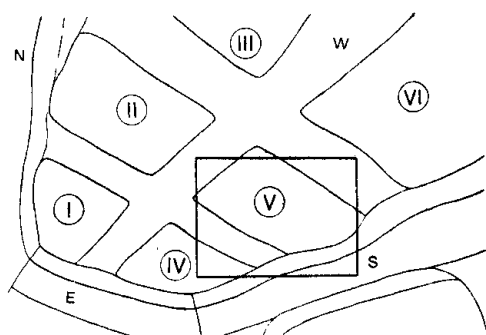


Fig. 19

PL. 121 主室天井 中南格間V

おなじ中南區であるが、南がはのほかに、西がはの二飛天がみえる。一體は右手を腰におき、左手でなにかささげてゐる。他の一體は両手でなにかまるいものを捧じてゐる。そして香爐を捧する北がは飛天の一部がわづかにみえてゐる。

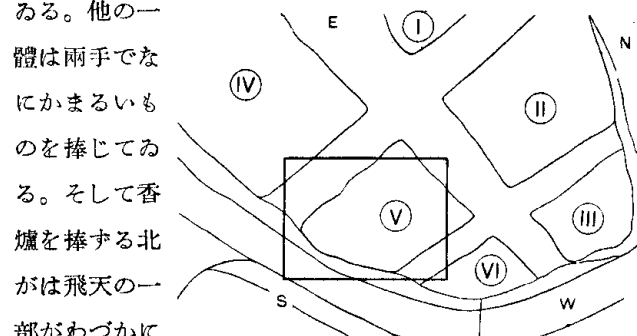


Fig. 20

(格間蓮華直径0.70m)

PL. 122 主室天井東梁南半

これは東の梁の南半分で

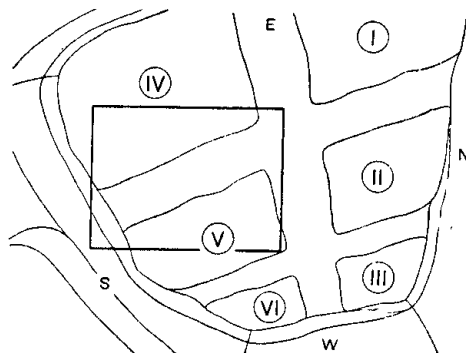


Fig. 21

ある。格間VとIVとにまたがつてゐる。二體の天人が一は合掌し、他はたかく手をあげてとんでゐる。前者は腰と膝で二度折れ、後者は腰で一度だけ折れてゐる。その胸と手を一直線にのばし、脚を一直線にしたすがたは實に力づよい。(東梁全長3.90m)

PL. 123 主室天井 東南格間IV

天井東南隅IVである。西がはの二體と南がはの一體とがよくみえてゐる。北がはの二體もわづかにみえる。これらの三體はみな股をひろげ、走つてゐるやうである。前圖版の南がはの一體もはしつてゐる。股をひろげてゐるため、下裳が二つにわれてみえる。あたかも椅子のやうであるが、これは決してさう解

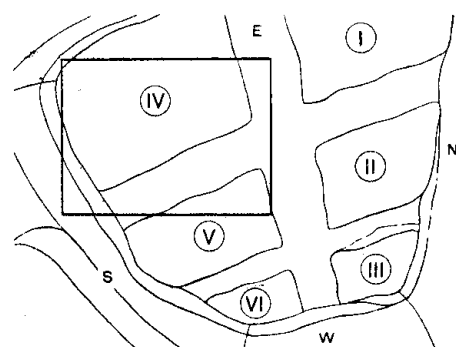


Fig. 22

すべきではなからう。この股をひろげるとぶ飛天はこゝ數體だけである。ほかで、まつたくみられない。だからたまたま、この天井の作者たちが飛天をかういうふうに表示したことからおこつた服裝上の破綻とおもふ。その證據に股になつてゐるが、ゆるやかでほかの下裳とすこしもちがはないのである。それにしても、この彫刻家たちは下裳をむすぶ紐を、ばかに大きくして、はでにひるがへしてゐる。とにかく、こゝ數人の飛天はそのとび方、服裝がかなり特異である。(格間蓮華直径0.47m)

PL. 124 主室天井 西南格間VI

これは西南の格間IVである。東がはに二飛天、南がはと北がはに、それぞれ一體づゝの飛天がみえ、西がはの二體もわづかにみえる。

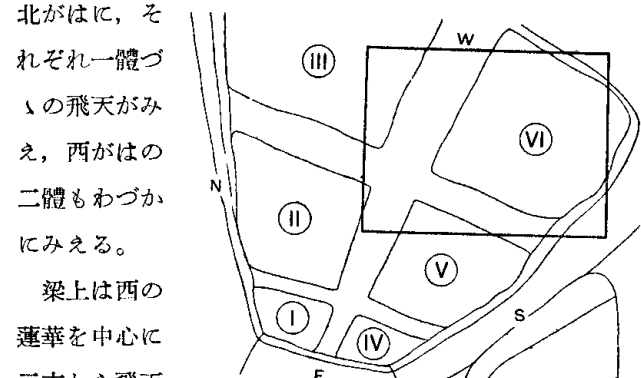


Fig. 23

梁上は西の蓮華を中心に三方から飛天がこれにむかつてゐる。西からの二天も合掌し、下身をつよくはねあげ

てゐる。(格間蓮華直径0.55m)

PL. 125 主室天井西南格間VI

前圖とおなじ西南の格間VIである。東がはの二天が合掌して、なにかふつくらししたものを捧げてゐる。上身をつよくおこし、下身をながくよこたへて、いかにもいきほひよく空中をとぶやうである。南がはの飛天は顔がこはれてゐるが、おとなしく定型的な姿態でとんでゐる。まへにだした左手には、なにかもつてゐるやうである。西がはの飛天がわづかにみえるが、北がははこゝではみえない。(格間幅1.32m)

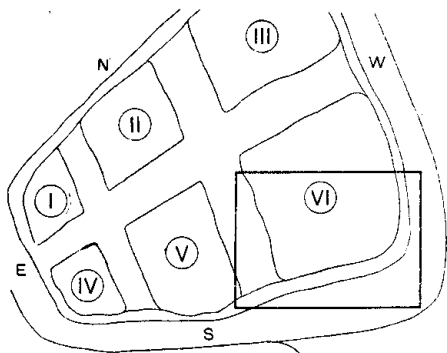


Fig. 24

PL. 126 主室天井西南梁

西南の格間VIと中南の格間Vとのあひだにある梁である。つまり西梁の南半である。梁上二體の天人が北の蓮華にむかつてとんでゐる。うしろの天人の脚のつよいはねかた、まへの天人の手ののばしかたも、これに應じてつよい表現をもつ。二體一群の表現が實に間然するところがない。(梁長1.73m 梁幅0.60m)

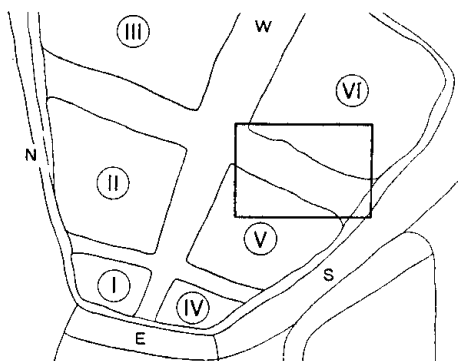


Fig. 25

PL. 127A 主室天井西半

B 主室天井中北格間II

A. こゝではひろく天井の西半がみえる。西の梁上の蓮華を中心に格間IIIとIIがむかつて右に、格間VIとVが左にみえる。いたんでゐるけれども、格間IIとVIの西がはを特にしめす図版である。格間IIは一體。格間VIは二體の飛天であるが、よこにのびて、かろやかにとんでゐる。格間Vの

二體の、のびやかな飛天に應ずるやうに、格間Vの勢のよい飛天がたちむかつてゐる。(西梁全長3.90m)

B. 中北

の格間IIの西がはの飛天をちかよせたところである。脚をひろげ手をあげ、まさに地上をはしるすがたである。左手は胸にかゝへてゐる。こゝで注意されるのは、二つにわかれた下裳であるが、これには三角形の垂飾がさがつてゐる。しかしこれも繪そらごと。脚のぐあひで、下裳をひらいたため、その中間をうめるために、かういふ垂飾をつけたものとかんがへられる。(格間蓮華直径0.53m)

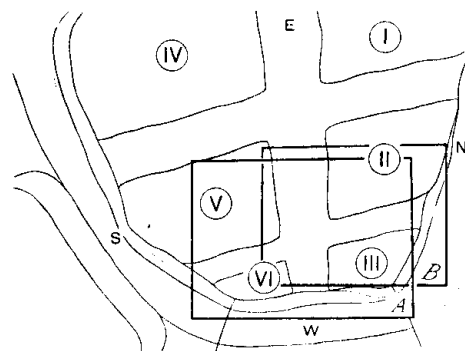


Fig. 26

PL. 128 主室天井中北格間II

前圖とおなじ中北の格間IIを逆の方向、すなはち西方、らみたものである。東がはには一體の飛天が手をのばしか脚をうしろにはねあげてとんでゐる。北がはには、むかひあつた二飛天が、珠のやうなものを、兩方からのばした手でさゝげてゐる。南側には西にむかつてとぶ二飛天があり、西梁の北半、蓮華にむかふ二飛天が、こゝでは、はっきりとあらはれてゐる。梁上の蓮華もうつくしい。(格間蓮華直径0.53m)

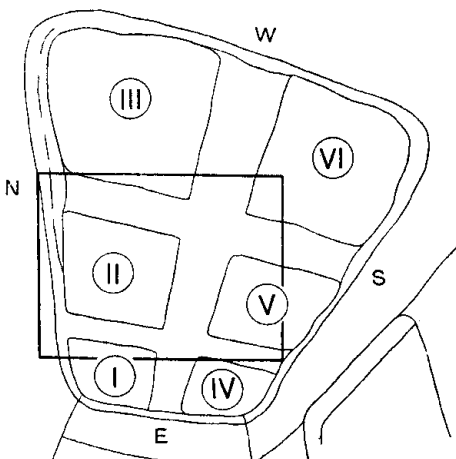


Fig. 27

PL. 129A 主室天井東南格間IV

B 主室天井中北格間II

A. 東南の格間を西よりみたものである。東がはの二體と、南がはの一體の、異様なとび方がよくわかる。それから北がはの二體もななめにではあるが、みえてゐる。(格間蓮

華直径0.47m)

B. これは PL. 128 のクロウズアップである。格間II東がはの天人は、からだを二度に折り、左手をのばし右手を胸にあててとんでゐる。左手にも、右手にもなにかもつてゐるらしい。服装をいへば下裳と腕にかかる天衣である。頸かざりは板状のもの、X字形にかけた瓔珞があり、上膊と手首に腕輪

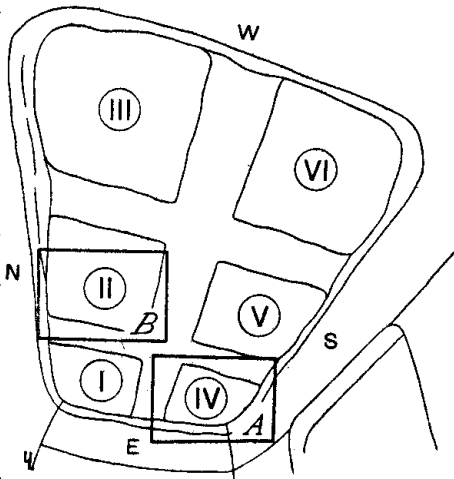


Fig. 28

がある。この服装は、天井のどの天人にも通用する。(格間蓮華直径 0.53m)